

ウパニシャッドと初期仏典の一接点

—— 入門・受戒の儀礼とブラフマチャリヤ ——

梶 原 三 恵 子*

はじめに

- 1 ヴェーダ入門儀礼とブラフマチャリヤ
 - 1.1 brahmacārín と brahmacārya
 - 1.2 『リグヴェーダ』の brahmacārín
 - 1.3 『アタルヴァヴェーダ』の brahmacārín と brahmacārya
 - 1.4 初期・中期ヴェーダ文献にみられる入門儀礼
 - 1.5 ブラフマチャリヤと性的禁欲
 - 1.6 ウパニシャッドの入門儀礼 ——「学者たちの入門」
- 2 初期仏典の入門儀礼とブラフマチャリヤ
 - 2.1 初期経典の教説部分にみられる仏陀への入門
 - 2.2 初期経典の仏伝部分にみられる仏陀への入門
 - 2.3 初期律典の仏伝部分にみられる仏陀への入門
- 3 ウパニシャッドの入門儀礼と初期仏典の仏陀への入門
 - 3.1 未曾有の教えを求めての入門
 - 3.2 初期仏典の仏陀への入門とブラフマチャリヤ
 - 3.3 善来具足儀礼の形成

む す び

は じ め に

古代インドでは前六-五世紀前後に思想史上の大きな動きがいくつか興った。社会の中枢を占めていたヴェーダの宗教（いわゆるブラフマニズム）において、ブラフマナ文献新層からウ

* かじはら みえこ 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

パニシャッド文献にかけて、秘儀的な祭式や革新的な思弁が次々と創出された。一方この頃に、ヴェーダ祭式を基盤とする思想を批判し、バラモン¹⁾を中心とする社会から離脱してこれと対抗する思想勢力も現れた。その代表的なものの一つが仏教である。仏教がどのように思想と集団を形成し発展させていったかを解明することは、インド学の重要課題の一つとして認識されてきた。

ヴェーダの入門儀礼と仏教の入門儀礼

本稿では、ヴェーダの宗教と初期仏教の接点を、ウパニシャッド文献および初期仏典にみられる入門儀礼の描写の比較という視点から探る。

ヴェーダの宗教における入門儀礼は、初期ヴェーダ文献『アタルヴァヴェーダ』(前十世紀頃)から言及がみられる。ヴェーダ入門儀礼とは、一義的にはヴェーダ²⁾を師から教わるために行うものである。入門儀礼と入門後のヴェーダ学習は、ヴェーダ伝承の継続性を担保する社会的装置として、ブラフマニズム社会にとって重要な役割を果たしていた。このヴェーダ入門儀礼は、本質的に二つの面、すなわち、入門者をヴェーダの知識にあずかる者として新たに「誕生」させる通過儀礼という面と、学習を開始する手続きとしての学習儀礼という面とをあわせもつものであった(梶原 2003a; in press)。

ヴェーダの宗教における入門儀礼の形式は、『アタルヴァヴェーダ』から後期ヴェーダ文献に至るまで、古い形を継承しつつ新しい要素を加えて増広され、段階的に発達を続ける³⁾。儀軌の完成形が示されるのは後期ヴェーダに属するグリヒヤスートラ群(Gṛhyasūtra, 家庭祭式綱要書, 前三世紀頃)においてである。グリヒヤスートラでは入門儀礼は入門式(Upanayana)とよばれ⁴⁾、現存する全18学派のテキストに詳細な儀軌の規定がある。学派によって儀礼行為の数や順序、用いられる祭文などにある程度の差異はみられるものの、核となる一連の儀礼行為はほぼ共通しており、前三世紀頃までには一定の形式の入門儀礼がブラフマニズム内部で確立していたことを示している。

一方、仏教の入門儀礼は一般には受戒儀礼とよばれる。受戒儀礼の詳細を最初に規定したのは、前三世紀頃以降に諸部派内で編纂された初期の律典である。初期律典は、数種類の受戒方法を列挙した上で、白四羯磨(ñatticatuttha kamma: 受戒を希望する者について、推薦者が僧伽に対してその旨を一度表白し、是非を三度問うことで承認を得る儀礼)とよばれるものを受戒儀礼の完成形として規定する⁵⁾。白四羯磨による受戒儀礼は、僧伽の構成員の承認を得る(通例は十師[七師三証]の承認が必要とされる)という形式が示すように、僧団への加入儀礼という面が顕著である。

ウパニシャッドにみられる入門儀礼と仏陀への入門儀礼

上述のとおり、ブラフマニズムの通常の入門儀礼は、初期ヴェーダ文献『アタルヴァヴェーダ』から後期ヴェーダ文献グリヒヤーストラまで連続的に発達をとげるが、中期ヴェーダに属するブラーフマナ文献の新層およびそれに続くウパニシャッド文献（以下では便宜上ウパニシャッドと総称する⁶⁾）には、そうした通常のヴェーダ入門儀礼とは意義と形式をやや異にする、独特の入門儀礼が現れる。ウパニシャッドは、当時創出されつつあった秘儀的な祭式や革新的の思弁を学ぶために、バラモン学匠たちが師を探訪して入門し教えを乞うたという物語をいくつも伝えている。詳細は後述するが、この種の物語に登場するバラモン学匠たちはすでに通常のヴェーダ学習を修了している知識層の学者たちであるから、物語の中で彼らが受ける入門儀礼は、通常の入門儀礼とは異なる、いわば「学者たちの入門の儀礼」とよぶべきものである（梶原 2003a; in press）。

一方、ブラフマニズム外の宗教である仏教においては、入門儀礼は一般には前述のとおり、律典に定められた作法で仏教徒としての戒律を受けて僧団に加入する受戒儀礼をいう。ただし、本稿で論じるのは、そうした組織的な受戒儀礼が成立する以前に行われていたであろう、仏陀⁷⁾その人に直接入門する⁸⁾儀礼である。初期仏典には、人々が仏陀に入門する場面を伝える説話が数多く収められている。本稿では、それらの説話群にみられる、仏陀が人々に教えを説き、それを聞いた人々が仏陀という一人の師の弟子になることを願い出る、という場面に描かれている儀礼を扱う。

重要かつ興味深いのは、ウパニシャッドにみられるバラモン学匠たちの秘義を学ぶための入門の場面と、初期仏典にみられる仏陀への直接の入門の場面が、きわめて相似する枠組みと文言で語られている点である。描写される入門儀礼の形式もまた相似している。鍵となるのは、ウパニシャッドと初期仏典の入門申し込みの場面に共通して現れる、「私は〔先生に〕入門したい」「君は〔弟子として私のもとへ〕来い」という言葉のやりとりと、ブラフマチャリヤ⁹⁾という語である。

本稿の構成と論点

本稿では、まず初期・中期ヴェーダ文献における通常のヴェーダ入門儀礼を概観し、その後、ウパニシャッド独特の「学者たちの入門」の形式と意義を論じる。次に、初期仏典における仏陀への直接の入門の形式を検証する。その上で、通常のヴェーダ入門儀礼とはやや異なるウパニシャッドの「学者たちの入門」の儀礼と、初期仏典にみられる「仏陀に直接申し込む入門」の儀礼を比較し、両者が意義の上でも形式の上でも対応していることを示す。最後に、ウパニシャッドの入門儀礼がどういう背景のもとで行われたかという観点から、初期仏典にウパニシャッドの入門儀礼と相似する受戒儀礼が語られた経緯を考察し、受戒儀礼の源流の一部が

ヴェーダ入門儀礼の展開の文脈上にあったことを論じる。

ウパニシャッドの入門場面と初期仏典の仏陀への入門場面は、いずれも物語形式をとっているという点で資料としての扱いに注意を要する。特に仏典は、現存するテキストが仏滅後しばらく経った前三世紀以降に各部派内で編纂されたものであり、初期とされる文献にも仏陀在世時より後の要素が入っている可能性があることと、仏陀を頂点とする宗教文献という性質上、仏陀の伝記事項に関する記述に後代の誇張や創作が混入しやすいことから、仏陀自身の行跡を必ずしも常にそのまま伝えているものとみることとはできない¹⁰⁾。本稿はこの点に注意を払いつつ、文献が伝えている入門儀礼の内容とそこに用いられている文言に焦点をあてて検討する。ウパニシャッドと初期仏教という二つの宗教伝統において、どういう経緯で平行する意義と形式の入門儀礼がテキストの語りの枠組みを構成することになったかという視座から、ウパニシャッドと初期仏典の一接点を明らかにすることが本稿の目的である。

1 ヴェーダ入門儀礼とブラフマチャリヤ

1.1 brahmacārín と brahmacārya

ヴェーダ入門儀礼に最初に言及する文献は『アタルヴァヴェーダ』である。入門儀礼を経た者はブラフマチャーリン (brahmacārín-「ブラフマン¹¹⁾に携わる¹²⁾者」) とよばれる。

brahmacārín という語は、『リグヴェーダ』最終巻に一例現れ (後掲 RV 10.109.5), 『アタルヴァヴェーダ』以降はヴェーダ文献に頻繁に登場する。また、この語と形の上で対^つになっているブラフマチャリヤ (brahmacārya-「ブラフマンに携わること」) という語が『アタルヴァヴェーダ』以降に現れる¹³⁾。「ブラフマンに携わる者」「ブラフマンに携わること」は、いずれも「ブラフマン (実現力を持つ聖なる言葉 [の霊力])」というヴェーダ文化における重要概念と直接結びついていることから、ヴェーダの宗教にとって重要な行いをなす者および行いをさしていたとみられる。

以下に見ていくように、brahmacārín は入門儀礼の文脈において「師」(ācārya) との強い結びつきを示すため、現代語では「学生、弟子」(“a Vedic student; a religious student; der Brahmschüler”) と翻訳されることが多い。ただし brahmacārín の語が具体的に何をさすかは、テキストの時代層および文脈によってある程度の振幅がある。通底するのは何らかの生活制限を遵守している者をさすことである。本稿が扱う範囲ではこの語は、入門と聖典学習の文脈では「学習を含む務めに励む修行生活を行う者、学生、弟子」、入門・学習と無関係の文脈では「ある種の苦行に励む修行生活を行う者、特に性的に禁欲している者」をさす¹⁴⁾。文脈によって語意に幅があるのは brahmacārya も同様である。これらの語について、本稿では特に入門の文脈における用例に焦点を絞って検討する。

1.2 『リグヴェーダ』の brahmacārín

『リグヴェーダ』における brahmacārín- の唯一の用例は、同文献最新層の第 10 巻に現れる。この語を含む同じ詩節が『アタルヴァヴェーダ』にも収録されている。いずれにおいても、この詩節を収めているのは「バラモンの妻」を主題とする讃歌である¹⁵⁾。

Rgveda 10. 109. 5 (935. 5) = Atharvaveda Śaunaka 5. 17. 5; Paippalāda 9. 15. 5

brahmacārī carati véviṣad viṣaḥ sā devānām bhavaty ékam āngam /
tēna jāyām ānv avindad bṛhaspātīh sōmena nītām juhvām ná devāh //

ブラフマチャーリンは繰り返し奉仕¹⁶⁾し続けつつ動き回る。彼は神々の一つの肢となる。彼によってブリハस्पティはソーマに連れ〔去〕られた妻を見出した、ソーマによってジュフー祭匙を〔見出した〕ように、神々よ。

『リグヴェーダ』にはこの一例しかいないため、このブラフマチャーリンがどういう存在であるかを決定することは難しい。この詩節からわかるのは、ブラフマチャーリンが「繰り返し奉仕」することと、おそらく「動き回る」者でもあるということである¹⁷⁾。

1.3 『アタルヴァヴェーダ』の brahmacārín と brahmacārya

1.3.1 『アタルヴァヴェーダ』の brahmacārín

『リグヴェーダ』に次いで古い『アタルヴァヴェーダ』以降、brahmacārín- の用例は増えていく。『アタルヴァヴェーダ』における brahmacārín についてのもっともまとまった資料は「ブラフマチャーリン讃歌¹⁸⁾」である。この讃歌は brahmacārín を、苦行 (tāpas) と乞食 (bhikṣām ā bhr̥) によって師 (ācāryā) を養い支え、ブラフマンの知識 (brāhmaṇa) を独占し、薪 (samidh), 帯 (mekhalā), 黒羚羊の毛皮、鬚を身につけている者として描写している。特に強調されるのは、ブラフマチャーリンと師、ブラフマン (brāhman), ブラフマンの知識、薪との結びつきである。

ブラフマチャーリンと師の関係の緊密さは、入門の場面を謳う次の詩節に端的に表れている。師は入門者を自分の胎児として三夜の間「妊娠」した後、ブラフマチャーリンとして生み出すといわれる：

Atharvaveda Śaunaka 11. 5. 3; Paippalāda 16. 153. 2

ācāryā upanāyamāno brahmacārīṇaṃ kṛṇute gārbham antāḥ /
tām rātrīs tistrā udāre bibharti tām jātām drāṣṭum abhisāmyanti devāh //

師はブラフマチャーリンを〔自らのもとへ〕入門させながら、内側で〔自分の〕胎児とす

る。[師は] 彼を三夜、腹の中に保つ。[彼が] 生まれると、神々は彼を見るために彼のところへ集まっていく。

ブラフマチャーリンにとって、入門させてくれる師は生みの親であり、ブラフマチャーリンになることの前提として不可欠な存在である¹⁹⁾。入門時に師から誕生するという観念は、中期・後期ヴェーダ文献を経て後代まで受け継がれる²⁰⁾。

一方、ブラフマチャーリンとブラフマン、ブラフマンの知識との結びつきの緊密さは、特に次の二詩節に示されている：

Atharvaveda Śaunaka 11. 5. 10-11 ; Paippalāda 16. 153. 10-16. 154. 1

arvāg anyāḥ parō anyō divās pr̥sthād gūhā nidhī nīhitau brāhmaṇasya /

tāu rakṣati tāpasā brahmacārī tāt kévalaṃ kṛṇute brāhma vidvān //

arvāg anyā itō anyāḥ pr̥thivyā agnī samēto nābhasi antarémé /

tāyoḥ śrayante raśmāyō 'dhi dṛdhās tāt ā tiṣṭhati tāpasā brahmacārī //

一方は此方に、もう一方は天の背の彼方に、ブラフマンの知識 (brāhmaṇa) の二つの蓄えは秘密裡に蓄え置かれた。それら二つを苦行によってブラフマチャーリンは守る。[彼は] ブラフマンを知っていてそれを独占する。

一方は此方に、もう一方はここから、[この] 大地から、二つの火が天地の中間へやってきて出会う。それら二つ [の火] の上に光線たちが寄りかかる。それら (光線たち) の上に苦行によってブラフマチャーリンは立つ。

ここではブラフマチャーリンは、天地に二分されて隠された「ブラフマンの知識」の独占者とされている²¹⁾。天地からやってきて出会う二つの火は、直前の詩節にある、天上と地上に秘密裡に蓄え置かれた二つの知識に対応しているとともに、この讃歌の背景にある太陽崇拜、およびブラフマチャーリンと「薪」との強い結びつきとも関連している²²⁾。

この讃歌が描くブラフマチャーリン像は、師から誕生して師を支え、秘密なる言葉の知識に携わり、薪を介して祭火に関与する、「師」に対応する存在としての「学生、弟子」である。苦行や乞食という要素が言及されることから、苦行的な修行生活を送っていたとみられる。『アタルヴァヴェーダ』の他の讃歌ではブラフマチャーリンは、繰り返し奉仕し続けつつ動き回る者、死神に属しそのために働く者、知力 (medhā) を最初に飲む者と描写され、また、一連の諸存在のペア (火と大地、風と中空、太陽と天、月と星座など) の中でブラフマンと対になる存在として、あるいは牛や馬と並ぶ財産の一部として列挙され、来るように (おそらく師に) 呼びかけられ、入門儀礼祭文で師に「おまえは私のブラフマチャーリンである」と呼ばれる²³⁾。

いずれの用例も、師の存在を前提に苦行的修行生活を行じている「学生、弟子」をさすと解して齟齬はない。

1.3.2 『アタルヴァヴェーダ』の *brahmacārya*

ブラフマチャリヤ (*brahmacārya*-) の語が現れるのは『アタルヴァヴェーダ』以降である²⁴⁾。同文献における用例のほとんどは「ブラフマチャーリン讃歌」に含まれる。この語はブラフマチャーリン (*brahmacārīn*-) と語形の上で対になっているから、基本的には「ブラフマンに携わること」「ブラフマチャーリンの行い」「ブラフマチャーリンであること」等を意味すると推定される。

ブラフマチャリヤを目的語にとる動詞には、『アタルヴァヴェーダ』では「住する (*vas*)」がみられ、ブラフマナ文献以降は「行う (*car*)」「入る (*upa-i*)」「[師のもとでのブラフマチャリヤに] やって来る (*ā-gam, ā-gā*)」「[師が入門者をブラフマチャリヤに] 導き入れる (*upa-nī*)」が加わる²⁵⁾。総合するとブラフマチャリヤは、そのために師のもとへやって来、師に導いてもらって入り、一定の期間をかけて（「住する」）、行う、という性質の行いなし生活をさすことになる。実際にブラフマナ文献以降では、「師のもとでの修行生活」という解釈があてはまる例が多い。

ただし、『アタルヴァヴェーダ』におけるブラフマチャリヤの用例には、「師のもとでの修行生活」という解釈に明確にあてはまるものはみられない。同文献における全用例を通覧すると、「住する」という動詞とともに現れる例があること、願望を叶えるある種の力をもつものとして言及されていることから、狭義の「師のもとでの修行生活」に限定されない、より広義の修行生活をさしているようである。

「ブラフマチャーリン讃歌」では、全 26 詩節のうち 3 詩節 (AVŚ 11. 5. 17-19; AVP 16. 154. 7-9) にブラフマチャリヤが言及される。この 3 詩節ではブラフマチャーリン以外の存在が主語となる。すなわちブラフマチャリヤは、それによって王が王国を守り、師がブラフマチャーリンを求め²⁶⁾、少女が夫を見出し、役牛と馬が餌をかちとり、神々が死を打ち払い、インドラが神々に太陽光を運んでくるものと謳われる。たとえば、

Atharvaveda Śaunaka 11. 5. 18; Paippalāda 16. 154. 8

brahmacāryeṇa kanyā yuvānaṃ vindate pátim /

anaḍvān brahmacāryeṇāśvo ghāsām jīgīṣati //

ブラフマチャリヤによって、少女は夫となる青年を見つける。ブラフマチャリヤによって、役牛は「餌をかちとろうとする」。
[ブラフマチャリヤによって] 馬は餌をかちとろうとする。

この詩節のブラフマチャリヤは、師からの誕生を神々に見守られるブラフマチャーリンや、ブラフマチャーリンが守護し独占するブラフマンの知識と直接の関係があるとは考えがたい。より広義のなんらかの苦行ないし修行生活をさすとみるのが妥当である。

この種のブラフマチャリヤの具体的内容として、第一に想定しうるのは性的禁欲である。実際に、中期ヴェーダ以降にはこの語が狭義の性的禁欲をさす例が現れる²⁷⁾。しかし『アタルヴァヴェーダ』では、必ずしも狭義の性的禁欲のみに限定されていない。「ブラフマチャーリン讃歌」でブラフマチャリヤを行う主体として謳われるさまざまな存在（王、師、少女、役牛、馬、神々、インドラ）は、各々が独自の責務と目的を有している。彼らが目的達成のために行うブラフマチャリヤは、実践の主体によってある程度異なるのが自然である。少女が結婚相手を見出すために行うブラフマチャリヤは貞節を守る性的禁欲が主であろう。一方で、牛や馬が日々の餌を得るために意識的に性的禁欲を行うとは考えにくい。その場合のブラフマチャリヤは、牛馬の務めを果たすために行う生活、すなわち「[家畜としての] きびしい務めに励む生活」ととるのが適当である²⁸⁾。

以上をまとめると、『アタルヴァヴェーダ』では、ブラフマチャーリンは基本的に師、ブラフマン、およびブラフマンの知識と結びついた存在であり、「師に入門して知識を学ぶ者、学生、弟子」と解せる。一方、ブラフマチャリヤはそうしたブラフマチャーリンと必ずしも一対一に対応しておらず、「[学生・弟子の生活を含む] ある種の苦行的修行生活」という、より広い意味を示す²⁹⁾。

1.4 初期・中期ヴェーダ文献にみられる入門儀礼

1.4.1 『アタルヴァヴェーダ』の入門儀礼

ヴェーダ入門儀礼は、『アタルヴァヴェーダ』の時代にはすでに、複数の儀礼行為と祭文からなる初期形が成立していたとみられる。この点を論じた Kajihara 2004; 2009/2010; 2012; 2013 を要約すると、『アタルヴァヴェーダ』には、入門儀礼の構成要素として次の儀礼行為を直接間接に示す詩節が散在している³⁰⁾：

- (1) 衣を着せる
- (2) 石に登らせる
- (3) 長寿を願う
- (4) 古い衣を取り去る
- (5) 三夜の期間をおく
- (6) 入門者が師から誕生する
- (7) メーカラー帯をしめる

- (8) 師が入門者の手を握る
- (9) 師が入門者を神々に委ねる

これらの儀礼行為は、詩節のヴァリエーションとともに、ブラーフマナ文献の入門儀礼（1.4.2で後述）およびグリヒヤーストラの入門式へと継承される。

上記のうち (8) (9) の儀礼行為を示す祭文は『アタルヴァヴェーダ』最新層のパイッパラダ伝本第 20 巻に現れる。以下は (8)「師が入門者の手を握る」際の祭文である：

Atharvaveda Paippalāda Orissa 20. 53. 1-2ab ; Kashmir 20. 49. 1-2ab³¹⁾

dhātā te hastam agrahit savitā hastam agrahit /

mitras tvam asi dharmanāgnir ācāryas tava //

agner brahmacāry asi mama brahmacāry asi /

ダートリが君の手を握った。サヴィトリが〔君の〕手を握った。君はダルマによってミトラである。アグニが君の師である。君はアグニのブラフマチャーリンである。君は私のブラフマチャーリンである。

この祭文は、『アタルヴァヴェーダ』「結婚の歌」の、新郎が新婦の手を握る祭文が、入門儀礼用に作り変えられたものである³²⁾。結婚による夫と妻の結びつきと入門による師とブラフマチャーリンの結びつきの強さは同等とみなされていた³³⁾。

1.4.2 ブラーフマナ文献の入門儀礼とブラフマチャリヤ

ブラーフマナ文献では、『アタルヴァヴェーダ』にみられるものの一部に加え、新たな入門儀礼行為も現れる。『アタルヴァヴェーダ』からブラーフマナ文献新層にかけて整備されたヴェーダ入門儀礼は、その後さらに儀礼行為と祭文が拡充され、ヴェーダ後期のグリヒヤーストラ群において詳細な儀軌が規定されるに至る³⁴⁾。

ブラーフマナ文献の入門儀礼章（ŚB 11.5.4; KāṭhB [upanayana-brāhmaṇa]³⁵⁾）にみられる入門儀礼の概容は次のとおりである：

- (1) 入門者がブラフマチャリヤにやってきたことを告げる [ŚB, KāṭhB]
- (2) 師が彼の名を尋ねる [ŚB, KāṭhB]
- (3) 師が入門者の手を握る [ŚB]
- (4) ヴィアーフリティ（“bhūr bhúvaḥ svāḥ”）を唱える [KāṭhB]
- (5) 入門者を神々に委ねる [ŚB, KāṭhB]

- (6) 生活規範を訓示する [ŚB, KāthB]
- (7) 一年（ないし三夜など一年と等置される長さ）の期間をおく [ŚB, KāthB]
- (8) サーヴィトリ詩節³⁶⁾を教える [ŚB, KāthB]

入門者はまず「ブラフマチャリヤに私はやってきた」と宣言する。師は『アタルヴァヴェーダ』の入門儀礼祭文（1.4.1）の平行祭文を唱えて入門者の手を握り、彼に生活規範を訓示する：

Śatapatha-Brāhmaṇa 11.5.4.1, 2, 5 (ŚBK 13.5.4.1, 2, 5); cf. Kāṭha-Brāhmaṇa (upanayana-brāhmaṇa)³⁷⁾

brahmacāryam āgām ity āha./... brahmacāry āsānīty āha. ... // āthāsya hāstaṃ grhṇāti./
īndrasya brahmacāry āsy. agnir ācāryās tāvāhām ācāryās tāvāsāv ity. ... // brahmacāry
āsīty āha. /... apò 'śānēty. ... kārma kurv iti. ... samīdham ādhehīti. ... mā suṣupthā iti. ...
apò 'śānēty.

「ブラフマチャリヤに私はやってきた」と[入門者は]言う。……「私はブラフマチャーリンになろう」と彼は言う。……次に、[師は]彼（入門者）の手を握る、「君はインドラのブラフマチャーリンである。アグニが君の師である。私が君の師である、何某よ」と[言って]。……「君はブラフマチャーリンである」と[師は]言う。……「水[だけ]を飲め」……「務めを行え」……「薪をくべよ」……「[昼間に]眠るな」……「水[だけ]を飲め」と[師は言う]。

「ブラフマチャリヤにやってくる」と「ブラフマチャーリンになる」ことが等置されているので、ここでの「ブラフマチャリヤ」は「ブラフマチャーリンであること、その生活」をさすことがわかる。その内容は、水[だけ]を飲む³⁸⁾、務めを行う、[祭火に]薪をくべる、[昼間]眠らない、という生活制限を遵守することである³⁹⁾。入門の際に師がこれらの訓示を与える儀礼は、グリヒヤストラの入門式にも受け継がれる⁴⁰⁾。

ブラーフマナ文献の入門儀礼章では、上述のように、入門者にサーヴィトリとよばれる詩節が教えらる。これによって入門者に最初のヴェーダの知識が与えられることになる。この儀礼行為は新生児に言語能力を与えることと同義であると説明される：

Śatapatha-Brāhmaṇa 11.5.4.6, 12 (ŚBK 13.5.4.6, 12); cf. Kāṭha-Brāhmaṇa (upanayana-brāhmaṇa)⁴¹⁾

āthāsmāi sāvitṛīm ānvāha. / tām ha smaitām purā saṃvatsarē 'nvāhuḥ. saṃvatsarāsammi-

tā vai gārbhāḥ prājāyante. jātā evāsmiṃs tād vācam dadhma iti. /6/ ...

tād āpi ślōkaṃ gāyanti /

ācāryò garbhī bhavati hāstam ādhāya dākṣiṇam

ṛtīyasyām sā jāyate sāvitryā sahā brāhmaṇā iti /12/

次に、その者（入門者）に〔師は〕サーヴィトリを教える。かつて、それ（サーヴィトリ）を人々は一年後に教えたものだった、「胎児たちは一年たってから生まれるのだ。生まれたばかりのこの者（胎児）に言葉を我々は置くことになる」と〔考えて〕。……このことについて、また、人々は〔次の〕詩節を歌う：

「師は右手を置いて、胎児をもつ者となる。三〔夜〕目に彼（師の胎児）はバラモンとしてサーヴィトリと共に生まれる」と。

『アタルヴァヴェーダ』にもみられた師の胎児として生まれるというモチーフに、サーヴィトリ詩節を教えるという行為が結びつけられている⁴²⁾。

ブラーフマナ文献とウパニシャッドに言及されるブラフマチャーリンの生活の具体的内容には、入門の際に師に訓示される上述の生活制限の遵守に加え、師への奉仕（師の牛や祭火の世話など）と学習がある⁴³⁾。次の例では、ブラフマチャーリンが師の用事（ācāryakarman）と学習（adhyāya < adhi-i 「学習する⁴⁴⁾」）をして生活している：

Jaiminiya-Brāhmaṇa 2. 276

datvaś ca ha sautemanaso mitravic ca daṃṣṭradyumnas tau ha pratidarśasya vaibhāvata-sya śvaiknasya (Caland 1919: 194; śvaitnasya Raghu Vira and Lokesh Chandra ed.) rājño brahmacāriṇāv āsatuḥ. / taylor ha mitravid daṃṣṭradyumna ācāryakarman cakāra. gā ha sma rakṣati. / atha hetaro 'dhyāyam eva cacāra.

ダトヴァ・サウテーマナサとミトラヴィッド・ダムシュトラドユムナの二人は、シュヴィクナ王プラティダルシャ・ヴァイパーヴァタのブラフマチャーリンであった。二人のうち、ミトラヴィッド・ダムシュトラドユムナは師の用事をした。彼は〔師の〕牛たちを守ったものだった。そしてもう一人は学習のみを行った。

次の二例にはブラフマチャリヤと学習の結びつきがみられる：

Taittirīya-Saṃhitā 6. 3. 10. 5

jāyamāno vai brāhmaṇās tribhīr ṇavā jāyate brahmacāryeṇārṣibhyo yajñéna devébhyaḥ prajāyā pitṛbhya. eṣa vā anṇó yāḥ putrī yājvā brahmacārivāsī.

バラモンは生まれてくるときに三つの債務をもって生まれるのだ、聖仙たちに対してブラフマチャリヤ、神々に対して祭式、祖霊たちに対して子孫 [という債務を]。息子を持ち、祭式を行い、ブラフマチャーリンとして住する者が、債務のない者なのだ。

Śatapatha-Brāhmaṇa 1. 7. 2. 1-5 ; cf. ŚBK 2. 6. 4. 1-5

ṛṇām ha vai jāyate yó 'sti / sá jāyamāna evā devébhya ṛṣibhyaḥ pitṛbhyo manuṣyèbhyaḥ. /1/ sá yád evá yájeta / téna devébhya ṛṇām jāyate. tád dhy èbhya etát karóti yád enān yájate yád ebhyo juhóti. /2/ átha yád evānubruvítá / ténārṣibhya ṛṇām jāyate. tád dhy èbhya etát karóty. ṛṣīṇām nidhigopá iti hy ānūcānām āhúḥ. /3/ átha yád evá prajām icchéta / téna pitṛbhya ṛṇām jāyate. tád dhy èbhya etát karóti yád eṣām saṃtatāvyavacchinā prajā bhāvati. /4/ átha yád evá vāsáyeta / téna manuṣyèbhya ṛṇām jāyate. tád dhy èbhya etát karóti yád enān vāsáyate yád ebhyó 'śanaṃ dádāti. sá yá etāni sārvaṇi karóti sá kṛtākarmā. tāsya sārvaṃ āptām sarvaṃ jítām. /5/

債務を帯びて (ṛṇām) 生まれるのだ⁴⁵⁾、[この世に] 存在する者は、生まれてくるときに神々に対して、聖仙たちに対して、祖霊たちに対して、人間たちに対して。/1/ 彼は祭主としてまさに祭式を行うべきであるゆえに、神々に対して債務を帯びて生まれる。というのは、彼が祭主として彼ら（神々）に対して祭式を行い、彼らに対して献供を行うとき、彼は彼らに対してこれをなす（債務を弁済する）から。/2/ 次に、彼はまさに「ヴェーダを」学習すべきであるゆえに、聖仙たちに対して債務を帯びて生まれる。というのは、そのとき、彼は彼らに対してこれをなす（債務を弁済する）から。というのは、[ヴェーダを] 学習し終えた者のことを「聖仙たちの蓄えの守護者⁴⁶⁾」と人々はいうから。/3/ 次に、彼はまさに子孫を望むべきであるゆえに、祖霊たちに対して債務を帯びて生まれる。というのは、彼ら（祖霊たち）の子孫が永続した途切れないものになるとき、彼は彼らに対してこれをなす（債務を弁済する）から。/4/ 次に、彼はまさに「人間たち（客人たち）を」宿泊させるべきであるゆえに、人間たちに対して債務を帯びて生まれる。というのは彼らを宿泊させ、彼らに食物を与えるとき、彼は彼らに対してこれをなす（債務を弁済する）から。これら（債務）のすべてをなす者は、務めを果たした者である。その人によってすべては獲得され、すべては勝ち取られる。/5/

TS 6. 3. 10. 5 が「聖仙たちに対する債務」とするブラフマチャリヤの内容が、ŚB 1. 7. 2. 3 では学習 (anu-brū/anu-vac 「[師の] 後について唱える、学習する」) と明示されている。

1.5 ブラフマチャリヤと性的禁欲

前節でみたように、ブラーフマナ文献以降、ブラフマチャリヤの意味として「[入門儀礼で訓示された生活制限を遵守しつつ学習を含む務めに励む] 修行生活」が前面に出始める。一方で、『アタルヴァヴェーダ』にみられるような (1.3.2), より広義の修行生活の一種をさす例も引き続き現れる。

Chândogya-Upaniṣad 8.5.1

atha yad yajña ity ācakṣate brahmacaryam eva tat

さて、祭式と人々がよぶものは、ブラフマチャリヤにほかならない。

この箇所ではブラフマチャリヤは他にサットラアヤナ、沈黙行、断食、人里離れた場所に行くこと、と同置される (ChU 8.5.1-4)。一方、次の例では言い換えというより並列のニュアンスが強い：

Śatapatha-Brāhmaṇa 14.7.2.25 (=BĀU 4.4.22) ; Śāṅkhāyana-Āraṇyaka 13.1

tām etām vedānuvacanēna vividiṣānti / brahmacāryeṇa tāpasā śraddhāyā yajñénānāsake-
na ca

そういうこれ（アートマン）を、ヴェーダの学習によって人々は知りたいと願い、またブラフマチャリヤによって、苦行によって、信⁴⁷⁾によって、祭式によって、断食によっても[知りたいと願う]。

このように複数の語と並列されている場合は、ブラフマチャリヤがさす意味の幅はより狭くなっている可能性がある。しかしこの例ではまだ狭義の性的禁欲を限定的にさしているとは断定できない⁴⁸⁾。明白に性的禁欲のみを意味する用例が現れるのは後期ウパニシャッド以降である。次の一節はおそらく最初の例である：

Praśna-Upaniṣad 1.13

prāṇam vā ete praskandanti ye divā ratyā saṃyujyante / brahmacaryam eva tad yad
rātrau ratyā saṃyujyante /

昼間に性の交わりの喜びをもつ者たちは氣息を漏らす。夜に性の交わりの喜びをもつならば、それはブラフマチャリヤにほかならない（性的禁欲を守ったのと同じことである）。

後期ウパニシャッド以降のストトラ文献、およびポスト・ヴェーダ時代の各種サンスクリット

文献では、ブラフマチャリヤが狭義の性的禁欲をさす例は飛躍的に増加する。

要言すると、ヴェーダ文献においてブラフマチャリヤという語がもつ意味範囲は文脈によって幅がある。一般にいわれる「ヴェーダ学習」や「性的禁欲」という意味は、いずれか一方が強調される場合もあれば表面に現れない場合もある。たとえば『アタルヴァヴェーダ』にいわれる牛や馬のブラフマチャリヤは「[家畜としての] 務めに励む生活」をさす。一方、上掲の PraśU 1.13 ではブラフマチャリヤは狭義の性的禁欲をさしている⁴⁹⁾。ヴェーダ入門儀礼の文脈におけるブラフマチャリヤは、広義の修行から狭義の性的禁欲までの意味を各々ある程度含みつつ、師のもとでの学習にふさわしい修行生活をさしているとみるべきである。すなわち、「[性的禁欲を含む生活制限を遵守しつつ学習を含む務めに励む] 修行生活」と解釈するのが妥当である。

1.6 ウパニシャッドの入門儀礼 ——「学者たちの入門」

1.6.1 ヴェーダ入門儀礼とウパニシャッドの学者たちの入門

ヴェーダの宗教では、ブラーフmana文献新層からウパニシャッドにかけて、秘儀的な祭式や思弁が発達した。それらの記述の導入部に、著名なバラモン学匠や神々が入門儀礼を行う場面がしばしば現れる。有名な例に、ガウタマ仙が五火二道説を教わるために王族に入門する場面 (BĀU 6.2.7) や、アシュヴィン双神が祭式の頭の回復の秘義を教わるためにダディアンチュ仙に入門する場面 (ŚB 14.1.1.21ff) などがある。

これらの場面で語られる入門儀礼は、上述の『アタルヴァヴェーダ』からブラーフmana文献を経てグリヒヤストラへと発達していく通常のヴェーダ入門儀礼とは、意義と形式をやや異にする。通常のヴェーダ入門儀礼は人生最初の入門であり、「師から誕生する」という通過儀礼的要素が強調される。これに対してウパニシャッドで語られるのは、当時の名だたる知識人たちが、それまで知られていなかった秘義を学ぶために改めて行う、「学者たちの入門」とよぶべき独特の入門儀礼である。この種の入門では、入門儀礼のもつ機能のうち、師から知識を学ぶ手続きとしての学習儀礼の機能が前面にたち、通過儀礼的要素は表面に現れない (梶原 2003a: 5-6; in press)。この「学者たちの入門」の場面は、学識ある人物どうしが問答ないし対論を行った後、一方が他方の優越を認めて入門を申し出る、という形で語られることが多い⁵⁰⁾。

1.6.2 学者たちの入門の儀礼：入門の申し込み

ウパニシャッドに語られる「学者たちの入門」における入門の儀礼は、入門の申し込みと受け入れからなる簡素なものである。入門の申し込みは、

- (1) 入門者が薪を持って教えてくれる人物（師）のもとへ赴く

(2) 言葉で入門を願い出る

の二点ないしいずれか一点によって行われる。次の一節は、こうした「学者たちの入門」の場面を伝える最も古い箇所の一つである：

Śatapatha-Brāhmaṇa 10. 6. 1. 2; ŚBK 12. 6. 1. 2-3

té ha prātār āsaṃvidānā evā samītpāṇayaḥ prāticakramira úpa tvāyāmēti. // sá hovāca /
yān nū bhāgavanto 'nūcānā anūcānaputrāḥ kīm idām iti. té hocur, vaiśvānarām ha
bhāgavānt sampratī veda. tāṃ no brūhīti. sá hovāca, sampratī khālu nvā ahāṃ vaiśvānarām
vedābhyādhatta samīdha. úpetā sthēti. //

彼ら（バラモンたち）は翌朝、互いに同意しないまま、薪を手にして戻ってきた、「君に私たちは入門しよう（úpa-i）」と〔言って〕。彼（アシュヴァパティ王）は言った、「卿らは今や〔ヴェーダを〕学習し終えた者たちであり〔しかも〕学習し終えた者たちの息子たちであるというのに、これは何事か」と。彼らは言った、「卿はヴァイシュヴァーナラを完全に知っている。それを私たちに語れ」と。彼は言った、「確かに私はヴァイシュヴァーナラを完全に知っている。薪をくべよ。君たちは〔今や〕入門した」と。

『アタルヴァヴェーダ』およびブラーフマナ文献にみられる通常の入門儀礼は、前述のとおり複数の儀礼行為と祭文によって、師が入門者を新たに誕生させ、装束を調え、神々に委ねて守護を祈り、手を握りあわせて師弟関係を結ぶというもので、グリヒヤストラの複雑な儀軌に近い形式を整えている（1.4.1; 1.4.2）。これに対してウパニシャッドの「学者たちの入門」は、ここに引用した一節にみられるように、入門者が弟子入りの意志を表明するという一点に儀礼行為が集約されているところに特色がある⁵¹⁾。弟子入りの意志は「私は君に入門する」という簡潔な言葉と薪の持参によって示される。薪は『アタルヴァヴェーダ』以来ブラフマチャーリンの持ち物であり（1.3.1）、これを持参することが、学匠たちが一時的に学生・弟子の立場にたつ意志の表明となっている⁵²⁾。

1.6.3 学者たちの入門の儀礼：入門の受け入れ

一方、「学者たちの入門」の受け入れの作法は次の形が基本である：

(1) 師が言葉によって承認する。以下のヴァリエーションがある：

- (a) 入門を願い出たことを褒める言葉をかける
- (b) 「来い (ehi)」という言葉进行かける

- (c) 「入門させる」という言葉をかける⁵³⁾
- (d) 「君に教えよう」と言葉をかける
- (2) 薪を火にくべることを命じる
- (3) 一定期間、傍らに止住させる (ブラフマチャリヤ: 後述)

上に引用した ŚB 10. 6. 1. 2 にはこれらのうち (1c) (2) にあたる要素がみられる。

次の例では入門を乞う者に対して「来い (ehi)」と言葉をかける⁵⁴⁾：

Śatapatha-Brāhmaṇa 11. 5. 3. 13 (ŚBK 13. 5. 3. 10) (上記 (1a) (1b) (1c) による入門受け入れの例)

śauceyó jñaptáḥ / imāni samitkāsthāny. úpāyāni bhágavantam iti. sá hovāca, yád evāṃ nāvaksyo mūrdhá te vyāpatiṣyad. éhy. úpehíti. tathéti. táṃ hópaninye.

シャウチェーヤは「[そのようにアールニに] 教えられて、「ここに薪の木片達がある。卿に私は入門しよう」と[言った]。彼(アールニ)は言った、「もしそのように君が言わなければ、君の頭はばらばらに弾け飛んでしまっただろう⁵⁵⁾。来い。入門せよ」と。「そのように[しよう]」と[シャウチェーヤは答えた]。[アールニは] 彼を自らに入門させた。

Kauṣītaki-Upaniṣad 1. 1 (上記 (1a) (1b) (1d) による入門受け入れの例)

sa ha samitpāṇiś citraṃ gārgyāyaṇiṃ praticakrama upāyāniti / taṃ hovāca brahmārho 'si gautama yo na mānam upāgāḥ / ehi vy eva tvā jñapayīṣyāmīti //

彼(アールニ)は、薪を手にしてチトラ・ガールギヤーヤニのところへ戻った、「君に私は入門しよう」と[言って]。彼に[チトラ王は] 言った、「驕慢に陥らなかった君はブラフマンにふさわしい、ガウタマよ。来い。君に私は教えよう」と。

この種の場面のいくつかは、ヴェーダの権威であるはずのパラモンが、王族に教えを乞うという体裁をとっている。パラモンではない非伝統的師匠に教わるという語りの形は、入門後に述べられる教えの特殊性と新奇性を強調する効果をあげている⁵⁶⁾。

1. 6. 4 師のもとでの止住とブラフマチャリヤ

この種の「学者たちの入門」の場面は、物語の中では導入部分であり、本題は入門してから教わる内容のほうである。そのため、話の先を急ぐ場合は、入門の場面の後すぐに教えが開陳される。ただしいくつかの物語は、前述のとおり、教えを受ける前に入門者が一定期間師の傍らで止住したことを伝えている。

次の一節は、ウパニシャッドに名高いバラモン学匠ウッダーラカ・アールニの挿話の一つである。アールニの息子シュヴェータケートゥが、王族に秘義について問いかけられるも答えられず父のもとに戻る。アールニは自分も知らないと認め、次のように言う：

Brhad-Āraṇyaka-Upaniṣad 6.2.4-7⁵⁷⁾

prehi tu tatra pratitya brahmacaryam vatsyāva iti. . . upaimy aham bhavantam iti.

[アールニはシュヴェータケートゥに言った,]「しかし、行け、そこ（王がいるところ）へ戻って、私たち二人で〔王の弟子となって〕ブラフマチャリヤを住そう」と。……[アールニは王のもとへ赴いて言った,]「私は卿に入門する」と。

この一節は、アールニのようにすでに通常の入門と学習を終えて家長となり息子をもうけたバラモン学匠であっても、それまでに知られていなかった秘義を学ぶためには、教えてくれる人物のもとに赴いて入門し、ブラフマチャリヤを住することが行われていたことを示している⁵⁸⁾。彼の言葉から、「ブラフマチャリヤを住する」ことが入門と同義であったとわかる。

次の物語では、インドラ神がブラジャーパティ神のもとに薪を持って赴いた（すなわち「学者たちの入門」の儀礼を行った）後、後者のもとに三十二年間住したと語られている（インドラはその後にもブラジャーパティに入門をくりかえし、合計四回、あわせて101年住する）。この止住は「ブラフマチャリヤを住する」と表現される：

Chāndogya-Upaniṣad 8.7.2ff.

indro haiva devānām abhipravavrāja virocana 'surānām / tau hāsaṃvidānāv eva samitpāṇi
prajāpatisakāśam ājagmatuḥ // tau ha dvātrimśataṃ varṣāṇi brahmacaryam ūṣatuḥ /... /
etaṃ tv eva te bhūyo 'nuvyākhyāsyāmi / vasāparāṇi dvātrimśataṃ varṣāṇīti / sa hāparāṇi
dvātrimśataṃ varṣāṇy uvāsa /

神々の中からはインドラが〔代表としてブラジャーパティのもとへ〕出かけた、アスラたちの中からはヴィローチャナが。両者は互いに同意することなく、薪を手にしてブラジャーパティのいるところへやってきた。彼らは三十二年間ブラフマチャリヤを住した。……「そのことを君にもっと私は説明しよう。さらに三十二年間住せよ」と〔ブラジャーパティはインドラに〕言った。彼（インドラ）はさらに三十二年間〔師たるブラジャーパティのもとでブラフマチャリヤを〕住した。

一定の期間ブラフマチャリヤを住することが、新たに教えてもらうための条件とされている⁵⁹⁾。「ブラフマチャリヤを住する」という表現は、たとえバラモン家長や神々であっても、その期

間はブラフマチャーリンに課される義務と生活制限を遵守して生活することを意味する。秘義を教える前に一定期間（多くの場合一年）止住する（vas）ことを要求する例は、ブラーフマナ文献新層、アーラニヤカ、ウパニシャッドに複数みられる⁶⁰⁾。

以上のように、ウパニシャッドの「学者たちの入門」では、すでに通常のヴェーダの知識を有している人々が、プラヴァルギヤ祭や五火二道説など、当時新しく現れた祭式や思弁の秘義を学ぶために、改めて入門する。入門の儀礼は通常の入門とは異なりきわめて簡素で、入門者の「私は君に入門する」という申し込みの言葉と薪の持参、師の「来い（ehi）」「教えよう」という受け入れの言葉によって行われる。師の立場にたつのはバラモンとは限らず、王族などが逆にバラモンに教える場合もある。入門後は師のもとに一定期間止住することが求められる。この期間ないしこの期間の修行生活はブラフマチャリヤとよばれ、学匠たちや神々も学びの準備として「[性的禁欲を含む生活制限を遵守しつつ務めに励む]修行生活」を（一時的に）住する⁶¹⁾。

2 初期仏典の入門儀礼とブラフマチャリヤ

前章で論じたように、ブラーフマナ文献新層からウパニシャッドにかけての時代には、ヴェーダの宗教思想が一段と発達し、知識層のあいだでさまざまな対論や論争が行われた形跡がある。この時期に、祭式を中心とするヴェーダの宗教から離れていく思想方向も模索された。代表的なものの一つが仏教である。初期仏典には、知識を探求する人々が仏陀から教えを聞いて仏陀に直接入門する⁶²⁾場面が数多く収められている。そこに描かれている仏陀への入門は、本章で詳述するように、前章でみたウパニシャッドの「学者たちの入門」に相似している。

本章では初期仏典にみられる仏陀その人に直接申し込む入門の儀礼を検証する。本章で扱う資料は二種類にわかれる。

一つは初期經典の教説部分に散在する、仏陀への入門申し込みの記述である。仏陀によって教えが説かれた後、それを聞いた人が仏陀に入門を申し込むという形で語られる。資料の多くは定型化した文章からなり、平行表現および類似の文言が、多くの經典の特に結びの箇所に見れる。

二つめは初期經典および初期律典の中の仏伝的要素をもつ部分である。本稿が問題にする、仏陀が弟子を直々に受け入れる場面は、仏伝の重要なモチーフである。仏陀の生涯の出来事として一般に仏伝を構成する説話のうち、仏陀直々の弟子受け入れを記述するのは、主に成道直後から初転法輪の少し後までの部分である。本稿では仏伝的資料を、初期經典に含まれるものと初期律典の受戒規定の章（受戒捷度）に含まれるものとに分けて検討する。両者には共通する説話や文言が多いが、受戒捷度では各種受戒形式の成立史の文脈で語られるため、記述がよ

り整理され筋道立ったものとなっている。

現存の初期仏典は、仏陀入滅より後に編纂され複数の部派によって伝承されてきたものであるため、各テキストの新旧や前後関係を決定することは容易でない。さらに、本稿が扱う仏陀への入門の場面は、各経典の中では主に本文の教説部分の外側に位置する枠物語の部分にあたるから、入門場面の描写の新旧が本文部分の内容の新旧と一致しているとは限らない。本稿では、一般に古いと認められている資料を中心に扱うよう努めつつ、個別のテキストの年代と前後関係に関する議論は最小限にとどめ、「仏陀による教えの開陳をうけて聞き手が入門を申し込む」という場面の典型的な例を、いくつかのパターンに分類して検証する。

初期仏典においてもブラフマチャリヤという語が少なからず現れる。ヴェーダの宗教に由来するこの「ブラフマンに携わること」という語を、初期仏典はどういう意味で用いたのか。この問題については、本稿では特に仏陀への入門という文脈での用例に焦点を絞って検討する。

2.1 初期経典の教説部分にみられる仏陀への入門

2.1.1 仏陀のもとでのブラフマチャリヤ

Suttanipāṭa (Sn) 第5章「彼岸への道の章 (Pārāyanavagga)」は、初期仏典のなかでも特に古いとされるテキストのひとつである。この経典は16人のバラモンが仏陀に質問して答えてもらうという形式で語られる。

場面設定は次のとおりである (Sn 976-1026)。マントラに通暁したバラモン (brāhmaṇo manta-pāragu: Sn 976) であるバーヴァリが、自分に向けられた「頭が七つに破裂する (phal)」という呪いについて、ある神格 (devatā) に尋ねる。その神格は自分も知らないと答え、仏陀に質問することを勧める。バーヴァリは、同じくマントラに通暁した弟子 (māṇava⁶³) 16人に、仏陀に問いに行くように言う。16人は仏陀のもとへ赴き、頭が弾け飛ぶ (pat, adhi-pat) ことについて教えてもらう。答えを得て弟子は仏陀に拝礼する：

Suttanipāṭa 1027-1028 (5.1 Pārāyanavagga)

tato vedena mahatā santhambhitvāna māṇavo

ekaṃsaṃ aṇiṇaṃ katvā pādesu sirasā pati /1027/

bāvarī brāhmaṇo bhoṭo saha sissehī mārīsa

udaggacitto sumano pāde vandati cakkhuma /1028/

そのとき、[バーヴァリの] 弟子 (アジタ) は大きな感動に硬直し、[黒羚羊の] 毛皮⁶⁴を片方の肩にかけ、[仏陀の] 足に頭をつけ [て拝礼し] た。/1027/ 「バラモンであるバーヴァリは、弟子 (sisṣa) たちとともに、親しき人よ、心喜び、善意をもって、御身の御足に拝礼します、眼ある人よ」[と言って]。/1028/

これに応じて仏陀はさらに問うことを許す：

Suttanipāta 1030 (5.1 Pārāyanavagga)

bāvarissa ca tuyhaṃ vā sabbesaṃ sabbasaṃsayamaṃ

katāvakāṣā pucchavho yaṃ kiñci manas' icchatha //

君バーヴァリであれ、あるいは〔ほかの〕すべての者たちであれ、〔問いたいと〕心に望むすべての疑問を、〔ここに〕機会を得て、君たちは〔私に〕問え。

この後 16 人が一人ずつ質問する。彼らと仏陀の問答がこの章の中核を構成する。次のようなやりとりを含む問答もある：

Suttanipāta 1049-1050 (5.5 Pārāyanavagga, Mettagūmaṇavapucchā)

pucchāmi taṃ bhagavā brūhi me taṃ ... /1049/

... taṃ te pavakkhāmi yathā pajānaṃ ... /1050/

「君に私はお尋ねします、世尊よ。〔……なのか、〕それを私に話してください」

「……それを君に私（仏陀）は〔私が〕知っているとおりに語ろう」

全員の問答が終わった後、バラモンたちは仏陀のもとでブラフマチャリヤを行う：

Suttanipāta 1128 (5.18 Pārāyanavagga)

te tositā cakkhumatā buddhenādiccabandhunā

brahmacariyam acarissa varapaññassa santike //

彼らは、太陽の末裔である目覚めた眼ある人に満足した。彼らは最高の智慧をもつ人（仏陀）のもとでブラフマチャリヤを行った。

以上が Sn 第 5 章の枠組みである。

Sn 第 5 章には入門儀礼の直接的な描写はないが、学識あるバラモンが別の知識人（ここでは仏陀）に質問しその人のもとでブラフマチャリヤを行うという筋立ては、前章でみたウパニシャッドの「学者たちの入門」の場面と平行である。ほかに、最初に質問された人が答えを知らず別の優れた人を紹介する、入門を直接さす語がなくとも質問して教えてもらう場合がある、教える側が質問を促す、「私は君に語ろう」と言う、師の立場にたつのがバラモン学匠でない、という要素も、ウパニシャッドの入門説話に類例がある⁶⁵⁾。頭が破裂するという呪いもウパニシャッドの学匠どうしの対論の文脈に類似のものがみられる⁶⁶⁾。このように、ウパニ

シャッドの入門との共通要素がSn 第5章という初期仏典の最古層にすでに現れている。

仏陀への入門儀礼の描写を含む説話の場合は、以下にみていくように、「仏陀に〔質問して〕教えを聞く→入門する→ブラフマチャリヤを行う→(さらなる教えを受ける)→ブラフマチャリヤを住し終える」という流れが基本になる。この流れもウパニシャッドの入門説話の構造とおおよそパラレルである。初期仏典の場合は、仏陀への入門の目的として悟りと解脱が最後に位置し、「ブラフマチャリヤを住し終えること」「ブラフマチャリヤの終結」が解脱の境地とされる（2.1.4で後述）。

Sn の別の箇所にはブラフマチャリヤについて次の表現がある：

Suttanipāta 696 (3.11 Nāḷaka)

buddho ti ghosaṃ yadi⁶⁷⁾ parato suṇāsi sambodhipatto vicarati⁶⁸⁾ dhammamaggam gantvāna tattha samayaṃ paripucchiyāno carassu tasmim bhagavati brahmacariyaṃ //
目覚めた人が完全な悟りに達しダルマの道を歩んでいるという評判をのちに聞いたら、そこへ行って、教えを尋ねつつ、その世尊のもとでブラフマチャリヤを行え。

仏陀に質問し、仏陀のもとでブラフマチャリヤを行う、という流れがここでも語られている。仏陀に入門を申し込む際には、次に論じるように、ブラフマチャリヤを行う意志の表明が重要な要素となる。

2.1.2 仏陀への入門の申し込みとブラフマチャリヤ

初期經典に描写される仏陀への入門には、在家信者になることを願い出るものと、出家と受戒（後述）を願い出るものとがある。ブラフマチャリヤが言及されるのは後者においてである。

2.1.2.1 在家信者の入門：初期經典における三帰依

初期經典には、仏陀から教えを聞いた人が、仏陀に入門して在家信者（upāsaka, 優婆塞）になることを願い出る場面が数多く収録されている。その場合の入門形式の多くは、仏・法・僧への三帰依による⁶⁹⁾。一例としては：

Suttanipāta 142 (1.7 Vasala/Aggikabhāradvāja) 偈の後の散文部分

esāhaṃ bhavantaṃ gotamaṃ saraṇaṃ gacchāmi dhammaṃ ca bhikkhusaṃghaṃ ca.
upāsakaṃ maṃ bhavaṃ gotamo dhāretu ajjatagge pānupetaṃ saraṇaṃ gata[m]

私はここで御身ゴータマに帰依します、ダルマと比丘僧伽にも。御身ゴータマは私を、今日以後生きている限り帰依する在家信者（upāsaka）として保持してください。

漢訳経典にもほぼ同じ文言が数多くみられる。漢訳経典では在家信者の戒めを保つ言明も加わることがある⁷⁰⁾。在家信者の仏陀への入門の作法は次のようだったことになる：

- (1) 仏陀、ダルマ、比丘僧伽への帰依を言葉で表明する
- (2) 在家信者となることを願い出る言葉を述べる
- (3) 在家信者の戒めを守ると言明する（漢訳経典）

上掲の文言ないし類似のものは、在家信者の仏陀への入門の定型表現として、パーリ経典および漢訳経典に頻出する。

2.1.2.2 「私はブラフマチャリヤを行う」

仏陀から教えを聞いた後、仏陀のもとで出家して弟子となることを願い出る場面も数多く語られる。その際の入門申し込みの形式は主に二つある。仏陀の前で「私はブラフマチャリヤを行う」と表明するものと、仏陀に出家（pabbajjā⁷¹⁾）と受戒（upasampadā⁷²⁾）を乞うものである。以下にみるように、出家して仏陀の弟子となった者はブラフマチャリヤを行うから、この二つの申し込みは内容的には同じものである。

次の場面は「私はブラフマチャリヤを行う」と表明して入門する例である：

Suttanipāṭa 564-567; 570-571 (3.7 Sela); Majjhima-Nikāya II 146; cf. Theragāthā 834-839⁷³⁾

yo maṃ icchatī anvetu yo vā n' icchatī gacchatu
idhāhaṃ pabbajissāmi varapaññassa santike /564/
etañ ce ruccatī bhoto sammāsambuddhasāsanam
mayam pi pabbajissāma varapaññassa santike /565/
brāhmaṇa tisatā ime yācanti pañjalikatā
brahmacariyaṃ carissāma bhagavā tava santike /566/
svākkhātāṃ brahmacariyaṃ selā ti bhagavā sandiṭṭhikam akālikam
yattha amoghā pabbajjā appamattassa sikkhato /567/ ti.

alattha kho selo brāhmaṇo sapaṇiso bhagavato santike pabbajjaṃ. alattha upasampadaṃ. ... atha kho āyasmā selo sapaṇiso eko vūpakaṭṭho appamatto ātāpi pahitatto viharanto nacirass' eva yass' atthāya kulaputtā sammadeva agārasmā anagāriyaṃ pabbajanti tad anuttaraṃ brahmacariyapariyosānaṃ diṭṭhe va dhamme sayam abhiññā sacchikatvā upasampajja viḥāsī. khīṇā jāti, vusitaṃ brahmacariyaṃ, kataṃ karaṇiyaṃ, nāparaṃ

itthattāyā ti abbhaññāsi. aññataro ca kho pañāyasmā selo sapariso arahataṃ ahosi. atha kho āyasmā selo sapariso yena bhagavā ten' upasaṃkami. upasaṃkamitvā ekamsaṃ cīvaraṃ katvā yena bhagavā ten' añjalim paṇāmetvā bhagavantam gāthāhi ajjhabhāsi:

yan taṃ saraṇam āgamha ito aṭṭhami cakkhumā

sattarattena bhagavā dant' amha tava sāsane /570/

tuvam buddho tuvaṃ satthā tuvaṃ mārābhibhū muni /571ab/ ...

[セーラというバラモンは弟子たちに言った,]

「望む者は私についてこい。望まない者は去れ。ここで私は最高の智慧をもった人（仏陀）のもとで出家しよう」[と]。/564/

「その正しく完全に目覚めた人（仏陀）の教えが御身（セーラ）に喜ばしいのであれば、私たちも最高の智慧をもった人（仏陀）のもとで出家しましょう」[とセーラの弟子たちは言った]。/565/

「いまここで三百人のバラモンたちは合掌して乞い求めます。私たちはブラフマチャリヤを行います、世尊よ、君のもとで」[とセーラと弟子たちは言った]。/566/

「ブラフマチャリヤは善く説かれた、セーラよ」と世尊は言った、「現世で即座なるものとして。放逸なく学んでいる人にとって出家はむなしくない」と。/567/

セーラという会衆とともにいるバラモンは世尊のもとで出家を得た。受戒を得た（入門して弟子となった）。……そして会衆とともにいる尊者セーラは、一人で〔諸欲を〕離れ、放逸することなく熱心に自ら励みつつ暮らし、まもなく、それを目的として在家の子らが正しく家から家のない状態へ出家するところの最上のブラフマチャリヤの終結を現世において自ら知り、まのあたりに理解し、達成して暮らした。「生まれることは尽きた。ブラフマチャリヤは住し終えられた。なされるべきことはなされた。もはやこの〔輪廻〕状態に〔戻ることは〕ない」と彼は知った。そうして会衆とともにいる尊者セーラは阿羅漢たちの一員となった。それから会衆とともにいる尊者セーラは世尊のいるところにやってきた。やってきて、衣を片方の肩にかけ、世尊に合掌して拝礼し、世尊に詩節によって話しかけた、

「今から八日前に私たちは君に帰依しましたから、眼ある人よ、七夜で、世尊よ、私たちは君の教えにおいて制御された者となりました。/570/ 君は目覚めた人です。君は教師です。君は悪魔をやぶる聖者です。……」/571/

ここでは、仏陀に入門する儀礼は、

- (1) ブラフマチャリヤを行うという言葉述べる

ことによって行われている。564-567 偈に出家が（散文部分には受戒も）言及され、570-571 偈には「私たちは君に帰依した」「君は教師である」という文言があるので、

- (2) 出家（と受戒）を願う（2.1.2.3で後述）
- (3) 仏陀への帰依を表明する
- (4) 教師（satthar）となってくれるよう願う（下掲 Sn 31-32 参照）

という儀礼行為も行われた可能性がある。後半の散文部分にある「まもなく、それを目的として在家の子らが……もはやこの〔輪廻〕状態に〔戻ることは〕ない、と彼は知った」という文章は、仏陀への入門の場面に頻出する⁷⁴⁾（2.1.4で後述）。

次の例でも仏陀への入門がほぼ同じ作法で行われる：

Suttanipāṭa 31-32 (1.2 Dhaniya)

lābhā vata no anappakā ye mayam bhagavantam addasāma

saraṇam tam upema cakkhuma satthā no hohi tuvaṃ mahāmuni /31/

gopī ca ahañ ca assavā brahmacariyam sugate carāmaṣe

jātimaraṇassa pāragā dukkhass' antakarā bhavāmaṣe /32/

ああ、少なからざるものを私たち（ダニヤ・ゴーバとその妻ゴーピー）は得た、私たちが世尊に会ったことで。君に私たちは帰依します⁷⁵⁾、眼ある人よ。君は私たちの教師となってください、偉大なる聖者よ。/31/ ゴーピーと私は忠実に、よき境地に至った人（sugata, 善逝）のもとでブラフマチャリヤを行います。生と死の彼岸に達し、苦悩を終息させる者たちとなります。/32/

この例では仏陀への入門の作法は以下の要素からなっている：

- (1) 仏陀への帰依を言葉で表明する
- (2) 教師（satthar）となってくれるよう願う言葉を述べる
- (3) ブラフマチャリヤを行うという言葉を述べる

ここでもブラフマチャリヤを行う意志を表明して入門申し込みが行われる⁷⁶⁾。

2.1.2.3 出家と受戒を乞う入門

「私はブラフマチャリヤを行う」という言葉による入門に加えて初期經典に頻出するのが、

仏陀に出家と受戒を乞う入門である。以下はその一例である：

Suttanipāta 82 (1.4 Kasibhāradvāja) 偈の後の散文部分⁷⁷⁾

esāhaṃ bhavantaṃ gotamaṃ saraṇaṃ gacchāmi dhammañ ca bhikkhusaṃghaṃ ca.
labheyyāhaṃ bhoto gotamassa santike pabbajjaṃ. labheyyaṃ upasampadan ti. alatta kho
kasibhāradvājo brāhmaṇo bhagavato santike pabbajjaṃ. alatta upasampadaṃ. acirūpa-
sampanno kho panāyasmā bhāradvājo eko vūpakaṭṭho appamatto ātāpī pahitatto viharanto
nacirass' eva yass' atthāya kulaputtā sammadeva agārasmā anagāriyaṃ pabbajanti, tad
anuttaraṃ brahmacariyapariyosānaṃ diṭṭhe va dhamme sayaṃ abhiññā sacchikatvā
upasampajja vihāsi. khīṇā jāti, vusitaṃ brahmacariyaṃ, kataṃ karaṇiyaṃ, nāparaṃ
itthattāyā ti abbhaññāsi. aññataro ca kho panāyasmā bhāradvājo arahataṃ ahosi.

「ここで私は御身ゴータマに帰依します、ダルマと比丘僧伽にも。御身ゴータマのもとで私は出家を得たい。私は受戒を得たい（入門したい）」と [バーラドヴァージャは言った]。そしてカシ・バーラドヴァージャというバラモンは世尊のもとで出家を得た。受戒を得た。さらにまもなく、受戒した（入門した）バーラドヴァージャは、一人で [諸欲を] 離れ、放逸することなく熱心に自ら励みつつ暮らし、まもなく、それを目的として在家の子らが正しく家から家のない状態に出家するところの最上のブラフマチャリヤの終結を現世において自ら知り、まのあたりに理解し、達成して暮らした。「生まれることは尽きた。ブラフマチャリヤは住し終えられた。なされるべきことはなされた。もはやこの [輪廻] 状態に [戻ることは] ない」と彼は知った。そうして尊者バーラドヴァージャは阿羅漢たちの一員となった。

ここでは、仏陀への入門は次の形式で行われている：

- (1) 仏陀・ダルマ・比丘僧伽への帰依を言葉で表明する
- (2) 出家 (pabbajjā) を願う言葉を述べる
- (3) 受戒 (upasampadā) を願う言葉を述べる

「ブラフマチャリヤの終結」「ブラフマチャリヤは住し終えられた」という文言があるので、こ

こでもやはり入門の後にはブラフマチャリヤが行われたことがわかる。

2.1.3 仏陀による入門の受け入れ

Sn 567 (上掲 2.1.2.2) とそのパラレルでは、セーラの入門申し込みに、仏陀は「ブラフマ

チャリヤは善く説かれた……出家はむなしくない」と応えている。

パーリ初期經典における仏陀の入門受け入れの形式は、他に次のものがある：

仏陀が「来い、何某よ (ehi + voc.)」という言葉かける

仏陀が「来い (ehi)」と呼びかけて入門者を受け入れる儀礼はパーリ初期經典に数回言及される。一例としては：

Theragāthā (Aṅgulimāla) 869cd-870; Majjhima-Nikāya II 100 (Aṅgulimālasutta)⁷⁸⁾

avandi coro sugatassa pāde tatth' eva pabbajjam ayāci buddham⁷⁹⁾

buddho ca kho kāruṇiko mahesi yo satthā lokassa sadevakassa

tam ehi bhikkhū ti tadā avoca es' eva tassa ahu bhikkhubhāvo

盗賊はよき境地に至った人の足に敬礼した。そして目覚めた人（仏陀）に出家を乞うた。

目覚めた人は、慈悲深い偉大な聖仙であり神々と世間の教師であるが、彼に「来い、比丘よ」とその時言った。まさにこれが彼の比丘になることであった（その時比丘になった）。

仏陀による入門受け入れの際の呼びかけは、パーリ初期經典では「来い、比丘よ」と言う場合⁸⁰⁾と「来い、何某よ」と入門者の名前が入る場合⁸¹⁾とがある⁸²⁾。このように「来い」と呼びかけて入門させる形式は、律典で「来い比丘よ [という言葉による] 入門 (ehi-bhikkhu-upasampadā, 善来具足)」とよばれる (2.3.2.2で後述)。

パーリ初期經典には次の入門受け入れ形式もみられる：

- (1) 入門者がブラフマチャリヤを行うという言葉述べる
- (2) 仏陀が「来い、何某よ (ehi + voc.)」という言葉かける
- (3) 入門者にブラフマチャリヤを課す

この形式は次の一節にみられる。經典の結びの部分ではなく、仏陀の言葉の中に、儀礼の描写が組み込まれている点が興味深い：

Majjhima-Nikāya I 428 (Cūḷamālunkya-sutta)

kin nu tāhaṃ māluṅkyāputta evaṃ avacaṃ : ehi tvaṃ māluṅkyāputta mayi brahmacariyam cara, ahaṃ te byākarissāmi ... ti. no h' etaṃ bhante. tvaṃ vā pana maṃ evaṃ avaca : ahaṃ bhante bhagavati brahmacariyam carissāmi, bhagavā me byākarissati ... ti. ... evaṃ

sante moghapurisa ko santo kam paccāikkhasi.

「マールンキヤーブッタよ、君に私はこのように言ったか、『来い、マールンキヤーブッタよ、君は私のもとでブラフマチャリヤを行え。私は君に……説明しよう』と？」[と仏陀は問うた]。「それを[言っでは] いません、御身よ」[とマールンキヤーブッタは答えた]。「あるいは君は私にこのように言ったか、『私は、御身よ、世尊のもとでブラフマチャリヤを行おう。世尊は私に……説明してくれるだろう』と？……そのような（入門の申し込みと受け入れをしていない）状態なのに、愚か者よ、君は誰として誰を拒んでいるのか」[と仏陀は言った]。

同様の入門形式は漢訳經典にも頻繁にみられる。たとえば：

『増一阿含經』（T 2: 800a）；cf. Suttanipāta 564-567 etc. (2.1.2.2)

爾時施羅梵志，告五百弟子曰，汝等各所好者各自誦習。吾欲於如來所善修梵行。諸弟子白曰，我等亦復欲出家學道。爾時梵志及五百弟子，各各長跪白世尊言，唯願世尊聽出家學道。佛告諸梵志，善來比丘，於如來所善修梵行漸盡苦原。如來說此語時，五百梵志即成沙門。その時、施羅というバラモンは五百人の弟子に言った、「君たちのうち各々望む者は各自で誦習せよ。私は如来のもとで梵行を善く修したい」と。弟子たちは申し上げた、「私たちも出家して道を学びたい」と。そしてバラモンと五百人の弟子は、各々長跪して世尊に申し上げた、「世尊よ、[私たちが] 出家して道を学ぶことをお聴きとどけください」と。仏はバラモンたちに言った、「善く来い、比丘よ。如来のもとで梵行を善く修し、苦の原を漸く盡せ」と。如来がこの言葉を説いた時、五百人のバラモンたちは即座に沙門となった。

この漢訳經典では仏陀への入門の作法は、

出家と学道を願う言葉を述べる

ことによっている。その前の文章から、出家と学道は仏陀のもとでの梵行（ブラフマチャリヤ）をさすことがわかる。ここでの入門の受け入れは次の作法による：

- (1) 仏陀が「善く来い、比丘よ（善来比丘⁸³⁾）」という言葉かける
- (2) 梵行を課す

漢訳經典ではこの例のように、入門者に対して仏陀が「善来比丘」という呼びかけで応えることが一つの定型となっている⁸⁴⁾。

2.1.4 「ブラフマチャリヤは住し終えられた」 —— *vusitaṃ brahmacariyaṃ*

Sn のセーラ (2.1.2.2) やパーラドヴァージャ (2.1.2.3) の説話の結びの散文部分にある、仏陀に入門してからブラフマチャリヤを住し終えて阿羅漢になるまでを語る文章は、他の經典にも頻出する。出家して入門する者の目標はブラフマチャリヤの終結であり、ブラフマチャリヤを住し終えることで解脱に至る。このことを端的に表現しているのが次の定型句である：

khīṇā jāti, vusitaṃ brahmacariyaṃ, kataṃ karaṇīyaṃ, nāparaṃ itthattāya
生まれることは尽きた⁸⁵⁾。ブラフマチャリヤは住し終えられた。なされるべきことはなされた。もはやこの〔輪廻〕状態に〔戻ることは〕ない。

vusitaṃ brahmacariyaṃ は現代語で「ブラフマチャリヤは完成した」と訳されることがある⁸⁶⁾。*vusita-* (<vas) 「住された」の意識とみられるが⁸⁷⁾, *vusita-* を *vosita-* (<vy-ava-sā [Skt.]) と同義と解する提案もなされている⁸⁷⁾。*vosita-* 「〔修行を〕終了した」はブラフマチャリヤを住し終えることと類義だったようであるが⁸⁸⁾, *brahmacariyaṃ vas* という構文は初期ヴェーダ文献以来サンスクリットおよびパーリ語文献で確立されたものであり⁸⁹⁾, *vusita-* は直訳すればあくまで *vas* の過去分詞「住された」である。

これに関連して、*vas* の過去能動分詞 *vusitavānt-* 「住し終えた」が単独で用いられる例がある⁹⁰⁾：

Suttanipāṭa 514 (3.6: Sabhiya)⁹¹⁾

pajjena katena attanā sabhiyā ti bhagavā parinibbānagato vitīṇṇakamkho
vibhavaṇ ca bhavaṇ ca vipphāya vusitavā khīṇapunabbhavo sa bhikkhu //

「自ら道を行うことで、サビヤよ」と世尊は〔言った〕、「完全な涅槃に達し、疑いを超え、生と滅とを捨て去って、住し終え、再生が尽くされている、その人が〔真の〕比丘である」。

これだけでは何を「住し終えた」のか不明瞭であるが、初期仏典に何例かみられる次の文言と照らし合わせると、ブラフマチャリヤをさす可能性が高いことがわかる：

Majjhima-Nikāya I 4 (Mūlapariyāyasutta)⁹²⁾

yo pi so bhikkhave bhikkhu araham khīṇāsavo vusitavā katakaraṇīyo ohitabhāro
anuppattasadattho parikkhīṇabhavasamyojano sammadaññā vimutto ...

比丘たちよ、比丘であって、阿羅漢であり、漏⁹³⁾が尽くされていて、住し終えていて、なされるべきことをなし終え、重荷を降ろし、自己の目的に達し、生存の束縛が完全に滅し、正しく知って、解脱した者は……

この文言は、初期仏典に幅広く現れる上掲の定型句、

khīṇā jāti, vusitaṃ brahmacariyaṃ, kataṃ karaṇīyaṃ, nāparaṃ itthattāya

生まれることは尽きた。ブラフマチャリヤは住し終えられた。なされるべきことはなされた。もはやこの「輪廻」状態に「戻ることは」ない。

と明らかにパラレルである。次のような対応がみてとれる：

1. *khīṇā jāti* 「生まれることは尽きた」：

parikkhīṇabhavasamyojano (MN) / khīṇapunabbhavo (Sn)

2. *vusitaṃ brahmacariyaṃ* 「ブラフマチャリヤは住し終えられた」：

vusitavā (MN, Sn)

3. *kataṃ karaṇīyaṃ* 「なされるべきことはなされた」：

katakaraṇīyo (MN)

4. *nāparaṃ itthattāya* 「もはやこの「輪廻」状態に「戻ることは」ない」：

vimutto (MN) / parinibbānagato (Sn)

2.1.5 仏弟子の修行生活と仏陀の教え

第1章でみたとおり、ヴェーダの宗教では、ブラフマチャリヤ「ブラフマンに携わること」は、ある程度の意味の幅をもちつつ、入門の文脈では「[性的禁欲を含む生活制限を遵守しつつ学習を含む務めに励む] 修行生活」をさす。

初期仏典でもブラフマチャリヤの語意にはある程度の幅がみられる。これまでも指摘されているとおり⁹⁴⁾、初期仏典においてブラフマチャリヤという語は必ずしも仏教固有の意味で用いられていない⁹⁵⁾。ヴェーダ文献の場合と同様、仏典でもこの語は狭義には「性的禁欲⁹⁶⁾」を、広義にはある種の修行生活をさす。仏陀への入門の文脈では、入門者はブラフマチャリヤを行う意志を表明し、入門後はブラフマチャリヤを住し終えて「生まれることが尽くされ、なされるべきことがなされた」境地に至る。この場合のブラフマチャリヤは、ヴェーダ入門儀礼の文

脈での用例の延長として、「[性的禁欲を含む生活制限を遵守しつつ仏陀の教えの実践を含む務めに励む] 修行生活」と解することができる。

初期經典には、仏陀自身がブラフマチャリヤを住し終えたと語る場面もある：

Majjhima-Nikāya I 23 (Bhayabheravasutta)⁹⁷⁾

tassa me evaṃ jānato evaṃ passato kāmāsavā pi cittaṃ vimuccittha. bhavāsavā pi cittaṃ vimuccittha. avijjāsavā pi cittaṃ vimuccittha. vimuttasmiṃ vimuttam iti ñāṇaṃ ahosi. khīṇā jāti, vusitaṃ brahmacariyaṃ, kataṃ karaṇiyaṃ, nāparaṃ itthattāyā ti abbhaññasiṃ. このように知り、このように見ている私（仏陀）の心は、欲望という漏から解放された。有という漏からも心が解放された。無明という漏からも心が解放された。解放されたとき、「解放された」という知が生じた。「生まれることは尽きた。ブラフマチャリヤは住し終えられた。なされるべきことはなされた。もはやこの〔輪廻〕状態に〔戻ることは〕ない」と私は知った。

仏陀は師なく一人で悟ったとされるから、このブラフマチャリヤは、仏陀が悟りを得るために住した修行生活をさすことになる。また、仏陀は悟りを得てからもブラフマチャリヤを行っていたとされる：

Samyutta-Nikāya I 169 (Brāhmaṇasaṃyutta Sundarikasutta)⁹⁸⁾

hitvā ahaṃ brāhmaṇa dārudāhaṃ ajjhataṃ eva jalayāmi jotim
niccaggini nikkasamāhitatto araham ahaṃ brahmacariyaṃ carāmi

私（仏陀）は、バラモンよ、〔祭火に〕木を燃やすことをやめ、〔自己の〕内にもみ光を輝かせている。常に〔内に〕火をもち、常に自己を定置し、阿羅漢として、私はブラフマチャリヤを行っている。

このブラフマチャリヤは悟った人の実践生活（〔性的禁欲を含む生活制限を遵守しつつ悟った人の務めに励む〕実践生活）をさすことになる。

さらに仏典では、ブラフマチャリヤが実質上「仏陀の教えの内容」をさす場合がある。次の一節では、仏陀の誕生を聞いて訪ねていったアシタ仙が、生まれたばかりの仏陀を見て言う：

Suttanipāta 693 (3.11: Nālaka)

sambodhiyaggaṃ phusissat' āyaṃ kumāro so dhammacakkaṃ paramavisuddhadassī
vattessat' āyaṃ bahujanahitānukampī vitthārik' assa bhavissati brahmacariyaṃ //

この男子（仏陀）は最高の完全な悟りを体得するだろう。彼は最上の清らかな〔境地〕を見、多くの人の利益を思ってあわれみ、法輪を転じるだろう。彼のブラフマチャリヤはあまねく広まるものとなるだろう。

初期經典に何度か現れる次の文言では、ブラフマチャリヤとダルマ（仏陀の教え、「法」）が並置される：

Suttanipāta 548 (3.7: Sela) 偈の前の散文部分 ; etc.

so dhammaṃ deseti ādikalyāṇaṃ majjhe kalyāṇaṃ pariyosānakalyāṇaṃ sātthaṃ savyañjanaṃ. kevalaparipuṇṇaṃ parisuddhaṃ brahmacariyaṃ pakāseti.

彼（仏陀）は、初めがよく、真ん中もよく、終結もよく、意味があり、〔よい〕表現をもつダルマを教示している。〔彼は〕完全に円満で全く清浄なブラフマチャリヤを説いている。

こうした「あまねく広がる」「仏陀が説く」という表現は、これらの箇所のブラフマチャリヤが仏陀の教えの内容をさすことを示している⁹⁹⁾。

2.2 初期經典の仏伝部分にみられる仏陀への入門

仏伝的記述を含む初期經典では、仏陀の生涯の主な出来事が語られる¹⁰⁰⁾。本節では、成道前に仏陀が行ったとされる入門と、成道直後の仏陀の説法および最初の弟子たちの仏陀への入門が、初期經典の仏伝でどう語られているかをみる¹⁰¹⁾。

2.2.1 仏陀自身による師への入門

初期經典の仏伝は、仏陀が成道前にアーラーラ・カーラーマとウッダカ・ラーマプッタという二人の師のもとで学んだと伝えている¹⁰²⁾。Ariyapariyesanasutta では仏陀の入門が仏陀の回想という形で語られる：

Majjhima-Nikāya I 163-165 (Ariyapariyesanasutta)¹⁰³⁾ ; cf. MN I 240 ; II 212

so evaṃ pabbajito ... yena ālāro kālāmo ten' upasaṅkamim. upasaṅkamtivā ālāraṃ kālāmaṃ etad avocaṃ : icchāma' ahaṃ āvuso kālāma imasmim dhammavinaye brahmacariyaṃ caritun ti. evaṃ vutte bhikkhave ālāro kālāmo maṃ etad avoca : viharat' āyasmā. tādiso ayaṃ dhammo yattha viññū puriso nacirass' eva sakaṃ ācariyakaṃ sayāṃ abhiññā sacchikatvā upasampajja vihareyyā ti. ... lābhā no āvuso suladdhaṃ no āvuso ye mayaṃ

āyasmantaṃ tādisaṃ sabrahmacāriṃ passāma. ... ehi dāni āvuso, ubho va santā imaṃ gaṇaṃ pariharāmā ti. iti kho bhikkhave ālāro kālāmo ācariyo me samāno antevāsīṃ maṃ samānaṃ attano samasamaṃ ṭhapesi.

このように出家して、……アーラーラ・カーラーマのいるところに私（仏陀）は近づいた（upa-saṅ-kam [<kram]）。近づいてアーラーラ・カーラーマにこう言った、「友よ、カーラーマよ、私はこの法と律においてブラフマチャリヤを行うことを望む」と。このように言われて、比丘たちよ、アーラーラ・カーラーマは私にこう言った、「尊者は[ここで]暮らすとよい。このダルマは、智慧ある人がまもなく自分の師に属することがらを自ら知り、まのあたりに理解し、達成して暮らす、そのようなものである」と。……[教えを理解した仏陀にアーラーラは言った,]「私たちの利になることである、友よ、私たちに善く得られたことである、友よ、私たちがこのような同僚ブラフマチャーリン（sabrahmacārin）である尊者に会うことは¹⁰⁴⁾。……さあ来い、友よ、我々二人は正しい者として、この[アーラーラの弟子たちの]集団を率いよう」と。このように、比丘たちよ、アーラーラ・カーラーマは私の師（ācariya）でありながら、近住弟子（antevāsīn）である私を、自分とまったく対等な[立場に]立たせた。

同経ではこの場面の後、仏陀がアーラーラのもとを去り、ウッダカ・ラーマプッタのもとへ赴いて「私は法と律においてブラフマチャリヤを行うことを望む」と申し入れる場面がほぼ同じ文章の繰り返しで語られる¹⁰⁵⁾。

仏陀が二人に対して行った入門の儀礼は、

ブラフマチャリヤを行うという言葉述べる

というものである。これは前述した仏弟子たちの仏陀への入門儀礼と同じ形式である¹⁰⁶⁾。Ariyapariyesanasutta では、アーラーラ・カーラーマは自らの近住弟子¹⁰⁷⁾であるにもかかわらず仏陀を対等な同僚ブラフマチャーリンと認め、ウッダカ・ラーマプッタは仏陀の同僚ブラフマチャーリンでありながら仏陀を師の地位に据える。これらの師弟関係を表す語はヴェーダ文献からみられる¹⁰⁸⁾。

2.2.2 仏陀による入門の勧めとブラフマチャリヤ

2.2.2.1 初期經典の仏伝における在家信者の入門

Ariyapariyesanasutta (MN I 160ff) では、仏陀はアーラーラ・カーラーマとウッダカ・ラーマプッタの教えに満足できずに彼らのもとを去り、厳しい苦行のすえ極端な苦行に見切りをつ

け、成道に至る。成道後の出来事としては、梵天勧請、ウパカとの出会い¹⁰⁹⁾、五比丘への初転法輪が語られる。同じく仏伝を含む経典 Mahāsaccakasutta (MN I 237ff.) と Saṅgāravasutta (MN II 209ff.) では仏陀の出家、二師への入門、成道までが回想される。この3経典のいずれにも最初の在家信者受け入れの場面はない。

2.2.2.2 初期経典における五比丘と初転法輪

Ariyapariyesanasutta では、仏陀の最初の説法も仏陀の回想という形で語られる。まず、仏陀が悟りを得たときの様子が語られる：

Majjhima-Nikāya I 167 (Ariyapariyesanasutta)¹¹⁰⁾

so kho ahaṃ bhikkhave ... asaṅkiliṭṭhaṃ anuttaraṃ yogakkhemaṃ nibbānaṃ ajjhagamaṃ. nāṇaṃ ca pana me dassanaṃ udapādi : akuppā me vimutti, ayam antimā jāti, na tthi dāni punabbhavo ti.

そこで私（仏陀）は、比丘たちよ、……汚れなく諸々の束縛から〔守られた〕最高の安らぎである涅槃を獲得した。さらに私に智と見が生じた、「私の解脱は不動である。これが最後の生である。もはや再び生まれることはない」と。

この後仏陀は梵天の勧請¹¹¹⁾を受けて法を説く決意をし、道中でウパカと会った後、かつての修行仲間である五人の比丘¹¹²⁾ のところに赴き、ダルマを教示すると宣言する。五比丘は仏陀が厳しい苦行を捨てたと言って仏陀の言葉を疑うが、仏陀は彼らを説得して耳を傾けさせる：

Majjhima-Nikāya I 172f. (Ariyapariyesanasutta)

abhiñānātha me no tumhe bhikkhave ito pubbe evarūpaṃ bhāsitaṃ¹¹³⁾ etan ti. no h' etam bhante. ahaṃ bhikkhave tathāgato sammāsambuddho. odahatha bhikkhave sotaṃ. amatam adhigataṃ. ahaṃ anusāsāmi. ahaṃ dhammaṃ desemi. yathānusiṭṭhaṃ tathā paṭipajjamānā nacirass' eva yass' atthāya kulaputtā sammadeva agārasmā anagāriyaṃ pabbajanti tad anuttaraṃ brahmacariyapariyosānaṃ diṭṭhe va dhamme sayaṃ abhiññā sacchikatvā upasampajja viharissathā ti. asakkhiṃ kho ahaṃ bhikkhave pañcavaggiye bhikkhū saññāpetuṃ. dve pi sudaṃ bhikkhave bhikkhū ovaḍāmi. tayo bhikkhū piṇḍāya caranti. yaṃ tayo bhikkhū piṇḍāya caritvā āharanti tena chabbaggo (v.l. -ā, -iyā) yāpema. ... atha kho bhikkhave pañcavaggiyā bhikkhū mayā evaṃ ovadiyamānā ... asaṅkiliṭṭhaṃ anuttaraṃ yogakkhemaṃ nibbānaṃ ajjhagamaṃsu. nāṇaṃ ca pana nesaṃ dassanaṃ udapādi : akuppā no vimutti, ayam antimā jāti, na tthi dāni punabbhavo ti.

「君たちは、比丘たちよ、私がいまより前にこのようにこのことを語ったのを覚えているか¹¹⁴⁾」と[そのとき私(仏陀)は五比丘に言った]。「それはありません、御身よ」[と五比丘は答えた]。「比丘たちよ、如来は阿羅漢であり、正しく完全に悟った者である。耳を傾けよ、比丘たちよ。不死は得られた。私は教えよう。私はダルマを示そう。教えられたとおりに歩んでいれば、君たちはまもなく、それを目的として在家の子らが正しく家から家のない状態に出家するところの最上の**ブラフマチャリヤの終結**を現世において自ら知り、まのあたりに理解し、達成して暮らすようになるであろう」と[私(仏陀)は五比丘に言った]。私は、比丘たちよ、五人の群の比丘たちを説得することができた。まさに二人の比丘に、比丘たちよ、私は教えた。三人の比丘は托鉢を行った。三人の比丘が托鉢して運んでくるものによって我々六人の群は生活した。……比丘たちよ、五人の群の比丘たちは私にこのように教えられつつ……汚れなく諸々の束縛から[守られた]最高の安らぎである涅槃を獲得した。さらに彼らに智と見が生じた、「我々の解脱は不動である。これが最後の生である。もはや再び生まれることはない」と。

これが Ariyapariyesanasutta の初転法輪説話である¹¹⁵⁾。ここでは五比丘の仏陀への入門の儀礼や彼らのブラフマチャリヤについては語られていない。同経の前半部では仏陀がアーラーラ・カーラーマとウッダカ・ラーマプッタに「私はブラフマチャリヤを行うことを望む」と言って入門したと語られている(2.2.1)のに対して、五比丘の入門は事実上、仏陀の「私はダルマを示そう」という言葉だけで示されている¹¹⁶⁾。

五比丘への説法は Dhammacakkappavattanasutta でも言及される：

Samyutta-Nikāya V 420-424 (Saccasamyutta Dhammacakkappavattanasutta)

ekam samayaṃ bhagavā bārāṇasiyaṃ viharati isipatane migadāye. tatra kho bhagavā pañcavaggiye bhikkhū āmantesi : dve me bhikkhave antā pabbajitena na sevitaḍḍhā. ... atha kho bhagavā udānaṃ udānesi : aññāsi vata bho koṇḍañño aññāsi vata bho koṇḍañño ti. iti h' idam āyasmato koṇḍaññassa aññātakoṇḍañño tv eva nāmaṃ ahoṣi.

あるとき世尊はバーラーナシーのイシパタナの鹿苑に住んでいた。そこで世尊は五人の群の比丘たちに語った、「比丘たちよ、出家者によって二つの極端は親しまれるべきでない。……」……そのとき世尊はウダーナを發した、「コンダンニャは知^{アンニャーシ}った、コンダンニャは知った」と。実にこうして、アンニャータコンダンニャが尊者コンダンニャの名前となった。

「そこで世尊は……」以降、コンダンニャが最初に仏陀の説法¹¹⁷⁾を理解してアンニャータコン

ダンニャという名を得るまでの部分は、パーリ律典の初転法輪説話と同一文である（2.3.2.1で後述）。ただしこの経典はここで終わり、五比丘の入門の儀礼には触れない¹¹⁸⁾。

2.2.2.3 初期サンスクリット仏伝における仏陀への入門

いわゆる仏教混淆サンスクリット（Buddhist Hybrid Sanskrit）による初期の仏伝にも、仏陀への入門の場面は数多く語られている（cf. Edgerton 1953: 157）。次の一節はその一例である：

Mahāvastu III 63-65¹¹⁹⁾

vayaṃ bhagavati mahāśramaṇe brahmacaryaṃ carīṣyāmaḥ, svākhyāto bhagavatā dharmavinayo ... pravrajētu māṃ bhagavān upasampādetu māṃ sugato // atha khalu bhagavāṃ śāriputramaudgalyāyanapramukhāṃ pañca parivrājakaśatām ehibhikṣukāye ābhāṣe // etha bhikṣavaḥ caratha tathāgate brahmacaryaṃ // teṣāṃ dāni bhagavatā ehibhikṣukāye ābhāṣtānām ... eṣa āyuṣmantānām śāriputramaudgalyāyanapramukhānām pañcaśatānām pravrajyā upasampadā bhikṣubhāvo. //

「私たちは偉大なる沙門である世尊のもとでブラフマチャリヤを行おう。世尊によって法と律は善く説かれた……」…「世尊は私を出家させてください。よき境地に至った人は私を受戒させてください」。そこで世尊はシャーリプトラとマウドガリヤーヤナをはじめとする五百人の遊行者に〈来い比丘よという〔言葉〕〉によって話しかけた、「来い、比丘たちよ。如来のもとでブラフマチャリヤを行え」。この時、世尊によって〈来い比丘よという〔言葉〕〉で話しかけられた彼らには……これが尊者シャーリプトラとマウドガリヤーヤナをはじめとする五百人の出家と受戒であり、比丘になることであった。

ここには上述のパーリ経典および漢訳経典の場合と同様の入門儀礼がみとれる：

- (1) 入門者がブラフマチャリヤを行う意志を表明（ここでは仏陀に会う前に）
- (2) 出家と受戒を願う言葉を述べる
- (3) 仏陀が「来い、比丘〔たち〕よ」という言葉をかける
- (4) ブラフマチャリヤを課す

2.3 初期律典の仏伝部分にみられる仏陀への入門

2.3.1 律典と仏伝

初期律典には、受戒規定の章（受戒捷度）に仏伝を含むものがある。パーリ律（Vinaya）、『四分律』、『五分律』の受戒捷度が古い形を伝えているとされる¹²⁰⁾。そこでは、仏陀が成道後

しばらくは自身で直接弟子の入門を受け入れていたことが語られる。この仏陀自身による入門受け入れ場面の描写は、僧団が成立し戒律が整備されるよりも前の時期に仏弟子がいかにして受戒したのかを律典において説明する役割を果たしている。仏陀の成道直後の出来事として主に次の説話が語られる：

仏陀の成道→梵天勸請→二商人の二帰依→ウパカとの対話→五比丘への初転法輪→五比丘の入門→ヤサの父の三帰依→ヤサの入門

以下にみるように、受戒捷度の仏伝に語られる仏陀直々の授戒の作法は、二ないし三帰依による在家信者の入門受け入れと、善来具足 (ehi-bhikkhu-upasampadā) とよばれる形式による出家修行者の入門受け入れの、二種類のみである。

2.3.1.1 在家信者の入門：初期律典の仏伝における二帰依

律典の仏伝では、初転法輪の前に、二人の商人が仏陀とダルマに帰依し（二帰依）、在家信者になったと語られる (Vinaya I 4; 『四分律』 T 22: 782a; 『五分律』 T 22: 103a)¹²¹⁾。初転法輪をうけて五比丘が入門するまでは仏弟子の集団は存在しないから、僧伽への帰依に言及しないとみられる (平川 2000: 128-132)。帰依の文言は初期經典にみられる在家信者の帰依 (2.1.2.1) とほぼ同じである。

2.3.1.2 在家信者の入門：初期律典の仏伝における三帰依

律典の仏伝では、二商人の二帰依の後、初転法輪を受けて五比丘が入門して悟りを得、世間の阿羅漢は仏陀とあわせて六人となる (後述)。七人目に阿羅漢になるのがヤサである。ヤサは五比丘と同じ形式 (後述) で仏陀に入門するが、その際、ヤサの父が三帰依によって在家信者になることを仏陀に願い出る：

Vinaya I 16f.

esāhaṃ bhante bhagavantam saraṇaṃ gacchāmi, dhammañ ca bhikkhusaṃghaṃ ca.
upāsakaṃ maṃ bhagavā dhāretu ajjatagge pāṇupetaṃ saraṇaṃ gatan ti. so 'va loke
paṭhamam upāsako ahoṣi tevāciko. /

「私はここで、御身よ、世尊に帰依します、ダルマと比丘僧伽にも。世尊は私を、今日以降生きている限り帰依する在家信者として保持してください」と [ヤサの父は言った]。彼は世間で初めて、三つの [帰依の] 言葉による在家信者になった。

すでに五比丘が入門して比丘の集団が成立しているので、初の三帰依が行われうるという流れである。帰依の文言は初期經典の在家信者のものとほぼ同じである（2.1.2.1）。『四分律』『五分律』の記述も類似しているが、在家信者としての戒めを守ると言明する行為が加わる¹²²⁾。この点も初期經典の例と同じである。その後、ヤサの母をはじめとする女性たちも在家信者になることを申し出、三帰依による最初の在家女性信者になったとされる¹²³⁾。

2.3.2 律典における善来具足

2.3.2.1 律典の仏伝における五比丘と初轉法輪

律典の仏伝でも、初期經典の仏伝と同じく、仏陀が最初に教えを説いたのは五人の托鉢修行者に対してだったとされる。初めは極端な苦行を捨てたことを五人に非難されるが耳を傾けさせた（Vinaya I 8ff; 『四分律』 T 22: 787c-788; 『五分律』 T 22: 104b）という物語の流れも Ariyapariyesanasutta とほぼ同じである（2.2.2.2）。Ariyapariyesanasutta ではその後すぐ五比丘とともに暮らして教えたとなっているが、律典の受戒捷度の関心はいかにして仏陀が彼らを弟子として受け入れたか（受戒させたか）にあるため、ここに仏陀による最初の出家弟子受け入れの儀礼の記述が現れる¹²⁴⁾。

初期經典の仏伝と同様、五人のうちまずコンダンニャが仏陀の説法を理解する。そして、仏陀に入門を願い出る：

Vinaya I 12

atha kho bhagavā imaṃ udānaṃ udānesi: aññāsi vata bho koṇḍañño aññāsi vata bho koṇḍañño ti. iti h' idaṃ āyasmato koṇḍaññassa aññātaḥkoṇḍañño tv eva nāmaṃ ahoṣi. / atha kho āyasmā aññātaḥkoṇḍañño diṭṭhadhammo pattadhammo veditadhammo pariyogāḷha-dhammo tiṇṇavicikiccho vigatakathaṃkatho vesārajappatto aparappaccayo satthu sāsane bhagavantam etad avoca: labheyyāhaṃ bhante bhagavato santike pabbajjaṃ. labheyyaṃ upasampadan ti. ehi bhikkhū 'ti bhagavā avoca, svākkhāto dhammo, cara brahmacariyaṃ sammā dukkhassa antakiriyaṃ 'ti. sā 'va tassa āyasmato upasampadā ahoṣi. /

そのとき世尊はこのウダーナを発した、「コンダンニャは知った、コンダンニャは知った」と。実にこうして、アンニャータコンダンニャが尊者コンダンニャの名前となった。そして尊者アンニャータコンダンニャは、ダルマを見、ダルマに到達し、ダルマを知り、ダルマに深く通達し、疑いを超え、疑問を去り、畏れの無い状態に達し、教師の教えにおいて他を頼りとせず、世尊にこう言った、「御身よ、世尊のもとで私は出家を得たい。私は受戒を得たい」と。「来い、比丘よ」と世尊は言った。「ダルマは善く説かれた。正しくブラフマチャリヤを行え、苦悩の終息のために」と。これがこの尊者の受戒となった。

ほぼ同じ説話が『四分律』と『五分律』にもみられる：

『四分律』卷第三十二受戒捷度之二 (T 22: 788b-c)

爾時世尊，已知阿若憍陳如心中所得，便以此言而讚曰，阿若憍陳如已知，阿若憍陳如已知。從是已來名阿若憍陳如。……爾時尊者阿若憍陳如，見法得法成辦諸法已獲果實，前白佛言，我今欲於如來所修梵行。佛言，來比丘，於我法中快自娛樂，修梵行盡苦原。時尊者憍陳如，即名出家受具足戒。是謂比丘中初受具足戒，阿若憍陳如爲首。

その時世尊は、阿若憍陳如が心の中で得たことを知り、次の言葉で讚えた、「阿若憍陳如
は知った、阿若憍陳如は知った」と。これより阿若憍陳如という名である。……その時、
尊者阿若憍陳如は、法を見、法を得、諸法を成辦し、果實を獲、前にて仏に申し上げた、
「私は今、如來のもとで梵行を修したい」と。仏は言った、「来い、比丘よ。我が法の中で、
快く自ら娛樂し、梵行を修し、苦の原を盡せ」と。そのとき尊者憍陳如は即座に出家し具
足戒を受けたとする。これを、比丘の中で初めて具足戒を受けたのは、阿若憍陳如が最初
であるという。

『五分律』卷第十五初受戒法 (T 22: 105a)¹²⁵⁾

於是憍陳如，從坐起頂禮佛足，白佛言，世尊，願與我出家受具足戒。佛言，善來比丘，受
具足戒，於我善說法律能盡一切苦淨修梵行。憍陳如，鬚髮自墮袈裟著身鉢盂在手。是爲憍
陳如已得出家受具足戒。自是已後，名爲阿若憍陳如。

これらの律典によれば、仏陀が直々に行った最初の出家弟子の受け入れは、

- (1) 入門者が出家と受戒（具足戒）を願う/ブラフマチャリヤを行うと述べる（下記）
- (2) 仏陀が「来い、比丘よ」という言葉をかける
- (3) ブラフマチャリヤを課す

というものである。入門の申し込みの言葉は次のとおりである¹²⁶⁾：

1. パーリ律：「御身よ，世尊のもとで私は出家を得たい。私は受戒を得たい」
(labheyyāhaṃ bhante bhagavato santike pabbajjāṃ. labheyyaṃ upasampadam)
2. 『四分律』：「我今欲於如來所修梵行」（私は今，如來のもとで梵行を修したい）
3. 『五分律』：「世尊願與我出家受具足戒」（世尊よ，私に出家と具足戒を受けることを与えてくだ
さい）

これらの言葉は初期經典の仏陀への入門の申し込みに平行表現がある：

labheyyāhaṃ bhoto gotamassa santike pabbajjaṃ. labheyyaṃ upasampadam

「私は御身ゴータマのもとで出家を得たい。私は受戒を得たい」等 (2.1.2.3)

brahmacariyaṃ carissāma bhagavā tava santike

「私たちはブラフマチャリヤを行います、世尊よ、君のもとで」等 (2.1.2.2)

2.3.2.2 五比丘の受戒：最初の善来具足

五比丘に対する仏陀の入門の受け入れの言葉は、各律典ともほぼ同じである：

1. パーリ律：「来い、比丘よ。ダルマは善く説かれた。正しくブラフマチャリヤを行え、苦悩の終息のために」(ehi bhikkhu. svākkhāto dhammo. cara brahmacariyaṃ sammā dukkhassa antakiriyaṃ)
2. 『四分律』：「來比丘，於我法中快自娛樂，修梵行盡苦原」（来い、比丘よ。我が法の中で、快く自ら娛樂し、梵行を修し、苦の原を盡せ）
3. 『五分律』：「善來比丘，受具足戒，於我善說法律能盡一切苦淨修梵行」（善く来い、比丘よ。具足戒を受け、我が善く説ける法と律においてよく一切の苦を盡し梵行を淨修せよ）

前述のように (2.1.3)，仏陀が「来い」と呼びかけて入門させる形式は、「来い比丘よ〔という言葉による〕入門」(ehi-bhikkhu-upasampadā, 善来具足) とよばれる¹²⁷⁾。上記の受け入れの言葉も初期經典に平行表現がある：

ehi bhikkhu 「来い、比丘よ」 (2.1.3)

svākkhātaṃ brahmacariyaṃ 「ブラフマチャリヤは善く説かれた」 (2.1.2.2; cf. 2.1.5)

ehi tvaṃ mālunkyaṃputta mayi brahmacariyaṃ cara ahaṃ te byākarissāmi

「来い、マールンキヤープッタよ、君は私のもとでブラフマチャリヤを行え。私は君に説明しよう」(MN I 428) (2.1.3)

Cf. brahmacariyaṃ sugate carāmaṃ ... dukkhassa' antakarā bhavāmaṃ

「私たちはよき境地に至った人のもとでブラフマチャリヤを行おう。……苦悩を終息させる者たちとなろう」(Sn 32: 入門者の言葉) (2.1.2.2)

仏陀の教えを聞いた人が苦悩の終息のために仏陀に出家と受戒を願うかブラフマチャリヤを行うと表明して入門を申し込む、仏陀は「来い」と言って入門者を受け入れブラフマチャリヤを

課す、という、初期經典に散在する仏陀への入門儀礼の諸要素が、律典の善來具足儀礼に集約されている。

コンダンニャに続いて他の比丘たちも同じ作法で入門し、仏陀の弟子は五人となる。仏陀に「ブラフマチャリヤを行え」と言われて入門した彼らは、ブラフマチャリヤを住し終えて輪廻から解放される：

Vinaya I 14¹²⁸⁾

evam passam bhikkhave sutavā ariyasāvako rūpasmim pi nibbindati. ... nibbindam virajjati. virāgā vimuccati. vimuttasmim vimutt' amhiti nāṇam hoti. khīṇā jāti, vusitam brahmacariyam, kataṃ karaṇīyam, nāparam itthattāyā 'ti pajānātīti. / idam avoca bhagavā. attamanā pañcavaggiyā bhikkhū bhagavato bhāsitaṃ abhinandanti. imasmīn ca pana veyyākaraṇasmim bhaññamāne pañcavaggiyānaṃ bhikkhūnaṃ anupādāya āsavehi cittāni vimuccimsu. tena kho pana samayena cha loka arahanto honti. /

「このように見つ、比丘たちよ、学んだ聖弟子¹²⁹⁾は物質を厭う。……彼は厭いつつ無執着になる。無執着ゆえに彼は解放される。解放されたとき、『私は解放された』という知が生じる。『生まれることは尽きた。ブラフマチャリヤは住し終えられた。なされるべきことはなされた。さらにここの〔輪廻〕状態に〔戻ることは〕ない』と彼は知る」と、こう世尊は語った。満足した五人の群の比丘たちは世尊の語りを喜ぶ。さらにこの説明が語られているとき、五人の群の比丘たちの心は取著をなくして漏から解放された。そのとき、世間に「仏陀と五比丘という」六人の阿羅漢が存在することになった。

3 ウパニシャッドの入門儀礼と初期仏典の仏陀への入門

3.1 未曾有の教えを求めての入門

初期仏典が語る仏陀その人への入門の記述を、ウパニシャッドの「学者たちの入門」と比較すると、次の共通点があることがわかる。

まず、入門の儀礼形式が共通している。初期仏典では次のとおりである：

- (1) 入門者が言葉で仏陀に入門を願い出る
(帰依、ブラフマチャリヤを行う意志の表明、出家と受戒を願うなど)
- (2) 仏陀が「来い (ehi)」で始まる言葉によって承認する
- (3) ブラフマチャリヤが課される

この一連の儀礼の流れは、ウパニシャッドの「学者たちの入門」儀礼が、

- (1) 入門者が薪を持参し、言葉で入門を申し出る
- (2) 師が「来い (ehi)」などの言葉で承認し、薪をくべさせる
- (3) 師のもとでブラフマチャリヤを住する

という形式で行われる (1.6.2; 3) のとよく対応している。仏典では、「来い」という仏陀の言葉はのちに「来い比丘よ [という言葉による] 受戒」(ehi-bhikkhu-upasampadā, 善来具足) という名称を定着させたほどに特徴的な儀礼要素とみなされる。

次に、誰が何のために入門するかについて、初学者ではない一人前の人物が、未曾有の教を学ぶために、自分より優れた人物に改めて新しく入門するという点が共通している。ウパニシャッドに語られるのは、すでに通常のヴェーダ入門儀礼とウェーダ学習を修了した学匠や神々が秘義の知識を求めて改めて行う「学者たちの入門」である。一方、初期仏典でも、仏陀に直接入門するのは、すでに各自の方法で修行していた人々ないし何らかの教義をもっていた人々（ヴェーダ祭式を行っているバラモンたちを含む）であることが多い。彼らはそれまでの生活によっては悟りを得ることができず、仏陀の教を聞き、その優越を認めて仏陀に入門する。バラモン階級から入門者が出るとなると、バラモンが王族（の出身とされる仏陀）に入門するという構図もウパニシャッドの入門説話と共通となる。

ウパニシャッドにあって初期仏典にない入門の儀礼要素は「薪の持参」である。第1章でみたとおり、ヴェーダ文献では『アタルヴァヴェーダ』以来、薪は祭火の持ち主である師に奉仕する学生（ブラフマチャーリン）を象徴する。薪による師の祭火の世話は学生の重要な義務のひとつである。ウパニシャッドでは、薪を持参する行為が、一人前のバラモン学匠であるにもかかわらず一時的に学生の立場にたち教を乞う意志表示となった。これに対して、仏陀への入門に薪の持参という儀礼要素が現れないのは、ヴェーダの宗教が祭火を中心とするのに対し、仏教は祭火への献供という行為に重きを置かなかったためと考えられる¹³⁰⁾。

3.2 初期仏典の仏陀への入門とブラフマチャリヤ

ウパニシャッドの「学者たちの入門」と初期仏典の仏陀への入門にみられるもうひとつの大きな共通点は、入門にあたってブラフマチャリヤが課されることである。上述のとおり、仏陀への入門の際は仏陀のもとでブラフマチャリヤを行うと表明する：

Suttanipāṭa 32: brahmacariyaṃ sugate carāmaṣe (2.1.2.2)

Suttanipāṭa 566: brahmacariyaṃ carissāma bhagavā tava santike (2.1.2.2)

『四分律』： 我今欲於如來所修梵行 (2.3.2.1)

これらの言葉はウパニシャッドの一節にある次の入門の申し込みとほぼ同じである：

Chândogya-Upaniṣad 4.4.3

sa ha hāridrumataṃ gautamaṃ etyovāca brahmacariyaṃ bhagavati vatsyāmy. upeyām
bhagavantam iti.

彼（サティヤカーマ）はハーリドルマタ・ガウタマのところにやって来て言った、「先生の
もとで私はブラフマチャリヤを住そう。私は先生に入門したい」と¹³¹⁾。

ウパニシャッドでは入門することと師のもとでブラフマチャリヤを住することは同置される (1.6.4)。初期經典でも仏陀に入門することが仏陀のもとでブラフマチャリヤを行うことと同義であるのは上でみたとおりである¹³²⁾。

初期仏典のこうした入門の語りの枠組み —— これまでにない教えを求める人がより卓越した人のもとでブラフマチャリヤを行う —— は、仏伝では仏陀自身にもあてはめられる。仏陀は成道前に教えを求めて二人の師のもとでブラフマチャリヤを願い出たとされる (2.2.1)。複数の師への入門、あるいは理解できるまでの複数回の入門とブラフマチャリヤは、ウパニシャッドの「学者たちの入門」にもみられるものである (cf. 注58)。

仏陀への入門とその後の修行の文脈において、ブラフマチャリヤは、「苦悩の終息のために」行われ、それを住し終えることが「生まれることが尽くされ、なされるべきことがなされた」境地と等しい行いとされる。このブラフマチャリヤは主に「[性的禁欲を含む生活制限を遵守しつつ仏陀の教えの実践を含む務めに励む] 修行生活」をさすとみられる。これも、ウパニシャッドを含むヴェーダ文献における入門の文脈での「[性的禁欲を含む生活制限を遵守しつつ学習を含む務めに励む] 修行生活」としてのブラフマチャリヤ (1.6.4) と対応する¹³³⁾。

3.3 善来具足儀礼の形成

ウパニシャッドの入門場面と初期仏教律典の善来具足場面に「来い (ehi)」という師の呼びかけの言葉が共通して現れることは、すでに 19 世紀に H. Oldenberg が注記している。Oldenberg の指摘は、ŚB 11.5.3.13 (1.6.3 に上掲) のシャウチェーヤの言葉 úpāyāni bhāga-vantam 「卿に私は入門しよう」とそれに対するアールニの返答 éhy úpehi 「来い。入門せよ」が、仏典にみられる upemi buddhaṃ saraṇaṃ dhammañ cāpi anuttaraṃ 「仏陀に帰依せよ、無上のダルマにも」などの定型句や、Vinaya の受戒の場面での ehi bhikkhu svākkhāto dhammo cara brahmacariyaṃ 「来い、比丘よ。ダルマは善く説かれた。ブラフマチャリヤを行え」と

いう仏陀の言葉と明らかに関連しているというものである（Oldenberg 1886: 58f.）。

この指摘はヴェーダと仏典に類似の文言が現れることに注意を喚起した点で重要なものであるが、これはグリヒヤーストラの入門式章に対する訳注で、入門式 Upanayana/Upāyana が本来「師のところへ父が子を連れて行く（upa-ni）」のではなく「師が入門者をブラフマチャリヤないし師自身へと導き入れる（upa-ni）」「入門者がブラフマチャリヤないし師に近づく（upa-i）」儀礼である（上記注 4）ことを説明するために úpa-i「入門する」、úpa-nī「入門させる」の古い用例として ŚB の当該箇所と言及したものであって、そこでのアールニの言葉がブラーフマナ文献新層とウパニシャッドに独特の「学者たちの入門」の儀礼要素であることを看過している¹³⁴⁾。上述のとおりウパニシャッドの入門は、『アタルヴァヴェーダ』からグリヒヤーストラにかけて発達した通常のヴェーダ入門儀礼とは性質と形式をやや異にするものである。本稿で論じてきたように、初期仏典の仏陀への入門儀礼と対応するのは、まさにそのウパニシャッドの「学者たちの入門」儀礼のほうなのである。

善来具足儀礼の最大の特徴は仏陀の「来い、比丘よ」という直々の呼びかけをもって受戒とする点にある。律典は白四羯磨による受戒を正式な儀礼として規定し、受戒儀礼の僧団加入儀礼という面を際立たせているが、僧団が成立するまでについては、仏陀が直々に入門させて弟子にしたと説明せざるを得なかった（平川 2000: 105-117）。そこで、初期經典にもみられる「来い、比丘よ」という導き入れ（*initiation*）の言葉を取りあげて、「来い比丘よという呼びかけによる受戒（ehi-bhikkhu-upasampadā, 善来具足）」を定義したとみられる。善来具足による仏弟子の数が増えすぎて僧団による授戒儀礼が必要となったところで律典の受戒捷度の仏伝は終わる。善来具足は仏陀自身による授戒形式として各部派に伝承され、各種仏伝にも取り込まれる。

律典の仏陀による授戒の描写は、初期經典の仏陀への入門場面の描写とほぼ一致している。初期經典の仏陀その人への入門申し込みの文言にも upasampadā と bhikkhusaṃgha の語が多く現れる。通例「受戒、具足戒」「比丘僧伽」という術語と解されるこれらの語が現れることは、初期經典の仏陀への入門の説話が、すでに僧団が成立し戒律が整備された時代になってから現存の形に整えられた可能性を示唆している。ただし、仏陀在世時の入門場面を伝える説話の原型が元来存在し、そこではこれらの語は原義（「近づくこと、入門、弟子入り」「比丘の集団」）どおりに用いられていたのか、あるいは經典の編纂過程で術語の意味（受戒・具足戒、僧伽）が遡って適用されたのか、またあるいは教説部分がまず存在し、それを物語仕立てにするために入門場面が後から創作され付加されたのか、いずれであるのかは、現存の初期仏典がいずれも各部派内の編纂を経た後のものであるため、俄かに決定しがたい¹³⁵⁾。仏陀への入門の定型表現を機械的といえるほど經典の特に末尾に置くことを繰り返し、二次創作を示唆する經典群が数多くある一方で、帰依の対象が三宝でなく仏陀のみの例があったり（2.1.2.2）、「来い」

という仏陀の呼びかけに「比丘よ」だけでなく「何某よ」と相手の名が入る例があったり(2.1.2.3)と、定型表現にもゆれがあることを考慮すると、すべてが完全な後代の創作というわけではない可能性がある¹³⁶⁾。いずれの場合も、ある段階で仏陀への入門の申し込みと受け入れの定型表現がある程度固定され、教説を語る枠組みとして組み込まれたとみられる。

秘義を語る際の物語の枠組みとなっている点は、ウパニシャッドの学者たちの入門場面も同様である。ただしウパニシャッドの場合は、入門場面の文章が極端に定型化されてはいないこと、文言に後代の付加を疑わせる要素は特になく、登場人物が神格化されているわけではない¹³⁷⁾ことなどから、入門の物語の枠組みだけが後代になってから加えられたとは考えにくい。むしろ、当時実際に行われていたバラモン学者たちの入門の慣習が、著名な学匠や神々に仮託されて語られているとみるのが自然である。

ウパニシャッドの「学者たちの入門」と、初期仏典における仏陀その人への入門が、形式上も意義上も無視しえないほどの相似を示すという事実は、仏陀もまた、後期ウパニシャッド時代の革新的思想家の一人として、ウパニシャッドに伝わるバラモン学匠たちの入門と同様の形式——すでに学識を有する学匠が(しばしば対話・討論の後に)より卓越した学匠の優越を認め、短い言葉によって入門を申し込み、入門を申し込まれた側は「来い」と招いてブラフマチャリヤを課す——をとって人々に教えを説いていた可能性を示唆する¹³⁸⁾。

一方、ウパニシャッドの入門におけるもう一つの重要な要素である「薪の持参」は初期仏典にはみられない。ヴェーダの宗教で薪がブラフマチャーリンを象徴するのに対し、仏教ではヴェーダの宗教のイメージを排するために、仏陀への入門場面に薪という儀礼要素をあえて組み込むことはしなかったと考えられる。

む す び

ウパニシャッドにみられる「学者たちの入門」と初期仏典の仏陀への直接の入門には、形式にも意義にも顕著な共通点がみとれる。仏陀直々の弟子の受け入れが行われたであろう時期が、現存する仏典の成立年代よりも時代を遡り、年代的にウパニシャッドと重なることを考慮すると、初期仏典の仏陀と弟子の対話がウパニシャッドの師弟の対話と相似を示すことは注目すべきことである。

現存初期仏典の編纂時期の上限を前三世紀頃とすると、ヴェーダ文化ではグリヒヤーストラが成立し始めていた時期である。にもかかわらず、仏陀による弟子の受け入れの記述は、グリヒヤーストラが規定するブラフマニズムの通常の入門式¹³⁹⁾との類似を特には示さない。この点も、ウパニシャッド独特の「学者たちの入門」儀礼と初期仏典の仏陀への入門儀礼が著しい相似を示すことの意義を際立たせている。初期仏典が編纂された際に、仏陀による弟子の受け

入れを描写するにあたって、ウパニシャッドの時代の知識人たちの間で行われていた「私はあなたに入門したい」「来い」というやりとりによる入門が、当時の仏陀と仏弟子のあいだでも行われたように伝えられ、あるいは想像されて、定型表現として固定され、物語の枠組みを提供した可能性がある。ウパニシャッドと並行した言葉遣いで描写されている初期仏典の仏陀への入門場面に現れるブラフマチャリヤという語は、基本的にはウパニシャッドの入門儀礼の場合と同様の意味をもち、「[性的禁欲を含む/を主とする生活制限を遵守しつつ務めに励む]修行生活」をさしていたとみるのが妥当である。

注

- * 本稿は草稿段階で荒牧典俊、榎本文雄、馬場紀寿 各先生に懇切なご助言を賜った。記して深く謝意を表す。内容に関する責任はすべて筆者にあり、ご助言戴いた先生方の見解を本稿が代表するものではない。科学研究費補助金 25284011 の成果の一部。本稿の内容の一部は「仏教儀礼の成立と展開に関する総合的研究」研究会（金沢大学 2015 年 2 月 21 日）にて口頭で発表した。
- 1) 原語は brāhmaṇā- (<brāhman-/brahmán-)「ブラフマンに関わる者/祭官職に携わる者」（後藤 2008a: 62; 65）。この語は漢訳仏典で「婆羅門」等と音写された。現代日本語では慣例的に「バラモン」と表記する。四ヴァルナの最高位にある祭官階級に属する人をさす。中期ヴェーダ散文文献群の名称に用いられる brāhmaṇa-「ブラーフマナ」とはアクセントの位置が異なる。
- 2) 初期ヴェーダの段階では、まだヴェーダ聖典はまとまった形で編纂されていなかったであろう。以下に「ヴェーダ」というときは、「後にヴェーダ聖典として編纂されることになる〈聖なる言葉〉の総体」という広い意味で用いる。
- 3) ヴェーダ入門儀礼の概説は数多いが（Hillebrandt 1897: 50-55; Kane 1974: 268-392; Gonda 1979; 1980; etc.），多くは後期ヴェーダのグリヒヤーストラの記述に基づくものであり、総合的な研究は未だ出版されていない。入門儀礼の形成と発達の通時的概容については Kajihara 2012; 2013; 入門儀礼中の個々の儀礼行為の発達については Kajihara 2004; 2014b 参照。
- 4) グリヒヤーストラよりも前のヴェーダ文献では、入門の儀礼は動詞 úpa-nī「入門させる < [師が自分のもとに] 導く [Ā] (AV+)/ [brahmacārya に] 導く [P] (Br+)] および úpa-i「入門する < [師のもとに] 近づく (Br+)/ [師と brahmacarya に] 近づく (JUB 1.42.1)」によって表現される。グリヒヤーストラから現れる Upanayana「入門式」は úpa-nī から作られた名詞である（úpa-i から作られた Upāyana という語が用いられることもある）。梶原 2003a: 12, n. 1; cf. 下記注 25。
- 5) 初期律典では仏陀がこの形式を指示したという体裁で述べられる：Vinaya I 56: anujānāmi bhikkhave ñatticatutthēna kammaṇa upasampādetuṃ. / evaṃ ca pana bhikkhave upasampādetabbo. vyattēna bhikkhūnā paṭibaleṇa saṃgho nāpetabbo. suṇātu me bhante saṃgho. ayaṃ itthannāmo itthannāmassa āyasmato upasampadāpekkho. yadi saṃghassa pattakallaṃ saṃgho itthannāmaṃ upasampādeyya itthannāmena upajjhāyena. esā ñatti. ... upasampanno saṃghena itthannāmo itthannāmena upajjhāyena「比丘たちよ、四回目 [の発話による承認を伴う] 儀礼 (ñatticatuttha kamma) によって受戒させる (upa-sam-pad, caus.; cf. 注 72) ことを私は認める。

そこで比丘たちよ、次のように受戒させられるべきである。聡明で有能な比丘によって僧伽は告げられるべきである：『僧伽は私から聞け、御身よ。この某という名の者は、某という名の尊者によって受戒させられることを望んでいる。もし僧伽が納得したなら僧伽は某という名の者を某という名の和尚によって受戒せしめるように』。これが表白である。……僧伽によって某という名の者が某という名の和尚によって受戒させられた」；Vinaya I 58f. : na bhikkhave ūnadasavaggena gaṇena upasampādetabbo. yo upasampādeyya āpatti dukkaṭassa. anujānāmi bhikkhave dasavaggena vā atirekadasavaggena vā gaṇena upasampādetu[m] 「比丘たちよ、十人の群より少ない〔比丘〕集団によって受戒させられるべきではない。もし〔そのように〕受戒させれば悪作の罪がある。比丘たちよ、十人の群あるいは十人の群より多い集団によって受戒させることを私は認める」；『四分律』（T 22: 799c）：「佛言、……白四羯磨、當如是授具足戒。欲受戒者、詣僧中、偏露右臂脫革屣禮僧足、右膝著地合掌作、如是白。大德僧聽、我某甲、從某甲求受具足戒。我某甲、今從衆僧乞受具足戒、某甲爲和尚。願僧濟度我、慈愍故。如是第二第三說。……此是初羯磨。第二第三亦如是說。僧已與某甲受具足戒、某甲爲和尚竟」 etc. Cf. 平川 2000: 97-178; 佐藤 1963; 土橋 1968; 森 2013. 本稿ではパーリ文献は原則として PTS 版に拠る（散文テキストの箇所は PTS 版の巻〔ローマ数字〕と頁〔アラビア数字〕で示す。文は適宜切り、m は m で統一した）。

- 6) ウパニシャッドは、広義にはブラーフマナ（学派によってはアーラニヤカないしサンヒター）の新層の一部である。たとえば白ヤジュルヴェーダでは BĀU は ŚB の 10 巻の一部および 14 巻（Mādhyandina 派の場合）ないし 16 巻（Kāṇva 派の場合）の大部分に相当する。ヴェーダ文献におけるウパニシャッドの位置づけについては、辻 1970a（ヤジュルヴェーダ）；Witzel 1977（黒ヤジュルヴェーダ）；Kajihara 2009/2010: 51; 55f.（家庭祭の祭文を含むウパニシャッド）などを参照。
- 7) ゴータマ・ブッダの呼称は、本稿では原文を翻訳する際には慣例を尊重しつつできるだけ各原語の意味に沿うように訳し、本文中では便宜上「仏陀」で統一する。
- 8) 「受戒」という語は「戒を受け〔て仏教徒となり僧団に加入す〕る」ことを含意するため、本稿では仏陀個人への弟子入りを論じる際はこれを「入門」とよぶ。ただし引用文の翻訳では、「入門・受戒」をさすパーリ語 upasampadā- は便宜上慣例に従って「受戒」とする。下記注 72 参照。「受戒」が本来は仏陀への直接の弟子入り（入門）であったことについては阪本（後藤）1994: 83f.「附論：upasampadā『入門』と brahmacārya (pāli: brahmacariya)」参照。
- 9) brahmacārya- (n.) (Sanskrit); brahmacariya- (n.) (Pāli); 梵行（漢訳）。
- 10) この点は仏教学で繰り返し問題にされている（たとえば平川 1970; 荒牧 1984; 下田 2005; 並川 2005; 馬場 2010; 平岡 2010 など）。
- 11) brāhman- (n.) は初期ヴェーダでは「実現力をもつ聖なる言葉〔の霊力〕」を意味する。中期ヴェーダ以降は「宇宙の最高原理」をさすようになる。Renou 1949; Thieme 1952; Mayrhofer 1992-1996: 236-238 参照。
- 12) car は「動き回る」を原義とする自動詞であるが、「～に従事する、～に没頭する」という特殊な意味をもつことがある（Gotō 1987: 135, n. 172）。*brahman- + car という構文は見いだされず、brahmacārī car (RV 10. 109. 5 [後掲]); brahmacaryaṃ car などの構文が用いられる（下記注 25）。
- 13) 類似の対応関係をもつ語のペアに、brahmavādin-/brahmōdya-「ブラフマンを議論する者/ブラフマンを議論すること」がある（後藤 1994: 43, n. 7）。

- 14) 後述。Cf. Kajihara 2014a.
- 15) 『リグヴェーダ』の当該讃歌と『アタルヴァヴェーダ』のものとはパラレル関係にあるが、前者より後者のほうが讃歌を構成する詩節数が多い (RV では 7 詩節であるのに対し、AVŚ では 18 詩節; AVP では 17 詩節 [いずれも RV の全 7 詩節を含む])。
- 16) véviṣad viṣaḥ という表現については cf. RV 8.19.11c (havyā vā véviṣad viṣaḥ); Oldenberg 1912: 91: “*viṣaḥ* gewiß nicht Nominativ eines Nomen agentis (BR., auch für X, 109, 5), sondern Acc. pl. (Gaed. 240, Ludwig 4.378, Whitney Av. V,17,5, Geldner Gl.)”; Renou 1964: 89; 1967: 162; Schaefer 1994: 187.
- 17) この箇所の brahmacārín- のこれまでの主な解釈は, “der, welcher das Brahmanengelübde abgelegt hat” (Grassmann 1877: 495 [RV 独訳]); “nach der Weise der Brahmanen [*brāhman*] wandelnd” (Grassmann 1873 *Wörterbuch zum Rigveda* 915; cf. Gonda 1965: 284 “incorrectly translated”; cf. Gonda ibid. 235); “Brahmanschüler” (Geldner 1951: 331); 「祈祷を事とし (作詩に従事すること)」(辻 1970b: 340) など。Geldner 1951 は *brahmacārī carati* を “Er lebt als Brahmanschüler” と訳し, “d. h. keusch” と注記している (1951: 331, n. 2)。ブラフマチャーリンおよびブラフマチャリヤと性的禁欲の関係については後述 (1.5); cf. Kajihara 2014a. Whitney and Lanman (1905: 248, 同一詩節 AVŚ 5.17.5 の翻訳) は a 句 *brahmacārī carati véviṣad viṣaḥ* を “The Vedic student (*brahmacārín*) goes about serving (*viṣ*) much services” と訳している。Jamison and Brereton (2014: vol. 3, 1575) は同句を “The one who practices formulations keeps constantly laboring at his labors” と訳し, *brahmacārín* について “already in the Atharvaveda a word for ‘Vedic student’ and later a standard way of referring to a man practicing chastity” と注記している。Jamison and Brereton が解釈するように, *car* は動詞の現在分詞と共に用いられてその動詞の動作の継続性を示す働きをもつ (Delbrück 1888: 390) (ここでは *carati véviṣad viṣaḥ* 「繰り返し奉仕を奉仕し続けつつ」)。ただしこの箇所の *brahmacārī carati* という *car* を重ねる表現には, *car* の元の意味「動き回る」も含意されている可能性がある (「奉仕し続けつつ動き回る」)。Cf. AVŚ 11.5.1/AVP 16.153.1 (*brahmacārín* 讃歌): *brahmacārīṣṇāṁś carati ródasī ubhé* 「ブラフマチャーリンは天地両者を駆り立て続けつつ動き回る」, *brahmacāryaṁ car* 「ブラフマチャリヤを行う」という構文も参照 (下記注 25)。
- 18) AVŚ 11.5; AVP 16.153-155. 太陽の活動をブラフマチャーリンという存在の活動に仮託して謳うもので、太陽讃歌の一つである (Bloomfield 1897: 626; Kajihara 1995)。詳細は Kajihara 1995; 2002: 105-150 参照。
- 19) *brahmacārín* と *ācārya* の両者が同時に現れる讃歌には AVŚ 11.5/AVP 16.153-155 (*brahmacārín* 讃歌); AVP Orissa 20.53/AVP Kashmir 20.49 (入門儀礼祭文); *brahmacārín* ないし *ācārya* の一方のみが讃歌中に現れるが他方との関係性をも示唆しているものには AVŚ 6.133/AVP 5.33 (*mékhala* 讃歌); AVŚ 19.64 (*samīdh* 讃歌); AVP 19.53 (*adhipati* 祭文); AVP 19.54 (財産の増大を願う歌) がある。AVP にはカシミール (AVP Kashmir) とオリッサ (AVP Orissa) の二系統の伝承が現存する。後者はより多くの讃歌・詩節を伝えている。そのため両者の讃歌・詩節番号は一致しないことがあり、テキストの読みが異なることも稀ではない。両伝承を校合した校訂版は複数の研究者により順次出版途上にある。本稿で AVP の校訂版が未出版の箇所 (主に 19, 20 巻) を引用する際は, Kashmir 伝承はシャーラダー文字写本ファクシミリ版 (Bloomfield and Garbe 1901), Orissa 伝承は Arlo Griffiths 博士と Michael Witzel 博士から写真を戴いたオリヤ文字写本に拠る。

- 20) ダルマ文献以降、入門式を行うことはヴァルナ制度における上位三階級（バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシュヤ）成員の資格要件とみなされるようになる。入門時の師からの誕生は両親からの出生に次ぐ第二の誕生とされ、入門式を経た男子は「二度の生をもつもの、再生族」(dvija, dvijāti, etc.) とよばれる（梶原 2003a: 4f.; in press）。ポスト・ヴェーダ文献では dvija の語は、階級と入門式の間接関係を規定する文脈以外ではほぼバラモンをさす。
- 21) Cf. RV 1. 164. 45 (謎の歌): catvāri vāk pārimitā padāni tāni vidur brāhmaṇā yé maṇiṣaṇah / gūhā trīṇi nīhitā nēṅayanti turīyaṁ vācō maṇuṣyā vadanti // 「言葉は四つの四分の一からなると測られている。思慮あるバラモンたちはそれらを知っている。[四つのうち] 秘密裡に蓄え置かれた三つを彼らは発動させない。人間たちは言葉の四分の一 [のみ] を話している」; cf. also RV 10. 90. 3-4 (「プルシャ讃歌」で、プルシャの四分の一のみが地上にあり、あとの四分の三は天上にあって不死とされる)。
- 22) ブラフマチャーリン讃歌が太陽讃歌のひとつであること、この讃歌の背後にブラフマチャーリンが太陽のために祭火に献供する儀礼が存在した可能性があることについては、Kajihara 1995 参照。ブラフマチャーリンと薪の結びつきはブラーフマナ文献以降も引き続き現れる。薪による祭火の世話もブラーフマナ文献以降ブラフマチャーリンの主要な務めとされる (cf. 注 43)。二つの火という表現は、ブラーフマナ文献以降一般的になる「天上の火 (太陽) と地上の火 (祭火)」という観念にも通じるものがある。
- 23) AVŚ 5. 17. 5/AVP 9. 15. 5=RV 10. 109. 5 (繰り返し奉仕し続けつつ動き回る); AVŚ 6. 133. 3/AVP 5. 33. 3 (mékhalā の歌: 死 [神] のブラフマチャーリンとして人間を乞い求めその者に帯を締める); AVŚ 6. 108. 2/AVP 19. 17. 8 (智慧を最初に飲む); AVP 5. 35. 8; AVŚ 19. 19. 8/AVP 8. 17. 8; AVP 7. 14. 9 (一連の諸存在のペアの列挙の中でブラフマンとペアになる); AVP 19. 53. 7-9; 19. 54. 6, 8 (牛や馬と並ぶ財産の一部として列挙される); AVP Orissa 19. 53. b; q; AVP Kashmir 20. 41. 7; AVP Orissa 20. 46. 1, 6/Kashmir 20. 44. 1-2; AVP Orissa 20. 52. 9/Kashmir 20. 48. 9; cf. AVP Kashmir 20. 41. 8 (corrupt) ([おそらく師が、財産の一部として獲得すべく] 呼びかける); AVP Orissa 20. 53. 2/Kashmir 20. 49. 2 (入門儀礼祭文)。
- 24) AV における出現箇所は、AVŚ 7. 109. 7; 11. 5. 17-19; AVP 4. 9. 6; 9. 18. 4; 9. 23. 2; 16. 154. 7-9; 19. 55. j (Orissa 写本のみ; cf. Kajihara 2002: 174f.)。
- 25) brahmacārya- と結びつく動詞と主な用法は以下のとおり：
 brahmacāryam + vas 「ブラフマチャリヤを住する」(AVŚ 7. 109. 7/AVP 4. 9. 6; AB 5. 14; etc.)
 brahmacāryam + 師 (loc.) + vas 「師のもとでブラフマチャリヤを住する」(ŚB 14. 8. 2. 1; ChU 4. 4. 3; etc.)
 brahmacāryeṇa + vas 「ブラフマチャリヤをもって/行いながら住する」(PraśU 1. 2)
 brahmacāryam + car 「ブラフマチャリヤを行う」(PB 17. 1. 2; ŚB 11. 3. 3. 7; etc.)
 brahmacāryam + ūpa-i 「ブラフマチャリヤに入る」(ŚB 11. 3. 3. 2; etc.)
 brahmacāryam + 師 (acc.) + ūpa-i 「師に入門してブラフマチャリヤに入る」(JUB 1. 42. 1)
 brahmacāryam + 師 (acc.) + ā-gam 「師のもとへブラフマチャリヤにやってくる」(MS 1. 6. 12: 106. 2; etc.)
 brahmacāryam + ā-gā 「[師のもとへ] ブラフマチャリヤにやってくる」(ŚB 11. 5. 4. 1; etc.)
 brahmacāryam + 入門者 (acc.) + ūpa-nī 「[師が] 入門者を入門させてブラフマチャリヤに導き入れる」(ŚB 11. 5. 4. 16; etc.)。
- 26) AVŚ 11. 5. 17; AVP 16. 154. 7. ここでは師が資産の一部として自分のブラフマチャーリンを求

- めることをさすとみられる。『アタルヴァヴェーダ』新層には、財産としてブラフマチャーリンを家畜や使用人とあわせて列挙する祭文 (AVP 19.53.7; 8-9; cf. Kajihara 2014a) や、ブラフマチャーリンを募集する祭文 (AVP Kashmir 20.41.7; 20.44.1; 20.48.9; AVP Orissa 20.46.1; 20.52.9; cf. TU 1.4; KāṭhŚikṣU 4.3; cf. Kajihara 2009/2010: 43f.; 47-49) がある。
- 27) ブラフマチャリヤと性的禁欲については後述 (1.5); cf. Kajihara 2014a.
- 28) brahmacarya- が明らかに「性的禁欲」という限定的な意味で用いられている例が現れるのはウパニシャッド以降である (1.5 で後述)。シュラウタースートラには、アシュヴァメダ祭に用いる雄馬を雌馬から遠ざけておくという規定の文脈で、雄馬の性的禁欲という意味で「ブラフマチャリヤ」の語を用いるものがある (ŚāṅkhŚS 16.1.15; 手嶋英貴教授のご教示による)。アシュヴァメダの馬を番わせないという規定はブラーフmana文献にもみられるが、馬の禁欲を表現する際にブラフマチャリヤという語を用いるのはシュラウタースートラのみで、それより古い文献にはみられない (Kajihara 2014a)。
- 29) 『アタルヴァヴェーダ』新層に一例だけ、ブラフマチャリヤとヴェーダの学習が並んで現れる: AVP Orissa 19.55.j: manomayī brāhmaṇam ainddha sa brahmacaryam avasat sa vedam anvabrūta so 'pa tamo 'hata so 'nnādyam avārunddha /apa tamo hate 'nnādo bhavati ya evaṃ veda // 「意からなるものはパラモンを点火した。彼はブラフマチャリヤを住した。彼はヴェーダを学んだ。彼は闇を打ち払った。彼は食物を囲い込んだ。このように知る者は闇を打ち払い食物を食べる者となる」。この一節は Orissa 写本にしかなく未出版である (ここに引用したのは Arlo Griffiths 博士が 2001 年に作成した仮テキストを筆者が一部修正したもの)。
- 30) 以下の儀礼行為に振ってある番号は便宜上のもので、この順序で儀礼行為が行われたことを示すものではない。当該行為を示す詩節は複数の讃歌にわたり、テキストの複数の時代層にまたがっていてもいるため、ここに列挙した儀礼行為がすべて一連のものとして記されているわけではない。詳細は Kajihara 2004; 2009/2010; 2012; 2013; cf. 2014b.
- 31) Kashmir 写本ではテキストがやや崩れている (Kajihara 2004: 247; 2009/2010: 41f.)。入門式で師が入門者の手を握る際の祭文については Kajihara 2004; 2014b 参照。
- 32) Cf. AVŚ 14.1.51 (結婚の歌): bhāgas te hāstam agrahīt savitā hāstam agrahīt /pātnī tvām asi dhārmanāhām gṛhapatis tāva // 「バガが君の手を握った。サヴィトリが [君の] 手を握った。君はダルマによって妻である。私が君の家長である」; AVP 18.5.8. 「結婚の歌」が収められている巻 (AVŚ 14/AVP 18) は入門儀礼祭文を収録している巻 (AVP 20) よりも古層に属するから、この祭文は結婚儀礼から入門儀礼へ採り入れられたとみられる (Kajihara 2004; 2009/2010)。
- 33) ヴェーダ文化における結婚と入門の儀礼の共通性については Kajihara 2004; 2013 参照。
- 34) Cf. 梶原 2003a; 2004; 2012; 2013 (esp. 57); 2014b; cf. 渡瀬 1993.
- 35) KāṭhB は完全な形では現存しない。残存する写本断片の一部が Kāṭha 派聖典拾遺として出版されている: Schroeder 1898 (KāṭhB); Caland 1920 (KāṭhB); Sūryakānta 1943 (KāṭhB; -Śrautasūtra); Witzel 1974; 2004 (KāṭhĀ); Witzel 1977; 1979; 1980 (KāṭhŚikṣU); Rosenfield 2004 (KāṭhB). KāṭhB の断片とみられるものの中に、入門儀礼を主題とする upanayana-brāhmaṇa がある。内容は ŚB 11.5.4 とある程度パラレルである (cf. Kajihara 2009/2010: 45f.)。
- 36) サーヴィトリ詩節 (Sāvitri) は、サヴィトリ神に捧げられた詩節の中でも、ブラーフmana文献以降特に神聖視されるようになるものをいう。複数の韻律のものが言及されるが、ガーヤत्री韻律のものが最上とされ、通例は RV 3.62.10 をさす (梶原 2003a: 13, n. 6)。ヴェーダ文献およびヴェーダ以外の文献における各種のサーヴィトリについては Kajihara 2015.

- 37) KāṭhB (upanayana-brāhmaṇa) では、入門儀礼において入門者が師から受ける訓示は次のとおりである： apò 'śāna ... kārma kuru ... divā mā suṣupsīr ... vācam yaccha (Sūryakānta 1943: 49f.) 「水 [だけ] を飲め。…… 務めを行え。…… 昼に眠るな。…… 言葉を抑制せよ」。動詞 svap の injunctive 形については cf. Hoffmann 1967: 91, n. 180; Narten 1964: 20; 284.
- 38) ŚB で「水を飲め」という訓示が最初と最後の二回行われるのは、入門者を「両側から不死で包む」ためとされる (ŚB 11. 5. 4. 5: tād enam ubhayāto 'mṛtena párigṛhṇāti 「そのことによってこの者を両側から不死によって包む」)。Cf. Prāṇāgnihotra (氣息 [という祭火] へのアグニホートラ), BaudhDhS 2. 7. 12. 3; 10 は食事を Prāṇāhuti と称し、食事の前後に水を「不死の [上下の] 覆い」と呼んで飲む。Cf. Bodewitz 1973: 254ff. ŚB と同じ白ヤジュルヴェーダの系統とされる YājSm 1. 106 は、食事の前後に水を飲むことによって食べ物を通ずる (不死なる水で上下から包む) とする (井狩・渡瀬 2002: 208 [同書では 1. 105])。KāṭhB では水を飲む訓示は一回である (上記注 37)。
- 39) 生活制限の中に性的禁欲は言及されていないが、師に入門した後の修行生活には含まれていたであろう。逆説的ではあるが、ブラーフマナ文献以降、師の妻とブラフマチャリーンの密通 (の禁忌) に関する言及がみられる (MS 1. 6. 12; ChU 5. 10. 9)。
- 40) Cf. 梶原 2003: 3f. (ŚB 11. 5. 4 が述べる入門儀礼と、同じ白ヤジュルヴェーダに属する PGS の入門式との対応)。類似の訓示の儀礼は他学派のグリヒヤストラの入門式にも組み込まれている。
- 41) Cf. KāṭhB (upanayana-br., Sūryakānta 1943: 50. 12): sā vā eṣā brahmacārī sāvitryā saha prājāyate. tād āhuḥ. samvatsarē 'nūcyā. samvatsarē vāi rétāmsi siktāni prājāyanta ity 「そういうこのブラフマチャリーンは、サーヴィトリと共に生まれるのだ。そのことについて人々は言う、『一年後に [サーヴィトリは] 教えられるべきである。精液は放出されて一年後に [胎児を経て] 新生児となって] 生まれるのだ』と」。
- 42) Cf. ŚB 11. 5. 4. 16: gārbho vā eṣā bhavati yō brahmacāryam upāiti 「ブラフマチャリヤに入る者は胎児となるのだ」。
- 43) JB 2. 276 (後掲：師の用事、牛の世話、学習)；ŚB 11. 3. 3. 1 (薪を取ってくる)；BĀU 3. 1. 2 (牛を追う)；ChU 4. 4 (牛を追う)；4. 10. 1 (祭火の世話)；cf. ChU 4. 3. 5 (乞食)。Cf. JB 1. 271: sa hovācāṣāḍha ām āruṇe yat sahaiva brahmacāryam acarāva sahanvabravivahy atha kenedam tvam asmān atyanūciṣe 「アーシャーダは言った、『ああアールニよ、我々二人は共にブラフマチャリヤを行い、共に学んだのに、どうやって君は我々を超えて学んだのか』」。ブラフマチャリヤと学習が並んで現れる例については注 29；cf. 注 48。
- 44) adhi-i 「学習する」については Gotō 1990: 1002-1005 参照。
- 45) ṛṇām ... jāyate の解釈については Gotō 2008b: 119 参照。
- 46) nidhigopā. 『リグヴェーダ』がいう秘密裡に蓄え置かれた言葉や『アタルヴァヴェーダ』がブラフマチャリーンの独占物とする秘密裡に蓄え置かれたブラフマンの知識も nidhi-, ni-dhā の語で表現される点を参照 (1. 3. 1)。
- 47) ヴェーダ文献における śraddhā- の語義については後藤 2007 参照。
- 48) Cf. JB 1. 271 (注 43 に上掲)；cf. also PraśU 1. 2: bhūya eva tapasā brahmacāryeṇa śraddhayā samvatsaram samvatsyatha 「さらに一年を、苦行と、ブラフマチャリヤと、信をもって住め」。PraśU 1. 2 について Gonda 1965: 291 は “Here the main element of the brahmacārya concept is no doubt 'chastity'” と断じているが、「禁欲を含むが禁欲のみに限定されない、学習準備として

の止住修行生活」をさす可能性がある。学ぶ前に師のもとに止住することについては後述（1.6.4）。

- 49) brahmācārya- が「禁欲」という意味をもつ文脈についての詳細は Kajihara 2014a 参照。brahmācārin- の語も文脈によっては「性的に禁欲している者」を限定的にさすことがある (Kajihara, ibid.)。
- 50) こうした「学者たちの入門」の主な類型は次のとおり：(a) 論戦に敗れて入門を申し出る：ŚB 11.4.1.9; 11.5.3.13; BĀU 2.1.14. (b) 王族に質問されて無知を認め入門を申し出る：BĀU 6.2.7; 2.1.14; KauṣU 1.1 (cf. ChU 5.3.6f.: 入門儀礼なし；ただし「それを私に話せ (tām eva me brūhi)」 「長く住せ/留まれ (ciraṃ vasa)」 というやりとりがある：cf. 下記 1.6.2; 3); KauṣU 4.18. (c) 祭式の意義などを教わるために入門する：ŚB 10.6.1.2 (cf. ChU 5.11.7); 11.4.2.20; 14.1.1.21ff.; ChU 8.7.2ff.; PraśU 1.1f. ウパニシャッドの学者たちによる論戦 (brahmōdya) については Witzel 1987; 後藤 1994; cf. 渡瀬 1993 (秘儀のための入門)。ウパニシャッドの「学者たちの入門」を行う人々はすでに通常の入門儀礼と学習を終えて一定のヴェーダの知識を有する知識人たちであるから、彼らにとって「学者たちの入門」は人生最初の入門ではない。ただしこの「学者たちの入門」は、後期ヴェーダから現れる贖罪儀礼としての「再入門式 (Punarupanayana)」とは別物である (梶原 2003a; 2003b; in press)。
- 51) つまり、ウパニシャッドが語る「学者たちの入門」の形式は、グリヒヤーストラの入門式の直接の前段階を示しているのではない (梶原 2003a: 5-9)。Cf. 渡瀬 1993: 81f.
- 52) 梶原 2003a: 6. 「学者たちの入門」を行うバラモン学匠たちは原則的に既婚の家長であり、入門後の学生修行生活は一時的なものである。Cf. 注 61; Kajihara 2014a.
- 53) 入門を願い出た者に対して「入門しなくても/入門させずに」教えることがある：ŚB 11.4.1.9 (ānupetāya); 11.4.2.20 (do.); ChU 5.11.7 (anupaniya)。
- 54) 類例：KauṣU 4.18 (cf. BĀU 2.1.14) (上記 (1b) (1d) の要素を含む)：tata u ha bālākiḥ samitpāṇiḥ praticakrama upāyānīti / taṃ hovācājātaśatruḥ pratilomarūpam eva tat syād yat kṣatriyo brāhmaṇam upanayet / ehi vy eva tvā jñāpayiṣyāmi / taṃ ha pāṇāv abhipadya pravavrajā 「それからバーラーキは薪を手にして戻った、『君に私は入門しよう』と[言って]。彼にアジャータシャトルは言った、『クシャトリヤがバラモンを入門させるなら、それはまさに逆順の形であろう。来い。君に私は教えよう』と。彼を片手でつかまえて、彼は出かけた」(cf. BĀU 2.1.14: taṃ pāṇāv ādāyottasthau; cf. also BĀU 3.2.13: āhara somya hastam)。このほか、入門儀礼の描写はないが教えを説く文脈で教える側が「来い」と言う例もある：JB 2.277: ehy ahaṃ tubhyaṃ devayānaṃ panthānaṃ vakṣyāmi 「『来い。私が君に神々に至る道を語ろう』と[牛はミトラヴィッドに言った]」；JUB 4.14.6—4.15.2: ta u śrameṇa tapasā vṛatacaryeṇendram avarurudhire. taṃ hocus ... tathā no 'nuśādhi yathā ... svargaṃ lokam iyāmeti. ... sa vā ehi hovāca. tasmai vai te 'haṃ tad vakṣyāmi yad vidvāṃsas ... svargaṃ lokam eṣyatheti 「一方彼ら(聖仙たち)は労苦によって、苦行によって、ヴラタチャリヤ(誓戒に携わること)によって、インドラを囲い込んだ。彼に彼らは言った、『我々が……天界に行けるように我々に教示してください』と。……彼(インドラ)は『来い』と言った。『私はその君(最年長の聖仙)に、それを知っていれば君たちが天界に行けるような……を語ろう』と」；cf. BĀU 2.4.4: ehy āssva / vyākhyāsyāmi te 「『来い。座れ。君に私は説明しよう』[とヤージュニャヴァルキヤはマイトレーイーに言った]」。後述 3.3 も参照。通常の入門儀礼には師が「来い」と呼びかける儀礼行為はない(ただし cf. VārGS 5.17 [Upanayana]: ehi brahmopehi brahma brahma tvā sa brahma

santam upanayāmy asau 「来い、ブラフマンへ。近づけ/入門せよ、ブラフマンへ。ブラフマンとして、ブラフマンであるおまえを、私は入門させる、何某よ」。

- 55) 言葉による渡り合いに敗北した場合や真実を知らなかった場合「頭がばらばらに弾け飛ぶ (vi-pat)」という表現がブラーフマナ文献から現れる (Witzel 1987)。注 66 も参照。
- 56) 前掲の諸類例参照。文学的技巧という面に加え、一部の王族がバラモンを論破することがあったなど、ある程度当時の状況を反映している可能性もある (Bodewitz 1973: 215ff.)。当時の王族のヴェーダ祭式への関与については阪本 (後藤) 2005; 2015: 95f. 参照。
- 57) Cf. ChU 5.3 (この挿話とパラレルであるが、ブラフマチャリヤの語はない。ただし「長く留まれ (vas「住する」)」という王の言葉がみられる)。
- 58) この挿話でも師の立場にたつのはバラモンではなく王である (cf. 注 56)。なお、アールニが入門したと伝えられる相手は複数いる: ŚB 11.4.1.9; KauṣU 1.1; BĀU 6.2.7 (ここに引用; cf. ChU 5.3.6f.); cf. ChU 5.11 (cf. ŚB 10.6.1)。アールニのブラフマチャリヤについては cf. JUB 1.42.1: āruṇir ha vāsiṣṭhaṃ caikitāneyam brahmacaryam upeyāya 「アールニはヴァーシシュタ・チャイキターネーヤに入門し [てそのもとで] ブラフマチャリヤに入った」。Cf. ChU 8.7.2ff (後掲: インドラが同じ師に何度も入門する)。
- 59) 知識を教わる前に一定期間をおく行為は、入門の際に入門者が一定期間師の胎児となってから新たに誕生するという『アタルヴァヴェーダ』以来の観念を反映しているとみられる (1.3.1; 1.4.2; 梶原 2003: 6; 11-12)。
- 60) Cf. ŚB 11.4.2.20 (一年間アドヴァリユであった者は教わるにふさわしい); 14.1.1.21-27 (ブラヴァルギヤ祭の秘義は一年間住んだ者に教えるべきである); 14.8.2.1f. (ブラフマチャリヤを住した後、語ってくれるよう乞う); AitĀ 5.3.3 (一年間住していない者に教えてはならない); ŚāṅkhĀ 8.11 (同左); PraśU 1.2 (同左); ChāgU 5 (同左); cf. JB 3.152 (ヴァルナ神がブラジャーパティ神のもとで百年間ブラフマチャリヤを住し Varuṇasāman を教わる); ŚB 2.4.4.4 (ブラフマチャリヤのために師のもとへ赴き祭式を教わる); BĀU 6.2.4-7 (上掲: アールニが息子に王のもとへ赴いて二人でブラフマチャリヤを住そうと言い、結局一人で赴いて王に入門する)。
- 61) Cf. Kajihara 2014a. 当時、成人したバラモン学匠は原則として既婚の家長であるから、彼らのブラフマチャリヤは秘義学習のための一時的なものである。その際、家長生活との最大の相違点は性的禁欲だったであろう。日常の家長生活においてはバラモン家長にとって規則に従った生殖活動は義務のひとつである。ただし家長も各種の誓戒の際には一時的な性的禁欲が要求された: TS 2.5.5.6 (新満月祭): tāsyaitād vratām: nānṛtaṃ vaden. nā māmsām aśniyān. nā striyam ūpeyān. ... etād dhī devāḥ sārvaṃ nā kurvānti // 「彼 (祭主) の誓戒は次のとおりである。虚偽を話してはならない。肉を食べてはならない。女に近づいてはならない。……というのは、以上すべてのことを神々は行わないから」; etc. 家長たちはすでに通常の入門と学習を終えているので、復習 (svādhyāya) もブラフマチャリヤの一部であった可能性がある。
- 62) 「はじめに」で述べたように、本稿では仏陀個人への弟子入りに便宜上「入門」という語を用いる。注 72 も参照。
- 63) māṇava-「弟子、生徒」については Parpola 1977 参照。
- 64) ajina-「[黒羚羊の] 毛皮 (=kṛṣṇajina-)」は、ヴェーダ文献ではブラフマチャーリンと各種シュラウタ祭の祭主が身につける。aja-「山羊」と ajina-「毛皮」については Mayrhofer 1986-1992: 51f. 参照。Cf. kārṣṇa-「黒 [羚羊の毛皮]」(AVŚ 11.5.6/AVP 16.153.6 [brahma-

cārīn 讃歌]]).

- 65) 例えば、偉大な学者たち (mahāśrottriya-) であるバラモンたちの訪問をうけたウッダーラカ・アールニが他の人物 (アシュヴァパティ王) を紹介する (ChU 5.11; cf. ŚB 10.6.1); アールニがジャイバリ王に「[私の] 子供のいるところで君が語った言葉、それを私に話してください」と乞う (ChU 5.3.6: yām eva kumārasyānte vācam abhāṣathās tām eva me brūhi; cf. BĀU 6.2.5 では入門申し込み有 [1.6.4]); 牛やインドラが「私は語ろう (vakṣyāmi)」と言う (注 54); ピッバラダが彼に入門を乞うたバラモンたちに一年間住すればという条件で「望むままに質問を問え」と言う (PrasU 1.2: yathākāmaṃ praśnān pṛcchata; cf. 注 48) など。バラモン学匠以外が教える例については、注 50, 54, 56 参照。
- 66) 上記注 55 参照。ウパニシャッドでは頭が「ばらばらに弾け飛ぶ (vi-pat)」, 初期經典では主に「破裂する (phal)」 「ばらばらに弾け飛ぶ (vi-pat)」等と表現される (Witzel 1987)。Sn 第 5 章の当該箇所では動詞は phal (Sn 983), pat (Sn 987), adhi-pat (Sn 989-990, 1025-1026) が用いられている。当該箇所については Insler 1989-1990: 116-118; 宮井 1997 も参照。
- 67) PTS ed. yada; *v.l.* yadi.
- 68) *v.l.* vivarati 「明らかにしている」。
- 69) いっぽう律典には、三帰依による在家信者の入門 (Vinaya I 16f.; 後述 [2.3.1.2]) のほか、弟子が代理で受戒させる場合は三帰依を三回唱えさせるという記述もある (Vinaya I 22)。
- 70) E.g. 『長阿含經 沙門果經』 (T 1: 109b; cf. 109c): 「白佛言、我今歸依佛歸依法歸依僧。聽我於正法中爲優婆塞。自今已後盡形壽、不殺不盜不姪不欺不飲酒。唯願世尊及諸大衆明受我請」 ([阿闍世王は] 仏に申し上げた、「私は今、仏に帰依します。法に帰依します。僧 [伽] に帰依します。私を正しい法の中で優婆塞とすることをお聴きとどけてください。今より後、命が尽きるまで、殺さず、盗まず、姪さず、欺かず、飲酒しません。世尊と皆さまは私の願いを明らかにしてお受けください」) etc.; cf. 注 122.
- 71) pabbajjā- 「[家庭から] 出て行くこと」。仏陀への入門と出家は直接にはつながらない。仏陀への入門場面出家と受戒が一对になって現れるのは、のちに受戒儀礼が僧団への加入儀礼として整備されてからの状況を反映しているとみられる (のちには仏教徒を志す者はまず若年期に出家し、成年に達してから具足戒を受けることが定められる [山極 1998])。後述するように、初期經典で仏陀に直接入門を申し込む人々は、すでに出家して何らかの修行を行っている場合が多い。それでも仏陀に入門する際には出家を乞う。これについては、「この出家受具を請う文句は經典中では定型化したものとなっていて、受具者には無反省に様にこの言葉を適用したものと見られる」 (佐藤 1963: 174); 「改めて仏陀の下で仏教的な出家生活する意味なのかも知れない」 (佐藤 1963: 231); 「仏教が……特殊な苦行者たちのあいだから徐々に発展した」 (中村 1992: 479); 「[これまでの生活から] 出て行く事」 (阪本 (後藤) 1994: 83); 「釈尊のもとでの出家は『再出家』ということになる」 (森 2003: 32; passim) などの解釈がある。ウパニシャッドの学者たちの入門が「再度の入門」であることは前述 (1.6.1)。
- 72) upasampadā- < upa-sam-pad 「近づく、到達する」。仏典の入門・受戒の文脈では「[仏陀ないし僧伽に] 近づくこと、入門、[僧伽での] 受戒 (cf. 注 5)」を意味する。本稿では翻訳の際には便宜上慣例に従って upasampadā- を「受戒」とする。Cf. 佐藤 1963: 171; 192: 「漢訳の律蔵で受戒、具足戒、受具足戒、進具、近円等と訳されているのは、ウパサンパダー (upasampadā) のことであるが、……このウパサンパダーの原意は取得、円具を意味して、律制上の意味としては仏陀または僧伽から認許されて『比丘たることを得る』を意味するものである。故に、

受具すなわちウパサンパダーは、本来は比丘戒でも比丘戒を受戒することでもない。……いずれにしても、受具は『僧伽の一員たること』を得ることである」；土橋 1968：214「つまり授戒儀礼をおこなうことは、……僧伽の一員としての資格をうること、またその自覚に立つことなのである」；阪本（後藤）1994：83f.：「upasampadā の語は『具足』ないし『受戒』と漢訳されるが、本来は戒律そのものとは関係なく、世尊のもとに弟子入りし（或いは比丘サンガの仲間入りをして）修行すること、即ち『入門』を意味したと考えられる。……仏教の upasampadā は出家・遊行・乞食・剃髪・修行者 (śramaṇa) の系譜の上に、ブラーフマナ・ウパニシャッド的な brahmacārin のありかたを継承・統合したものと理解される。やがて……細かく規定された正規の集会 (ñatti-catuttha-kamma「白四羯磨」) による入門へと制度が整備される。これに伴い、upasampadā も世尊への直接の弟子入りという当初の性格を失い、戒律を受ける方向に重点が移ったと考えられる」；阪本（後藤）2014：342：「入門は仏教では upasampadā-（漢訳「具足」，「受戒」）と呼ばれる。upa-sam-pad の原義は『（下位の者から上位の者へと）近づいて一緒にいる』である」。本稿では仏陀への直接の入門を論じるから、以下に検討する初期經典の upasampadā は「弟子入り」が文脈には合う。ただし後述のように、初期仏典では仏陀への入門の文言はかなり定式化した形で繰り返し現れることなどから、後に定着した upasampadā の「受戒、僧団への加入」という術語としての概念がいわば遡って仏陀への入門場面にも適用されている可能性、さらには入門の定型文自体が後代に本文へ付加された可能性も排除できない。

阪本（後藤）(1994, 2014) は upasampadā における再生の観念も論じている：「入門して比丘・比丘尼になることは……平等に仏陀の子として生まれ変わることでもあった。……出家に伴う髪・鬚の除去、……等を考慮すると、ここには過去の生活を捨て去り、新たに仏弟子として生まれ変わる (cf. upa-pad, sam-pad) という意味が浮かび上がり、死と再生の観念との密接な関係が看取される」(1994：80；84；cf. 2014：342)。仏弟子が仏陀の子であるという表現の例：DN III 81-84 (Aggaññasuttanta)：brāhmaṇā bhante evaṃ āhaṃsu ... brāhmaṇā va brahmino puttā orasā mukhato jātā brahmajā brahmanimmitā brahmadāyādā ... yassa kho paṇ'assa vāseṭṭha tathāgate saddhā nivīṭṭhā ... tass'etaṃ kallaṃ vacanāya：bhagavato 'mhi putto oraso mukhato jāto dhammajo dhammanimmito dhammadāyādo ti「バラモンたちは、御身よ、このように言いました、『……バラモンたちだけがブラフマンの息子たちであり、胸に属する〔実子〕で、口から生まれ、ブラフマンから生まれ、ブラフマンによって創造された、ブラフマンの相続者である』[と]。……『ヴァーセッタよ、ある人の信が如来に対して定着していれば、……その人はこう言うのがふさわしい、『私は世尊の息子であり、胸に属する〔実子〕で、口から生まれ、ダルマから生まれ、ダルマによって創造された、ダルマの相続者である』と』」etc. (cf. 阪本（後藤）1994：87f., n. 18)；cf. Theragāthā 889cd (Aṅgulimāla)：so' jja putto sugatassa dhammarājassa satthuno「今や〔私は〕よき境地に至ったダルマの王たる教師（仏陀）の息子である」。

ヴェーダの宗教では、入門儀礼における再生の観念が『アタルヴァヴェーダ』にはじまり後代の「再生族」に至るまでみられる (I. 4. 1)。[[師の] 口から生まれる]と表現される：ŚB 11. 5. 4. 17 (入門儀礼)：tā vā mānuṣyaḥ prajāḥ prajānanāt prajāyante. chāndāmsi vāi dāivyaḥ prajāḥ. tāni mukhatō janayate. tāta etaṃ janayate「人間に属する生類は生殖器官から生まれるのだ。韻律たちは神々に属する生類なのだ。それら（韻律たち）を人は口から生む。そこ（口）から彼（入門者）を〔師は〕生む」。Cf. RV 10. 90. 12 (プルシャの身体のうち口がバラモンとなる)；TS 7. 1. 1. 4 (Prajapati の口からアグニ、ガーヤトリー、バラモン等が生まれる)；etc. 一方、ウパニシャッドの「学者たちの入門」では、再生の観念は、学ぶ前に師のもとに止住するという慣習に

ある程度投影されているが（注 59）、その他の再生を示唆する要素（新しい衣の授与や髪と鬚の除去など）は言及されない（梶原 2003a; in press）。

- 73) MN PTS 版は Sn の Selasutta と同文であるとして本文を省いている。Theragāthā の対応は偈頌部分のみ。ここでは Sn から引用する。
- 74) ここに引用した Sn のセーラの説話には、いくつかの異読で「それを目的として在家の子らが……戻ることはない、と知った」の部分がない（PTS ed. p. 112）。
- 75) 帰依は、帰依の対象 (*acc.*) + *saraṇaṃ + gam* で表されるのが通例であるが（e. g. 上掲 Sn 142; cf. 上掲 Sn 570 [ā-gam]）、ここでは *saraṇaṃ + 仏陀 (acc.) + upa-i* で表現されている。*upa-i* はヴェーダ文献では「[師に (*acc.*)] 入門する」という術語として用いられるが（上記注 4; cf. 注 25）、仏典で *saraṇaṃ* と共に現れるときは「[仏陀などを (*acc.*)] 避難所として近づく、帰依する」を意味する; cf. Therīgāthā 249-250: *upehi buddhaṃ saraṇaṃ dhammaṃ saṅghaṃ ca tādināṃ ... upemi buddhaṃ saraṇaṃ dhammaṃ saṅghaṃ ca tādināṃ* 「『そのような仏陀に帰依せよ、ダルマと僧伽にも。……』[と尼僧は言った]。『そのような仏陀に私は帰依する、ダルマと僧伽にも。……』[とバラモンは言った]」。
- 76) Cf. 漢訳經典での例：『雜阿含經』（T 2: 308b: 火與婆羅門）：「白佛言、世尊、我今可得於正法中出家受具足修梵行不」（cf. 『別譯雜阿含經』 T 2: 466b）など。
- 77) Cf. SN I 172f. (Brāhmaṇa-saṃyutta Upāsakavagga Kasibhāradvājasutta: 在家信者となる); 『雜阿含經』（T 2: 27a-b: 耕田婆羅豆婆遮婆羅門：出家して阿羅漢となる）。
- 78) Cf. 『佛說鶡掘髻經』（T 2: 511a）：「即時捨腰劍 五體歸命佛 頭面而禮足 求爲作沙門 佛言來比丘 即受具足戒。……善來比丘、當修梵行於我法中、無憍慢意當盡苦源本」; cf. 『增一阿含經』（T 2: 720b）：「是時鶡掘魔、即前白佛言、世尊唯願聽作沙門。世尊告曰、善來比丘」; 『央掘魔羅經』（T 2: 532b）：「爾時世尊歎言、善哉善哉、央掘魔羅、汝來比丘。即成沙門」。漢訳經典における「善來比丘」の語の解釈については注 83 参照。
- 79) MN: tatth' eva maṃ pabbajjāṃ ayāci 「そして彼（仏陀）に出家を乞うた」。
- 80) Theragāthā 624-625 (Sunita): vanditvā satthuno pāde ekamantaṃ ṭhito tadā, pabbajjāṃ ahaṃ āyāciṃ sabbasattānaṃ uttamaṃ. tato kāruṇiko satthā sabbalokānukampako, ehi bhikkhū' ti maṃ āha sā me āsūpasampadā 「教師の足を敬ってから、一辺に立って、そのとき、すべての衆生のうちの最高者（仏陀）に、私は出家を乞うた。そして慈悲深くすべての世間をあわれむ教師は、『来い、比丘よ』と私に言った。それが私の受戒であった」; Theragāthā 870; MN II 100 (Aṅgulimālasutta) (上掲): tam ehi bhikkhū' ti tadā avoca es' eva tassa ahu bhikkhubhāvo.
- 81) Theragāthā 477-478: pabbājetvāna maṃ satthā vihāraṃ pāvisi jīno, anoggatasmim sūriyasmim tato cittaṃ vimucci me. tato satthāniraṅkatvā paṭisallānavuṭṭhito, ehi bhaddā ti maṃ āha sā me āsūpasampadā 「私を出家させてから、教師たる勝者（仏陀）は住处に入った。太陽が沈まないうちに、そのとき私の心は解放された。そのとき教師は軽視せず独坐から起き、『来い、バッドよ』と私に言った。それが私の受戒であった」; Therīgāthā 109: nihacca jānuṃ vanditvā sam-mukhā pañjali ahaṃ, ehi bhadda ti maṃ avaca sā me āsūpasampadā 「膝について敬礼し、面をむけて私は合掌した。『来い、バッドーよ』と私に〔仏陀は〕言った。それが私の受戒であった」; MN I 428 (下掲): ehi tvam māluṅkyāputta mayi brahmacariyaṃ cara. ahaṃ te byākarissāmi 「来い、マールンキヤープuttaよ。君は私のもとでブラフマチャリヤを行え。私は君に説明しよう」。Cf. Theragāthā 485: ajjadagge maṃ sopāka dassanāyopasaṃkama. esā c' eva te sopaka bhavatu upasampadā 「今日以降、ソーパカよ、私に会いに近づけ (upa-saṃ-kam [< kram])。それが、

ソーパカよ、君の受戒となれ」。

- 82) トゥルファン出土のサンスクリット仏典断片にも、*ehibhikṣukā*-「〈来い比丘よ〉という言葉、ないしその言葉による入門受け入れ」および *ehibhikṣukatā*、*ehibhikṣuka-pravr[ajita]*- という語が見いだされる (Bechert 1973-: 457)。榎本文雄教授のご教示による。
- 83) 入門 (受戒) の文脈における「善来比丘」が *ehi bhikkhu* に対応する術語であることについては次の指摘がある: 「*ehi* (来れ) の語に『善』の意味はないが、漢訳諸律では多くの場合『善来』と訳されている。おそらく十誦律の訳語が他に影響を与えたのであろうと思われる」(平川 2000: 133); 「『善来比丘』は漢訳の特殊な訳語のごとくである」(平川 2000: 157, n. 32)。Vinaya I 12 の *ehi bhikkhu* に対応する漢訳は、『四分律』(T 22: 788c) では「来比丘」, 『五分律』(T 22: 105a) では「善来比丘」となっている (2.3.2 で後述; cf. 注 125; 127)。初期經典でも、たとえば上掲の *Theragāthā* および MN の *Angulimāla* 経に内容が対応する漢訳經典には、「来比丘」も「善来比丘」も現れる (注 78)。「善来」の原語を *[su-]svāgata*- とする見解もある (但し cf. 平川 2000: 133)。丘山 et. al. は「善来比丘」を「よろしい、比丘よ」と訳し、「『善来』は *S. susvāgata* の訳。やって来た人を歓迎することば。出家を願う人に向かって仏が『善来比丘』と称すれば、沙門となることが許されたことになる」と注記して『増一阿含經』の迦葉の入門場面 (T 2: 621c) を挙げる (1995: 444f, n. 86: 「長阿含經 大本經」T 1: 9b 「佛言、善来比丘」に対する訳注; 当該部分訳注者: 神塚)。しかし、漢訳仏典で「善来」が *svāgata*- 「よく来た (welcome)」の意で用いられる例は確かに存在するものの、少なくとも入門・受戒の文脈における「善来比丘」については、「来比丘」と入り混じって用いられることから、原語は平川 2000 の指摘どおり *ehi bhikkhu* である可能性が高い。漢訳仏典はインドにおける各原典の成立よりかなり遅れて訳されたため、漢訳と原語の対応は必ずしも常に明らかではない (船山 2013)。次注も参照。
- 84) 漢訳經典で仏陀が「善来比丘」と呼びかける例はパーリ經典の *ehi bhikkhu* の用例数よりも多く、並行經典でも漢訳にしかみられないことがままある。主な用例は以下のとおり (cf. 『大藏經テキストデータベース』2012; 律典における用例については 2.3.2 で後述):
- 『長阿含經 大本經』(T 1: 9b): 「即白毘婆尸佛言、我等欲於如來法中淨修梵行。佛言、善來比丘。吾法清淨自在修行以盡苦際」(cf. 注 118)
- 『大般涅槃經』(T 1: 198b): 「我今欲於佛法出家。佛即喚言、善來比丘」
- 『大般涅槃經』(T 1: 204b): 「我今欲於佛法出家。於是世尊即便喚之、善來比丘」
- 『中阿含經』(T 1: 673a): 「世尊、願令我得出家學道受具足得比丘。世尊告曰、善來比丘、修行梵行」
- 『別譯雜阿含經』(T 2: 401c): 「唯願世尊聽我出家。佛言、善來比丘。鬚髮自落法衣著身、便成沙門獲具足戒」
- 『別譯雜阿含經』(T 2: 468): 「白佛言、唯願世尊聽我出家得及道次。佛言、善來比丘」
- 『佛說鶡掘髻經』(T 2: 511a): 「於我發慈心、沙門說此偈。即時捨腰劍 五體歸命佛 頭面而禮足 求爲作沙門 佛言來比丘 即受具足戒。……世尊作是說已。善來比丘、當修梵行於我法中、無憍慢意當盡苦源本」(前半は偈; 上掲)
- 『増一阿含經』(T 2: 800a): 「爾時施羅梵志告五百弟子曰、汝等各所好者各自誦習。吾欲於如來所善修梵行。諸弟子白曰、我等亦復欲出家學道。爾時梵志及五百弟子、各各長跪白世尊言、唯願世尊聽出家學道。佛告諸梵志、善來比丘。於如來所善修梵行漸盡苦原」(上掲)
- 『増一阿含經』(T 2: 621c-622b): 「唯願世尊聽我等得作沙門、修清淨行、諸佛常法若稱善來比丘便成沙門。是時世尊告迦葉曰、善來比丘、此法微妙善修梵行。……唯願世尊聽我等得作沙門。

世尊告曰、善來比丘。……願聽爲道。世尊告曰、善來比丘、善修梵行盡於苦際。……唯願世尊聽作沙門。世尊告曰、善來比丘、善修梵行盡於苦際」（前注参照）

『増一阿含經』（T 2: 720b）：「世尊、唯願聽作沙門。世尊告曰、善來比丘」

Cf. 『雜阿含經』（T 2: 250a）：「爲佛作禮合掌白佛、願得於正法律出家受具足、於佛法中修諸梵行。佛告長爪外道出家汝得於正法律出家受具足成比丘分。即得善來比丘出家」；『増一阿含經』（T 2: 558b）：「所謂善來比丘是」。

85) 生まれることが尽きることの知については榎本 1982: 71f.; 生まれることと輪廻の中の再生については後藤 1996: 97ff. 参照。

86) たとえば “holiness is completed” (Rhys Davids and Oldenberg 1882: 135) ; 「清らかな行いはすでに完成した」 (Sn 82 [中村 1984: 26]) ; 「真理探求のための禁欲的修行生活は完了した」 (do. 荒牧 1986: 111) など。一方「住する」という意味に重点をおいた訳に「修行（生活）が住された」（阪本（後藤）1994: 90, n. 39）；「梵行は住された」（Sn 82 [後藤 1996: 99]) ; 「禁欲修行は実践し終えた」（Sn 486 [榎本 1986: 193]) など。

87) パーリ語 *vusita-* は *vas* の過去分詞 *uṣita-* に語頭音 *v* の加わった形 (Geiger 1916: 72; 147). *Pāli-English Dictionary* (PED): *vusitaṃ brahmacariyaṃ*: “lived is a chaste life” (77); *brahmacariyaṃ vasati*: “to live a chaste life” (604). PED は 646 頁で *vusita-* を “fulfilled, accomplished; (or:) lived, spent (=vuttha); only in phrase *vusitaṃ brahmacariyaṃ* (... ‘the higher life has been fulfilled’)” とし、この語を *vosita-* のヴァリエントとみる提案を添えている: “Best fitting in meaning is assumption of *vusita* being a variant of *vosita*, with change of *o* to *u* in analogy to *vuttha*; thus=vi+osita ‘fulfilled, come to an end or to perfection’; cp. *pariyosita*.” PED 652: *vosita-*: “[vi+osita, pp. of *ava-sā*. See also *vusita* & *vyosita*] one who has attained (relative) achievement, perfected, accomplished, mastering, in phrase *abhiññā* one who masters special knowledge.” *ava-sā* の原義は「馬具を外 [して宿営] す」。パーリ語 *osāna-* (<*ava-sā*) は「終了 “Aufhören”」(Mayrhofer 1992-96: 720). 初期經典にはこの *khīṇā jāti vusitaṃ brahmacariyaṃ* ... のフレーズの直前に *brahmacariya-pariyosāna-* 「ブラフマチャリヤの終結 (<*pari-ava-sā*)」という語が現れる説話群がある (上掲 Sn 82; 566 など)。

88) *khīṇā jāti* に対応する知を含む仏教の三明が最初に説かれた箇所 (榎本 1981: 40f.; 1982: 63f.) に *vosita-* の語が現れる: SN I 167 (*Brāhmaṇa-Samyutta*): *pubbenivāsaṃ yo vedī saggāpāyaṃ ca passatī, atho jātikkhayaṃ patto abhiññā vositō muni, etāhi tīhi vijjāhi tevijjo hoti brāhmaṇo* 「以前の住処（前世）を知り、天界と地獄を見、生まれることの滅尽に到達し [てそれを] 知り、[修行を] 終了した聖者 [のみ] が、これら三つの知によって [真の] 三明をもつバラモンとなる」; cf. 『雜阿含經』（T 2: 309c）：「宿命憶念智、見生天惡趣、得諸受生盡、牟尼明決定、知心善解脫、解脫一切貪。具足於三明、三明婆羅門」。Dhp 423 ではこの偈に *sabbavositavosāna-* の語が加わる (榎本 1982: 64f.)。Cf. MN II 144 (榎本 1981: 42): *pubbenivāsaṃ yo vedī saggāpāyaṃ ca passatī, atho jātikkhayaṃ patto abhiññā vositō muni, cittaṃ visuddhaṃ jānāti muttaṃ rāgehi sabbaso, pahinajātīmarāṇo brahmacariyassa kevalī, pāragū sabbadhammānaṃ buddho tādi pavuccatī* 「以前の住処（前世）を知り、天界と地獄を見、生まれることの滅尽に到達し [てそれを] 知り、[修行を] 終了した聖者であり、心を、清まったあらゆる点で貪欲から解放されたものと知り、生死を絶ち、ブラフマチャリヤを自分のものとし、すべてのダルマの彼方に達した、そのような人が目覚めた人と言われる」。

89) Cf. 注 25 (*brahmacāryam + vas*) ; パーリ仏典: *brahmacariyaṃ vasati*; *brahmacariyaṃ vussa-*

ti (*pass.*) (PED 604). サンスクリット初期仏典: Sv (Gnoli 1977: 119): *kṣiṇā me jātir, uṣitaṃ brahmacaryam, kṛtaṃ karaṇiyam, nāparam asmād bhavaṃ prajānāmi*. ヴェーダ文献に *brahmacarya*- + *uṣita*- の用例はないが, cf. VāsDhS 24.6: *sa tad yad etad dharmaśāstraṃ nāputrāya nāśiṣyāya nāsaṃvatsaroṣitāya dadyāt* 「このダルマシャーストラを, 息子でない者, 弟子でない者, 一年間 [学生として膝元に] 住して (*uṣita*-) いない者に与えるべきではない」. ヴェーダ文献に *brahmacarya*- + *ava-sā* の例はない。

- 90) *vusitavant*-: cf. PED 646: “[*vusita*+*vant*] one who has reached perfection (in chaste living).” *vusimant*- という語もみられる: Sn 1115cd: *evamevaṃ abhiññāya tato tattha vipassati, etaṃ nāṇaṃ tathaṃ tassa brāhmaṇassa vusimato* 「そのように何度も知っては, そこから [の超越を] そこで見る, そういうこれが, 住し終えたそのパラモンにとって真如なる智である」(この偈の注釈 *Paramatthajotikā* は *vusimato ti vusitavantassa* とし, *vusitavant*- と同置している)。Cf. PED 646 (*vusimant*-): “[difficult to explain; perhaps for *vasimant* in sense of *vasavattin*] = *vusitavant* ... thus ‘perfected’.”
- 91) Cf. Mv III 395: *padyena kṛtana ātmanā abhinirvāṇagato vitirṇakāṃkṣo / vibhavaṃ ca bhavaṃ ca jñātva loke uṣitavāṃ kṣiṇapunarbhavo sa bhikṣuḥ //*
- 92) Cf. DN III 83; 133; SN III 193; etc. 類似の漢訳例: 『中阿含經 沙門二十億經』(T 1: 612b): 「若有比丘, 得無所著, 諸漏已盡, 梵行已立, 所作已辦, 重擔已捨, 有結已解, 自得善義, 正知解脫」等。「阿羅漢」の語が入るときは「梵行已立」は現れない: 『清淨經』(T 1: 75b; cf. DN III 133 *Pāsādikasutta*): 「若有比丘, 漏盡阿羅漢, 所作已辦, 捨於重擔, 自獲已利, 盡諸有結使, 正智解脫」等。初期パーリ文献におけるこの表現の多くはここに引用した MN I 4 とほぼ同文であるが, *vusitavā* の後に *brahmacariyo* を挿入する異読をもつ場合もある (AN I 144, n. 5)。
- 93) 漏 (*āsava*-) については榎本 1978 参照。
- 94) Cf. “a term (not in the strictly Buddhist sense) for observance of vows of holiness, particularly of chastity: good & moral living; ... esp. in Buddh. sense the moral life, holy life, religious life, as way to end suffering” (PED 494); cf. Gonda 1965: 299-309; 阪本 (後藤) 1994: 84: 「この *brahmacarya* は, 単なる (性的) 禁欲やパラモンを中心とする上層階級の通過儀礼的な学生生活ではなく, 最高原理 (*brahman*) に到達するための宗教的実践の総体を指す概念と理解される」. Cf. Sn 274ab: *dhammacariyaṃ brahmacariyaṃ etad āhu vasuttamaṃ* 「ダルマチャリヤ (ダルマに携わる行い) であるブラフマチャリヤ, これを最上の財産と人々は言う」。
- 95) 仏典をはじめとする非ブラフマニズム文献で, 「その宗教からみて真の」という条件つきで, ヴェーダの宗教の用語が, 元来の意味からさほど離れず, また必ずしも否定的なニュアンスを含むことなく, 用いられることは少なからずある。典型的な例は, 仏典およびジャイナ教典にみられる, その宗教が正しいとみなす行いをする人を出自に関わらず「そういう人を私は [真の] パラモンとよぶ」と謳う一連の定型詩である (Dhp 385-423; Sn 620-647; *Uttarajjhāyā* 25. 19-29; 34: cf. 荒牧・榎本・藤田・本庄 1986: 405, n. on Dhp 385)。Cf. *Vinaya* I 3: *yo brāhmaṇo bāhitapāpadhammo nihuhūṅko nikasāvo yatatto vedantagū vusitabrahmacariyo, dhammena so brāhmaṇo brahmacariyaṃ vadeyya, yass’ ussada n’ atthi kuhiñci loke* 「もしパラモンが悪いダルマを排除し, 不平を言わず, 汚れなく, 自己を制御し, ヴェーダの奥義に達し, ブラフマチャリヤを住しおえているならば, 彼に思い上がりが世界のどこにもないならば, 彼はダルマによってブラフマンの言葉を話してよい」(Trenckner et. al. *A critical Pāli dictionary* (*ussada*-) によれば *so* の後の *brāhmaṇo* は誤添加); Sn 463ab etc. Cf. 阪本 (後藤) 1994: 90, n. 39: 「仏教徒に限らず

当時の沙門・バラモン一般にとって brahmacariyaこそが修行生活の中核であった」；cf. also ibid., n. 40:「初期仏典において brahman は階級を超越した普遍的価値を持つ概念として理解される」；本庄 1979: 100:「初期の仏典では、ヴェーダ宗教における様々の宗教者名、たとえば, tapasvin, traividya, brāhmaṇa 等に、内面的な解釈を施し、単に、〈修行者〉一般を言いあらわすものとすることが多い」。一方、ヴェーダ外の宗教がヴェーダの用語を自らの宗教の思想に沿って再定義する場合もある。有名なものに、「三つ組の知識」(trayi vidyā)を仏教が本来の「三ヴェーダ」から「三明」(tisso vijjā)に読み替えた例がある（榎本 1981; 1982）。

- 96) Sn 400c: abrahmacariyā virameyya methunā「非ブラフマチャリヤである性交を避けるべきである」；cf. Dh 309ff.；cf. also Kajihara 2014a.
- 97) Cf. 『増一阿含經』(T 2: 666c):「當我爾時得此心，時欲漏有漏無明漏心得解脫。以得解脫便得解脫智。生死已盡，梵行已立，所作已辦更，不復受胎，如實知之」。ここに引用した MN I 23 については榎本 1982: 71 参照。
- 98) Cf. 榎本 2012: 152f. 漢訳では主語は仏陀ではなく、brahmacariya-にあたる語もない（『雜阿含經』T 2: 321a；『別譯雜阿含經』T2: 409b）。
- 99) Cf. Sn 567 (3.7 Sela, 前掲 **2. 1. 2. 2**): svākkhātāṃ brahmacariyaṃ selā ti bhagavā sandiṭṭhikam akālikam. 仏陀の教えの内容としてのブラフマチャリヤは「長く存続する」とも表現される：DN III 127 (Pāsādikasutta): tasmāt iha cunda ye vo mayā dhammā abhiññā desitā, tattha sabbehi' eva saṃgamma samāgamma atthena atthaṃ vyañjanena vyañjanaṃ saṃgāyitabbam na vivadi-tabbam, yathayidaṃ brahmacariyaṃ addhaniyaṃ assa ciraṭṭhikam, tad assa bahujanahitāya bahujanasukhāya lokānukampāya atthāya hitāya sukhāya devamanussānaṃ「それゆえに、チュンダよ、ここで私は、諸々のダルマを知ってから、君たちに教示した。それについてすべての者が集まり、集まって来、それぞれ意味と意味が、それぞれ表現と表現が、合誦されるべきであり、論争されるべきではない。このブラフマチャリヤが長く存続するように。そのことが多くの人々の利益のためになり、多くの人々の安楽のためになり、世間のあわれみのためになり、神々と人間たちの目的と利益と安楽のためになるだろう」。Cf. Gonda 1965: 299（上掲 Sn 693 の brahmacarya に関して）：“So important that even Buddha’s exemplary way of life could, so to say, be referred to by this term.”
- 100) 本節では、成道までに関しては、初期經典に加えて初期律典の仏伝の記述も適宜注記する。
- 101) 仏伝に語られる出来事がどの程度史実であるかは不明である。本稿では各エピソードにどのような語りの文言がみられるかに論点を絞る。
- 102) これが史実かどうか疑義を呈する説もある（並川 2005: 156-160）。
- 103) Cf. 『中阿含經 羅摩經』(T 1: 776b)「問曰，阿羅羅，我欲於汝法行梵行，爲可爾不。……汝來共領此衆。是爲阿羅羅伽羅摩，師處我與同等」。MN I 240 (Mahāsaccakasutta)；MN II 212 (Saṅgāravasutta) にも同じ入門説話がみられる（PTS 版では前出としてテキストは省かれている）。
- 104) この表現は他の經典にも現れる（DN III 129 Pāsādikasutta, etc.）。
- 105) MN I 165f. (Ariyapariyesanasutta): so kho ahaṃ bhikkhave ... yena uddako rāmaputto ten' upasaṅkamiṃ. upasaṅkamitvā uddakaṃ rāmaputtaṃ etad avocaṃ: icchāmi' ahaṃ āvuso imasmiṃ dhammavinaye brahmacariyaṃ caritun ti. ... ehi dāni āvuso, tvaṃ imaṃ gaṇaṃ pariharā ti. iti kho bhikkhave uddako rāmaputto sabrahmacārī me samāno ācariyaṭṭhāne ca maṃ ṭhapesi「さて私は、比丘たちよ、……ウッダカ・ラーマプッタのいるところに近づいた。近づいてウッダカ・ラーマ

ブッタにこう言った、『友よ、私はこの法と律においてブラフマチャリヤを行うことを望む』と。……『さあ来い、友よ、君がこの「ウッダカの弟子たちの」集団を率いよ』と「ウッダカは」言った。このように、比丘たちよ、ウッダカ・ラーマブッタは、私の同僚ブラフマチャーリンでありながら、私を師の立場に立たせた」。Cf. 『中阿含經 羅摩經』(T 1: 776c): 「問曰、鬱陀羅、我欲於汝法中學、爲可爾不。……汝來共領此衆。鬱陀羅摩子、同師處我亦如師」。

- 106) 2.1.2.2 参照。ブラフマチャリヤを行う意志表明による入門申し込みでは処格に師（「先生のもとで」「世尊のもとで」）が入ることが多いが、本節で引用した Ariyapariyesanasutta では dhammavinaye が入っている。經典では「法と律のもとで出家する」という表現もみられる：e. g. SN I 217: yaṃ tumhe evaṃ svākhyaṭe dhammavinaye pabbajitā …「君たちがこのように善く説かれた法と律のもとで出家して……」（仏陀の言葉）。仏陀がアーラーラ・カーラーマとウッダカ・ラーマブッタに入門する説話はパーリ律と『五分律』の仏伝にはない。『四分律』(T 22: 780b-c) にはみられるが仏陀のブラフマチャリヤへの言及はない。『根本説一切有部毘奈耶破僧事』(T 24: 119b-c) では梵行の語が現れる：「詣歌羅羅仙所。……問彼仙曰、汝師是誰、我欲共學梵行。……鬱頭藍……汝師是誰、我共修學」。Cf. Mv II 118f: tasya me bhikkṣavo etad abhūsi yaṃ nūnāhaṃ āraḍe brahmacāryaṃ careyaṃ … āraḍaṃ kālāmaṃ etad avocat // iccheyam ahaṃ bhagavato āraḍasya brahmacāryaṃ caritum; Mv II 119: iccheyam ahaṃ bho udraka bhavato brahmacāryaṃ careyam / sa ca me bhavāṃ udrako anujāneyā; Sv (Gnoli 1977: 97f.): sacet te āraḍa aguru careyam ahaṃ bhavato 'ntike brahmacāryam. … sacet udraka aguru careyam ahaṃ tavāntike brahmacāryam. 仏陀のブラフマチャリヤについては 2.1.5 も参照。
- 107) 初期仏典に antevāsin- は数回現れる：e. g. Theragāthā 334d (Sumana): antevāsi 'mhi sikkhito 「[[仏陀の] 近住弟子として私は学んだ」。
- 108) antevāsin- (Br+); sabrahmacārin- (Up+); ācāryā- (AV+). ヴェーダ文献ではヴェーダを教える師には ācāryā- の語が用いられる。sabhmacārin- と antevāsin- の用例数は多くないが、前者は同じ師のもとで学ぶ同僚学生をさす。後者は師のもとに住み込む弟子一般をさし、ヴェーダ文献では原則的にブラフマチャーリンのことである。ポスト・ヴェーダ期には学生以外の徒弟をさす用例も現れる：e. g. YājSm 2.184 kṛtaśilpo 'pi nivaset kṛtakālāma guror grhe / antevāsi guruprāptabhojanas tatphalapradaḥ // 「[[徒弟は] 技芸を[習い] 終えても、定められた期間は師匠の家に住み込むべきである。徒弟は師匠から食物を得るから、[彼の仕事による] 利益は[師匠に] 渡す」; etc. ダルマ文献における雇用労働者については山崎 1987: 63ff. 参照。
- 109) ウパカは仏陀に「友よ、君は誰を[師として] 指定して出家したのか。君の教師は誰か。君は誰のダルマに同意しているのか」と尋ねる(MN I 170f: kaṃ si tvam āvuso uddissa pabbajito. ko vā te satthā. kassa vā tvam dhammaṃ rocesi); cf. Vinaya I 8; Sv (Gnoli 1977: 132). Cf. Mv III 326: kaḥiṃ vo bho gautama brahmacāryam uṣyate.
- 110) Cf. MN I 249 (Mahāsaccakasutta); II 212 (Saṅgārasutta). これらにおける悟りの描写は：vimuttasmiṃ vimuttam iti nānaṃ ahoṣi. khīṇā jāti, vusitaṃ brahmacariyaṃ, kataṃ karaṇiyaṃ, nāparaṃ itthattāyā ti abbhaññasiṃ 「[[心が] 解放されたとき、『解放された』という智が生じた。『生まれることは尽きた。ブラフマチャリヤは住し終えられた。なされるべきことはなされた。もはやこの[輪廻] 状態に[戻ることは] ない』と私(仏陀)は知った」。Cf. 『羅摩經』(T 1: 777a): 「生已盡、梵行已立、所作已辨、不更受有。知如真」。
- 111) 梵天勸請説話の成立と展開については阪本(後藤) 1992 参照。
- 112) 諸仏典における五比丘の名前については北畠 1998 参照。

- 113) PTS ed. vabbhācitaṃ ; *v.l.* pabhāvitaṃ ; bhācitaṃ ; cf. Vinaya I 10 (bhācitaṃ). これらの異読については谷川 2000 参照。
- 114) Vinaya I 10 とそのパラレル（この箇所を含む）を論じた谷川 2000 によれば、この文の no, bhācitaṃ, etan をどう解釈するかについて先行研究の間に差異がある。bhācitaṃ の読みについては谷川 2000 : 35ff. ; cf. 上記注 113, 下記注 116.
- 115) Mahāsaccakasutta と Saṅgāravasutta の仏伝に初転法輪は含まれない。（五比丘への言及はみられる : MN I 247 (Mahāsaccakasutta) ; II 212 (Saṅgāravasutta)）。
- 116) Cf. 『羅摩經』(T1 : 777c) (仏陀の容貌がこれまでにない輝いていることを認めさせることで五比丘を説得する)。仏伝における五比丘説得の場面に、仏陀の言葉によるものと輝きを認めさせることによるものの二系統がみられることについては谷川 2000 参照 ; cf. 上記注 113.
- 117) 初転法輪を語る経典は数多いが、初めて説かれたとされる教えの内容は経典によって異なる（水野 1970）。
- 118) なお、本稿では仏陀に入門する説話に資料を絞っているが、仏伝研究では初期経典に含まれる過去仏に関する記述も問題にされることがある。仏陀の伝記と過去仏の伝記は類似を示すが、成立の前後関係は未詳である（中村 1992 : 7 ; 天野 2006）。過去仏の伝記の中でも特に詳細なヴィパッシン仏の説話では、最初の弟子の入門は次のように語られる : DN II 41f. (Mahāpadānasuttanta) : ete mayaṃ bhante bhagavantāṃ saraṇaṃ gacchāma dhammaṃ ca labheyyāma mayaṃ bhante bhagavato santike pabbajjāṃ. labheyyāma upasampadan ti. alatthum kho bhikkhave khaṇḍo ca rājaputto tisso ca purohitaputto vipassissa bhagavato arahato sammāsambuddhassa santike pabbajjāṃ. alatthum upasampadaṃ 「『私たちはここで、御身よ、世尊に帰依します、ダルマにも。私たちは、御身よ、世尊のもとで出家を得たい。受戒を得たい』と〔彼らは言った〕。比丘たちよ、王子カンダと王付司祭の子ティッサは、正しく完全に悟った阿羅漢たる世尊ヴィパッシンのもとで出家を得た。受戒を得た」。ここに描かれる入門形式（帰依の表明 + 出家と受戒を願う）は、初期経典の教説部分にみられる仏陀への入門形式とはほぼ同じである（2.1.2.3）。漢訳では二人はヴィパッシン仏への入門にあたって梵行を行うことを申し出る : 『長阿含經 大本經』(T 1 : 9b) : 「即白毘婆尸佛言、我等欲於如來法中淨修梵行。佛言、善來比丘、吾法清淨自在、修行以盡苦際。爾時二人即得具戒」（そこで毘婆尸佛に申し上げた、「私たちは如来の法の中で梵行を淨修したい」と。佛は言った、「善く來い、比丘よ。私の法は清淨自在である。修行によって苦の際を盡せ」と。その時二人は即座に具戒を得た）。
- 119) Cf. Mv III 329 (初転法輪) : mā bhikṣavo bhadravargīyā tathāgataṃ āyuṣmaṃvādena samācaratha // teṣāṃ dāni bhagavatā śikṣāvādenābhāṣṭānāṃ ... eṣa āyuṣmantānāṃ paṃcānāṃ bhadravargīyānāṃ pravrajyopasampadā bhikṣubhāvo 「『比丘たちよ、賢明な群たちよ、如来に対して「尊者」という言葉をもって振る舞ってはならない』。その時、世尊に教えの言葉によって話しかけられた彼らには……これが〔アージュニャータカウンディニヤら〕五人の賢明な群なる尊者たちにとっての出家と受戒であり、比丘になることであった」。
- 120) 平川 2000 : 97-178 ; 佐藤 1963 : 171-179 ; 土橋 1968 : 215f. ; cf. 船山 2013 : 243. パーリ律 Vinaya は上座部に属する。『四分律』は法藏部、『五分律』は化地部とされる。受戒捷度以外の文脈に仏伝を含む律典に、根本説一切有部の Sv (Gnoli 1977), 『根本説一切有部律毘奈耶破僧事』, Cps (Waltschmidt 1952-1962) があるが、これらは五比丘への初転法輪は語るものの、彼らの受戒儀礼には触れない。
- 121) Sv (Gnoli 1977 : 124) と Cps 3.8-9 (Waltschmidt 1952 : 88) では二商人は三帰依を行う。Cf.

平川 2000: 128-132.

- 122) 『四分律』(T 22: 789c):「前白佛言, 我今歸依佛歸依法歸依僧。唯願世尊聽爲優婆塞。自今已去盡形壽, 不殺生乃至不飲酒。是爲最初優婆塞三自歸, 耶輸伽父爲首」;『五分律』(T 22: 105b):「受三自歸次受五戒。是爲諸優婆塞於人中, 耶舍父最初受三歸五戒」。
- 123) Vinaya I 18; cf. 『四分律』T 22: 790b; 『五分律』T 22: 105c.
- 124) 受戒捷度の文脈外にある根本説一切有部の仏伝では, Ariyapariyesanasutta 同様, 仏陀は五比丘を説得した後すぐに説法に入り, 五比丘の入門儀礼の記述はない(『根本説一切有部毘奈耶破僧事』T 24: 127b; Sv (Gnoli 1977: 134); Cps 11. 13-14; 13. 2ff)。Cf. 谷川 2000: 21.
- 125) 『五分律』では仏陀の言葉に「善來比丘 (善く来い, 比丘よ)」と「善」の文字が入る(上掲の『四分律』では「來比丘」)。上記注 83; 84 参照。
- 126) いずれにも帰依はみられない。律典の仏伝では, 三帰依による出家弟子の入門は, 善來具足の希望者が増えたため弟子が代理で受戒させるときの形式として言及される (Vinaya I 22); cf. 佐藤 1963: 173-179.
- 127) Cf. Samantapāsādikā I 240: ehibhikkhū ti ehibhikkhu nāma bhagavato ehi bhikkhū ti vacanamattena bhikkhubhāvaṃ ehibhikkhūpasampadam patto; cf. 『摩訶僧祇律』(T 22: 412b):「四種具足法。自具足, 善來具足, 十衆具足, 五衆具足」(平川 2000: 111f. 参照)。
- 128) Cf. 『四分律』(T 22: 789a):「如是比丘, 賢聖弟子作是觀已厭患色已厭患便不著已不著便得解脫已解脫便得解脫智。我生已盡, 梵行已立, 所作已辦, 更不復受有。受想行識亦復如是。爾時世尊説此法時五比丘一切有漏心解脫得無礙解脫智生。爾時此世間有六羅漢, 五弟子如來至眞等正覺爲六」;『五分律』(T 22: 105a):「…梵行已立, 所作已作。説是法時, 五比丘一切漏盡, 得阿羅漢道。爾時世間有六阿羅漢」。
- 129) 仏典における ariya-「聖」については榎本 2009 参照。
- 130) 仏陀への入門に「薪」の要素がない点が初期仏典側の特徴であることは榎本文雄教授にご指摘戴いた。初期經典における祭火献供への言及ないし再解釈の例としては, cf. SN I 169 (Brāhmaṇasaṃyutta Sundarikasutta; **2. 1. 5** に一部上掲): hitvā ahaṃ brāhmaṇa dārudāhaṃ ajjhattam eva jalayāmi jotim, niccagginī nikkasamāhitatto arahaṃ ahaṃ brahmacariyaṃ carāmi / māno hi te brāhmaṇa khāribhāro kodho dhūmo bhasmani mosavajjaṃ, jihvā sujā hadayaṃ jotiṭṭhānaṃ attā sudanto purisassa joti / 「私 (仏陀) は, バラモンよ, [祭火に] 木を燃やすことをやめ, [自己の] 内にのみ光を輝かせている。常に [内に] 火をもち, 常に自己を定置し, 阿羅漢として, 私はブラフマチャリヤを行っている。というのは, バラモンよ, 君の慢心はカーリ (量の単位ないしその容器) の重荷であり, 怒りが煙であり, 妄言が灰の中にある。[正しい] 人にとっては舌が献供匙, 心臓が光の場所 (内なる祭火壇), よく制御された自己が光である」(この箇所については本庄 1979; 榎本 2012 参照) 等。
- 131) この箇所は少年のおそらく人生最初の入門の場面である。ただし入門の後で彼が教わるのは通常のヴェーダではなくブラフマンの秘義であり, 教えるのは牡牛, 火, 鶯鳥, マドグ鳥, 師であって, 物語としては「非伝統的師匠から秘義を学ぶ」というウパニシャッドの「学者たちの入門」の枠組みをとっている (梶原 2003a: 16, n. 13)。
- 132) 初期律典には次のような説話もある。ウルヴェーラ・カッサパは善來具足によって入門した後 (Vinaya I 32f.), 「仏陀とカッサパのどちらが師なのか」という周囲の疑念をうけて「世尊は私の師である。私は弟子である」と宣言する。その際, 仏陀の弟子であることと仏陀のもとでブラフマチャリヤを行うことが同置される: Vinaya I 35f. atha kho tesam dvādasanahutānaṃ

māgadhikānaṃ brāhmaṇagahapatikānaṃ etad ahoṣi : kiṃ nu kho mahāsamaṇo uruvelakassape brahmacariyaṃ carati, udāhu uruvelakassapo mahāsamaṇe brahmacariyaṃ caratiti. …/…/atha kho āyasmā uruvelakassapo utthāyāsanā ekamsaṃ uttarāsaṅgaṃ karitvā bhagavato pādesu sirasā nipatitvā bhagavantaṃ etad avoca : satthā me bhante bhagavā, sāvako 'ham asmi, satthā me bhante bhagavā, sāvako 'ham asmīti. atha kho tesam dvādasanahutānaṃ māgadhikānaṃ brāhmaṇagahapatikānaṃ etad ahoṣi : uruvelakassapo mahāsamaṇe brahmacariyaṃ caratiti. / 「そのときその十二万のマガダのバラモンたちと家長たちに次の〔疑問〕が生じた、『一体、偉大なる沙門（仏陀）がウルヴェーラ・カッサパのもとでブラフマチャリヤを行うのか、それともウルヴェーラ・カッサパが偉大なる沙門のもとでブラフマチャリヤを行うのか』と。……そこで尊者ウルヴェーラ・カッサパは、座から立ち、上衣を片肩にかけ、頭を世尊の足につけ、世尊に次のように言った、『御身よ、世尊は私の教師である。私は弟子である。御身よ、世尊は私の教師である。私は弟子である』と。そこでその十二万のマガダのバラモンたちと家長たちに次の〔考え〕が生じた、『ウルヴェーラ・カッサパは偉大なる沙門のもとでブラフマチャリヤを行う』と」。Cf. 『四分律』(T 22: 797c): 「世尊是我師，我是弟子。……時摩竭國人自相謂言，大沙門瞿曇，不從迦葉學梵行。迦葉及弟子衆，從大沙門瞿曇學梵行」；『五分律』(T 22: 110a). カッサパの「世尊は私の師である，私は弟子である」という言葉は經典にもみられる：e.g. SN II 220 (Kassapa-Saṃyutta)；『中阿含經頻鞞婆邏王迎佛經』(T1: 497c ff.)；『雜阿含經』(T 2: 303b)；『別譯雜阿含經』(T 2: 418b)；etc. この言葉だけでカッサパの受戒とみなす場合もある（佐藤 1963: 182；平川 2000: 115；166；森 2003: 115f.；森・本澤 2004）。

- 133) 本稿第2章で論じたように、初期仏典の仏陀への入門の場面では、ブラフマチャリヤを行うと表明するしないし行うよう仏陀に命じられるのは原則として出家弟子（比丘）である。ただし一部の經典には入門と関連しない文脈で在家信者にブラフマチャーリンという語を用いる例がある：DN III 125 (Pāsādikasutta): santi kho pana me cunda etarahi upāsakā sāvakā gihī odātavasanaṃ brahmacārino 「いま私には、チュンダよ、家をもち (gihin), 白衣の (odātavasana), ブラフマチャーリンであり (brahmacārin) 在家信者 (upāsaka) である弟子 (sāvaka) たちがいる」；cf. MN I 490f. (Mahāvaccasutta). ウパニシャッドの「学者たちの入門」では学匠たちのブラフマチャリヤは基本的に家長たちによる一時的なものであること（注52）、家長たちも祭祀の際には性的禁欲を課されること（注61）を参照。

- 134) Oldenberg 1886: 58f. は ŚāṅkhGS 2.1.1 (Upanayana 冒頭) に付された訳注。upa-i はヴェーダ文献では「〔師に〕入門する」という術語として用いられるが（注4）、仏典の善来具足儀礼には現れない。Cf. saraṇaṃ + acc. + upa-i 「〔仏陀などを (acc.)〕避難所として近づく、帰依する」（注75）。Gonda 1965: 301 は、グリヒヤーストラの入門式と仏陀による入門・授戒の言葉にブラフマチャリヤという語が共通して現れると指摘しているが、やはり初期仏典の入門と対応するのがグリヒヤーストラの入門式ではなくウパニシャッドの「学者たちの入門」である点を看過している。

- 135) Cf. 注71；72.

- 136) 上に論じたように、「来い (ehi)」という呼びかけは、ウパニシャッドでは「学者たちの入門」の儀礼要素となっている例が一定数あり、初期仏典では仏陀による入門受け入れの儀礼要素として定着している。ただし「来い」という呼びかけ自体はありふれたものであるから、儀礼要素としての色合いは場面によって濃淡がある。儀礼的色彩がさほど濃くない例に、BĀU 2.4.4: ehy āssva / vyākhyāsyāmi te 「『来い。座れ。君に私は説明しよう』」とヤージュニャヴアルキヤ

はマイトレーイーに言った]] (注 54 参照) ; Vinaya I 15 : ehi yasa nisida. dhammaṃ te desessāmi 「来い、ヤサよ、座れ。ダルマを君に私 (仏陀) は教えよう」 (五比丘に続いてヤサに仏陀が教えを説く場面。ここではヤサはまだ仏陀に入門していない。この後教えの場面とヤサの父の三帰依をはさんでヤサが出家と受戒を願い出、仏陀が ehi bhikkhu で始まる定型文で応えて善来具足が行われる) ; etc.

137) 神々が師の役割を果たす物語はあるが、その場合は入門する側も神々であることが多い (1. 6. 1 ; 4)。

138) 思想家同士が問答を交わす、問いに答えてくれる人のもとでブラフマチャリヤを行う、というモチーフは、仏典では古く Sn 第 5 章からみられる (2. 1. 1)。Cf. 後藤 1994 : 42 (ヴェーダの brahmódyā と初期經典 SN にみられる文言の類似に関連して) 「Buddha も学匠の一人として、当時の有力な学者・学派を凌いで成功を収めた訳であるが、彼と弟子たちの営為の過程にもことばによる決闘、謎かけ問答があったであろう。この種の文学の果たした役割を精密に検討することは仏典の成立・発展を考えるうえでも重要である」。

139) グリヒヤーストラの入門式は『アタルヴァヴェーダ』(1. 4. 1) やブラーフマナ (1. 4. 2) の入門儀礼にさらに多くの儀礼行為を加えたものである。簡略な概要は梶原 2013 参照。

略号

AitĀ = Aitareya-Āraṇyaka / AB = Aitareya-Brāhmaṇa / AN = Aṅguttara-Nikāya / AV = Atharvaveda / AVŚ = Atharvaveda Śaunaka recension / AVP = Atharvaveda Paippalāda recension / BĀU = Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad / Br = Brāhmaṇa / ChU = Chāndogya-Upaniṣad / ChāgU = Chāgaleya-Upaniṣad / Cps = Catuspariṣatsūtra / Dhṛp = Dhammapada / DN = Dīgha-Nikāya / JB = Jaiminiya-Brāhmaṇa / JUB = Jaiminiya-Upaniṣad-Brāhmaṇa / KāthĀ = Kātha-Āraṇyaka / KāthB = Kātha-Brāhmaṇa / KāthŚikṣU = Kātha-Śikṣā-Upaniṣad / KauṣU = Kauṣitaki-Upaniṣad / MN = Majjhima-Nikāya / MS = Maitrāyaṇī Saṃhitā / Mv = Mahāvastu / PB = Pāncaviṃśa-Brāhmaṇa / PED = *Pāli English Dictionary* (Rhys Davis and Stede 1921-1925) / PGS = Pāraskara-Gṛhyasūtra / PraśU = Praśna-Upaniṣad / PTS = Pāli Text Society / ṚV = Ṛgveda / ŚāṅkhĀ = Śāṅkhāyana-Āraṇyaka / ŚāṅkhGS = Śāṅkhāyana-Gṛhyasūtra / ŚāṅkhŚS = Śāṅkhāyana-Śrautasūtra / ŚB = Śatapatha-Brāhmaṇa (Mādhyandina recension) / ŚBK = Śatapatha-Brāhmaṇa (Kāṇva recension) / Sn = Suttanipāta / SN = Saṃyutta-Nikāya / Sv = Saṅghabhedavastu / T = 大正新脩大藏經 / TS = Taittirīya-Saṃhitā / TU = Taittirīya-Upaniṣad / Up = Upaniṣad / VārGS = Vārāha-Gṛhyasūtra / VāsDhS = Vāsiṣṭha-Dharmasūtra / YājSm = Yājñavalkya-Smṛti

参考文献

- 赤沼智善 1929. 『漢巴四部四阿含互照録』 破塵閣書房。
 天野 信 2006. 「『大本経』類における過去仏の初転法輪記事」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』 28 : 1-15.
 荒牧典俊 1984. 「原始仏教經典の成立について——韻文經典から散文經典へ——」『東洋學術研究』

23-1 : 53-67.

- 荒牧典俊・榎本文雄・藤田宏達・本庄良文 1986. 『ブッダの詩 II』. 講談社.
- 馬場紀寿 2010. 「初期経典と実践」『仏典からみた仏教世界』68-103. 佼成出版社.
- Bechert, Heinz (ed.) 1973-. *Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden. Begonnen von Ernst Waldschmidt, herausgegeben von der Akademie der Wissenschaften in Göttingen unter der Leitung von Heinz Bechert*. 6. Lieferung. Göttingen.
- Bloomfield, Maurice 1897. *Hymns of the Atharva-Veda together with Extracts from the Ritual Books and the Commentaries*. Sacred Books of the East 42. London.
- Bloomfield, M. and R. Garbe 1901. *The Kashmirian Atharva-Veda (School of the Paippalādas)*. Baltimore.
- Bodewitz, H. 1973. *Jaiminiya Brāhmaṇa I, 1-65. Translation and Commentary with a Study: Agnihotra and Prāṇāgnihotra*. Leiden.
- 1990. *The Jyotiṣṭoma Ritual. Jaiminiya Brāhmaṇa I, 66-364*. Leiden.
- Caland, W. 1919. *Das Jaiminiya-Brāhmaṇa in Auswahl. Text, Übersetzung, Indices*. Wiesbaden.
- 1920. *Brāhmaṇa- en Sūtra-aanwinsten. Verslagen en mededeelingen der Koninklijke Akademie van Wetenschappen IV* : 461-498. Amsterdam.
- 大蔵経テキストデータベース研究会 2012. SAT 大正新脩大蔵経テキストデータベース (<http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/index.html>).
- Delbrück, B. 1888. *Altindische Syntax*. Halle a. S.
- Edgerton, Franklin 1953. *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*. Vol. 2 : Dictionary. New Haven.
- 永ノ尾信悟 1992. 「グリフヤストラ文献にみられる儀礼変容」『東洋文化研究所紀要』118 : 43-86.
- 榎本文雄 1978. 「āsrava について」『印度学仏教学研究』27-1 : 158-159.
- 1981. 「仏教における三明 (tisro vijjā) の成立」『印度学仏教学研究』29-2 : 39-42.
- 1982. 「初期仏教における三明の展開」『仏教研究』12 : 63-81.
- 2009. 「「四聖諦」の原意とインド仏教における「聖」」『印度哲学仏教学』24 : 336-354.
- 2012. 「初期仏教における涅槃 —— 無我説と関連して ——」『佛教研究』40 : 149-160.
- 2013. 「セッション No. 1 の発表に対するコメント」『日本佛教学会年報』78 : 215-220.
- 船山 徹 2013. 『仏典はどう漢訳されたのか —— スートラが経典になるとき』岩波書店.
- Geiger, W. 1916. *Pāli Literatur und Sprache*. Strassburg.
- Geldner, Karl Friedrich 1951. *Der Rig-Veda : aus dem Sanskrit ins Deutsche übersetzt und mit einem laufenden Kommentar versehen*. Harvard Oriental Series 33-36. Cambridge, Massachusetts.
- Ghosh, B. 1982. *Collection of the Fragments of Lost Brāhmaṇas*. Calcutta 1935.
- Gnoli, Raniero ed. with the assistance of T. Venkatacharya 1977. *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu. Being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin*. Part 1. Roma.
- 1978. *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu. Being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin*. Part 2. Roma.
- Gonda, J. 1965. *Change and Continuity in Indian Religion*. Berlin.
- 1979. Upanayana. *Indologica Taurinensia* 7 : 253-259.

- 1980. *Vedic Ritual : The Non-Solemn Rites*. Leiden.
- Gotō, Toshifumi (後藤 敏文) 1987. *Die „Präsensklasse“ im Vedischen. Untersuchung der vollstufigen thematischen Wurzelpräsentia*. Wien.
- 1990. Materialien zu einer Liste altindischer Verbalformen: 1. *amⁱ*, 2. *ay/i*, 3. *as/s*. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 15, no. 4: 987-1012.
- 1994. 「Veda 祭式の brahmodya と Saṃyutta-Nikāya I 1,2,3」『印度学仏教学研究』43-1, 39-44.
- 1996. 「Yājñavalkya のアートマンの形容語と Buddha の四苦」『印度学仏教学研究』44-2: 94-102.
- 2007. 「śraddhā-, credō の語義と語形について」印度学宗教学会『論集』34: 578-561.
- 2008a. 「古代インドの祭式概観 —— 形式・構成・原理 ——」東京外国語大学アジア・アフリカ研究所『総合人間学叢書』3: 57-102.
- 2008b. Reisekarren und das Wohnen in der Hütte: *śālām as* im Śatapatha-Brāhmaṇa. *Indogogica*, Issue XX. T. Ya. Elizarenkova Memorial Volume, Book 1 (ed. L. Kulikov, M. Rusanov): 115-125. Moscow.
- Grassmann, Hermann 1873. *Wörterbuch zum Rig-Veda*. Leipzig.
- 1877. *Rig-Veda : übersetzt und mit kritischen und erläuternden Anmerkungen versehen*. T. 2. Leipzig.
- Hillebrandt, Alfred 1897. *Ritual-Litteratur. Vedische Opfer und Zauber*. Strassburg.
- 平川 彰 1970. 「原始仏教の定義の問題」『佛教研究』1: 1-18.
- 2000. 『律蔵の研究 II』平川彰著作集第10巻, 春秋社 (『律蔵の研究』山喜房佛書林1960 後半部の改訂版).
- 平岡 聡 2010. 「仏伝からみえる世界」『仏典からみた仏教世界』14-61. 佼成出版社.
- Hoffmann, Karl 1967. *Der Injunktiv im Veda*. Heidelberg.
- 本庄良文 1979. 「初期仏典における「沐浴者 (snātaka)」」『佛教論叢』22: 99-102.
- 井狩弥介・渡瀬信之 2002. 『ヤージュニャヴァルキヤ法典』東洋文庫 698.
- Insler, Stanley 1989-1990. The shattered head split and the Epic tale of Śakuntalā. *Bulletin d'études indiennes* 7-8: 97-139.
- Jamison, Stephanie W. and Joel P. Brereton 2014. *The Rigveda : the Earliest Religious Poetry of India*. 3 vols. Oxford University Press.
- Kajihara, Mieko (梶原 三恵子) 1995. The brahmacārīn in the Atharvaveda. *Journal of Indian and Buddhist Studies* 43-2: 1-6.
- 2002. The brahmacārīn in the Veda. The Evolution of the “Vedic Student” and the Dynamics of Texts, Rituals, and Society in Ancient India. Ph. D. dissertation, Harvard University.
- 2003a. 「ヴェーダ入門儀礼の二つの相 —— 通過儀礼と学習儀礼 ——」『佛教学セミナー』78: 1-20.
- 2003b. 「入門式 (Upanayana) と再入門式」『印度学仏教学研究』52-1: 22-24.
- 2004. The Upanayana and Marriage in the Atharvaveda. *The Vedas. Texts, Language & Ritual* (ed. A. Griffiths and E. M. Houben): 417-431. Leiden.
- 2005. 「ヴェーダ学習と誓戒」『小林圓照博士古稀記念論集 佛教の思想と文化の諸相』161-175. 禅学研究会, 京都.

- 2009/2010. The “*gṛhya*” Formulas in Paippalāda Saṃhitā 20. ZINBUN. *Annals of the Institute for Research in Humanities, Kyoto University* 42: 39-62.
- 2012. The Initiation Ritual (*upanayana*) in the Vedic Texts and Beyond. Paper presented at the International Symposium *Consecration, Initiation, and Enthronement Rituals in Ancient and Medieval India*. Kyoto University, December 2012.
- 2013. 「聖なる〈ことば〉の伝承——古代インドのヴェーダ学生をめぐる」『文化交流研究』東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要 26: 47-61.
- 2014a. *brahmacārīn, brahmacārya*, and Chastity in Vedic Literature. Paper presented at the 6th International Vedic Workshop, Calicut, January 2014.
- 2014b. Seizing the Novice's Hand and Pouring Water into His Hands at the Vedic Initiation Ritual. *Studies in Indian Philosophy and Buddhism* 21: 1-18.
- 2015. The Sacred Verse Sāvitrī in the Vedic Religion and Beyond. Paper presented at the 16th World Sanskrit Conference, Bangkok, June 2015.
- in press. The Upanayana and 'Repeated Upanayana(s)'. *Vedic Investigations* (ed. A. Parpola and P. Koskikallio), Motilal Banarsidass, Delhi.
- Kane, Pandurang Vaman 1974. *History of Dharmaśāstra. Ancient and Mediæval Religious and Civil Law in India*. Vol. II, part 1 (second edition). Poona.
- 片山一良 2012. 『パーリ仏典 相应部 (サンユッタニカーヤ) 有偈篇 II』大蔵出版.
- 北畠利親 1998. 「仏伝における五比丘」『北畠典生博士古稀記念論文集 日本佛教文化論叢』上巻 81-105. 永田文永堂.
- Mayrhofer, Manfred 1986-1992. *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen*, I. Bd. Heidelberg.
- 1992-96. *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen*, II. Bd. Heidelberg.
- 宮井里佳 1997. 「中国における「頭破作七分」の受容と展開」『佛教史学研究』40-1: 1-17.
- 水野弘元 1970. 「転法輪経について」『佛教研究』1: 114-92.
- 森 章司 2003. 「原始仏教聖典におけるバラモン修行者——*jaṭila* (螺髻梵志) と *vānaprastha* (林住者)——」『中央学術研究所紀要』モノグラフ篇 7, 論文 6.
- 2013. 「サンガと律蔵諸規定の形成過程」『中央学術研究所紀要』モノグラフ篇 18, 論文 25.
- 森 章司・本澤綱夫 2004. 「摩訶迦葉 (Mahākassapa) の研究」『中央学術研究所紀要』モノグラフ篇 9, 論文 8.
- 中村 元 1984. 『ブッダのことば』岩波文庫.
- 1992. 『ゴータマ・ブッダ I』中村元選集決定版 11, 春秋社.
- 並川孝儀 2005. 『ゴータマ・ブッダ考』大蔵出版.
- Narten, Johanna 1964. *Die sigmatischen Aoriste im Veda*. Wiesbaden.
- 丘山 新・神塚淑子・辛嶋静志・菅野博史・末木文美士・引田弘道・松村 巧 1995. 『現代語訳「阿含経典」——長阿含経』1. 平河出版社.
- Oldenberg, Hermann 1886. *The Gṛhya Sūtras: Rules of Vedic Domestic Ceremonies*, part 1. Sacred Books of East 29. Oxford.
- 1912. *R̥gveda. Textkritische und exegetische Noten. Siebentes bis zehntes Buch*. Berlin.
- Parpola, Asko 1977. Sanskrit *mānava (ka)* - ‘(Vedic) student, pupil (Brahmin) boy’ and the

- Religious Fast in Ancient India. *Studia Orientalia* 47: 151-163.
- Rosenfield, Susan 2004. *Kaṭha Brāhmaṇa Fragments: A Critical Edition, Translation, and Study*. Ph. D. dissertation, Harvard University.
- Renou, Louis 1949. Sur la notion de *brāhman*. *Journal Asiatique* 237: 7-46.
- 1964. *Études védiques et pāṇinéennes*, Tome XII. Paris.
- 1967. *Études védiques et pāṇinéennes*, Tome XVI. Paris.
- Rhys Davids and Stede 1921-1925. *The Pali Text Society's Pali-English Dictionary*. The Pali Text Society, London. (=PED)
- Rhys Davids, T. and H. Oldenberg 1882. *Vinaya Texts* I. Sacred Books of East 13. Oxford.
- 阪本 (後藤) 純子 1992. 「梵天勧請」の原型『印度学仏教学研究』41-1: 67-42.
- 1994. 「髪と鬚」『日本仏教学会年報』59: 77-90.
- 2005. 「王族と Agnihotra」『印度学仏教学研究』53-2: 58-64.
- 2014. 「出家と髪・鬚の除去 —— ジャイナ教と仏教との対比 ——」『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』334-349. 佼成出版社.
- 2015. 『生命エネルギー循環の思想 —— 「輪廻と業」理論の起源と形成 ——』RINDAS 伝統思想シリーズ 24. 龍谷大学現代インド研究センター.
- 佐藤密雄 1963. 『原始仏教教団の研究』山喜房仏書林.
- Schaefer, Christiane 1994. *Das Intensivum im Vedischen*. Göttingen.
- Schroeder, Leopold von 1898. Die Tübinger Kaṭha-Handschriften und ihre Beziehung zum Taittiriya-Āraṇyaka. *Sitzungsberichte der Wiener Akademie der Wissenschaften*, philosophisch-historische Klasse 137. 4.
- 下田正弘 2005. 「〈物語られるブッダ〉の復活 —— 歴史学としての仏教学を再考する ——」『長崎法潤博士古稀記念論集 仏教とジャイナ教』357-379. 平楽寺書店.
- Sūryakānta 1943. *Kāṭhaka-Saṃkalana. Extracts from the lost Kāṭhaka-Brāhmaṇa, Kāṭhaka-Śrautasūtra & Kāṭhaka-Gṛhyasūtras*. Lahore.
- 谷川泰教 2000. 「仏に二言はあるか —— 五比丘の帰仏をめぐる ——」『密教文化』205: 1-43.
- 龍口明生 1982. 「受具羯磨の変遷と異教徒の集団帰依」『印度学仏教学研究』30-2: 869-872.
- Thieme, Paul 1952. *Brāhman. Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 102: 91-129 (=Kleine Schriften I 100-138).
- Trenckner, V.; revised, continued and edited by Dines Andersen and Helmer Smith 1924-. *A critical Pali dictionary*. Copenhagen.
- 土橋秀高 1968. 「授戒儀礼の変遷」. 芳村修基編『仏教教団の研究』205-282. 百華苑.
- 辻直四郎 1970a. 『現存ヤジュル・ヴェーダ文献 —— 古代インドの祭式に関する根本資料の文献学的研究 ——』東洋文庫論叢 52.
- 1970b. 『リグ・ヴェーダ讃歌』岩波文庫.
- 1978. 『古代インドの説話: プラーマナ文献より』春秋社.
- Waldschmidt, Ernst 1952-1962. *Das Catuṣpariśatsūtra. Eine kanonische Lehrschrift über die Begründung der buddhistischen Gemeinde. Text in Sanskrit und Tibetisch, verglichen mit dem Pāli nebst einer Übersetzung der chinesischen Entsprechung im Vinaya der Mūlasarvāstivādins auf Grund von Turfan-Handschriften*. I, II, III. Berlin.
- 渡瀬信之 1993. 「Brahmacārin 前史」『東洋文化』73: 67-96.

- Whitney, W. D. and Ch. R. Lanman 1905. *Atharva-Veda-Samhitā*. Harvard Oriental Series 7-8. Cambridge, Massachusetts.
- Witzel, Michael 1974. *Das Kaṭha Āraṇyaka. Textkritische Edition mit Übersetzung und Kommentar*. Kathmandu.
- 1977. An Unknown Upaniṣad of the Kṛṣṇa Yajurveda: The Kaṭha-Śikṣā-Upaniṣad. *Journal of the Nepal Research Centre* 1: 139-153.
- 1979. Die Kaṭha-Śikṣā-Upaniṣad und ihr Verhältnis zur Śikṣāvallī der Taittirīya-Upaniṣad. §§ 1.1-1.7. *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 23: 5-28.
- 1980. Die Kaṭha-Śikṣā-Upaniṣad und ihr Verhältnis zur Śikṣāvallī der Taittirīya-Upaniṣad. §§ 2.1-7.6. *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 24: 21-82.
- 1987. The Case of Shattered Head. *Studien zur Indologie und Iranistik* 13/14: 363-415.
- 2004. *Kaṭha Āraṇyaka. Critical edition with a translation into German and an introduction*. Harvard Oriental Series 65. Cambridge, Massachusetts.
- 山極伸之 1998. 「律藏にみられる沙弥」『日本仏教学会年報』63: 65-86.
- 山崎元一 1987. 『古代インド社会の研究：社会の構造と庶民・下層民』刀水書房.

要 旨

前六-五世紀のインドでは、当時主流であったヴェーダの宗教思想に、秘儀的祭式の創出や輪廻思想の発達などの革新的展開が生じ、さらに仏教など新興の思想勢力も現れた。本稿は、古代インドにおけるヴェーダの宗教と初期の仏教の接点を、ウパニシャッド文献および初期仏典にみられる入門・受戒儀礼の比較を通して論じる。

ヴェーダの宗教における入門儀礼は、初期ヴェーダ文献『アタルヴァヴェーダ』（前十世紀頃）以降連続的に発達し、後期ヴェーダ文献のグリヒヤーストラ群（前三世紀頃）にて儀礼形式が完成する。ただし、中期ヴェーダ文献のウパニシャッド群（前六-五世紀頃）には、通常の入門儀礼とは意義と形式をやや異にする独特の入門儀礼が現れる。すでに入門儀礼を経てヴェーダ学習を終えたバラモン学匠たちが、当時創出されつつあった秘儀的な祭式や思弁を学ぶために師を探訪し、通常の入門とは異なる簡素な儀礼を行い、改めて入門するというものである。

いっぽう仏教における入門儀礼は、一般には戒律を受けて僧団に加入する受戒儀礼をさすが、本稿では組織的な受戒儀礼が成立する前に行われていたであろう仏陀その人への直接の入門の儀礼を扱う。初期仏典にみられる仏陀への入門の場面は、ウパニシャッドにみられるバラモン学匠たちの入門場面と、語りの枠組みも入門儀礼の形式も顕著な相似を示す。そのかわり、グリヒヤーストラが規定するヴェーダ入門式との類似を特には示さない。仏陀の在生年代がウパニシャッドの成立時期と重なることを考慮すると、後に初期仏典が編纂された際に、ウパニシャッド時代の知識人たちの間で行われていた入門の形式が、当時の知識人の一人であった仏陀とその弟子たちの間でも行われたように伝えられ、あるいは想像されて、説話の枠組みに取り入れられた可能性がある。

キーワード：入門式、善来、Upanayana, ehibhikkhu, upasampadā

Summary

This paper examines the particular similarities between the initiation rituals in the Upaniṣads and the early Buddhist texts. Around 6-5 BCE in India, the Brahmanical philosophy and rituals developed significantly. In this context, the Brahman scholars in the Upaniṣads are said to have sought those who knew the then-arising esoteric ideas and rituals, and asked them for initiation in order to learn. They are initiated through a peculiar rite, which is different from the traditional Vedic initiation ritual found since the Atharvaveda through the Gṛhyasūtras. As those Brahman scholars had already gone through the regular initiation and study, their initiation for learning such esoteric subjects is the “scholars’ [repeated] initiation.” On the other hand, in the early Buddhist texts, a number of stories include the scenes where people hear the Buddha’s preaching and ask him in person to make them his disciples. The style and the significance of this “initiation to the Buddha in person” are quite similar to those of the “scholars’ initiation” in the Upaniṣads. These kinds of initiation were performed through a practical and simple rite not by mere beginners but by learned scholars or ascetics who hoped to learn the innovative knowledge.

Keywords : initiation, ordination, *upanayana*, *ehibhikkhu*, *upasampadā*